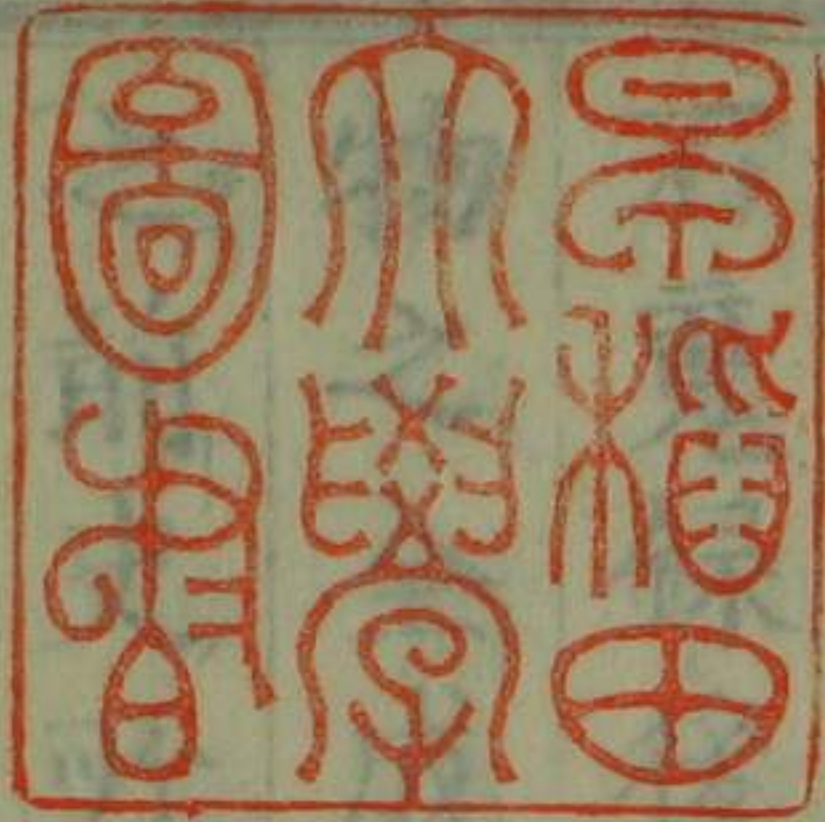




遠 13
門 708
卷 2



集序



先生之補類史有管諸生追加降迨若水
游傳非亦成於一人之筆者也予所著石
意錄前集三卷文化丁卯夏日應干書肆
堂之需刻之雖當時有後集全梓之
未暇其著遂愆歷數年鼓鶴堂沈大

明治三六年
十月九日
購



石菟錄後集序



物之全成。必有時矣。先朝所不有。後王綏
 之前史。所不足。後儒補之。是以史記有褚
 先生之補。類史有管諸生追加。降迨若水
 游傳。非亦成於一人之筆者也。予所著石
 菟錄前集三卷。文化丁卯夏日。應干書肆
 雙鶴堂之需。創之。雖當時有後集全梓之
 訂約。未暇其著。遂愆歷數年。雙鶴堂就木

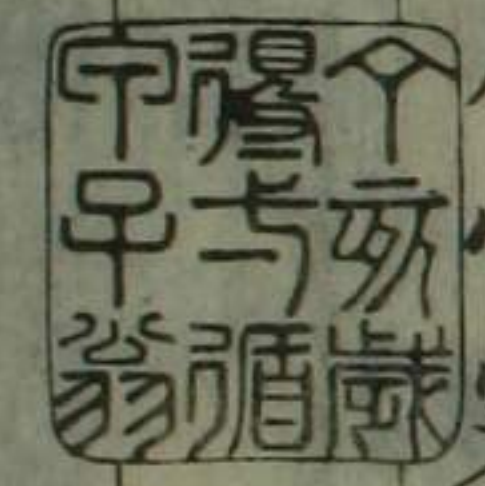
石菟錄後集序

卷之二

為是故前集亦隨廢刷印云時坊賈千翁
 軒以介購得其刻板因欲請於予令為全
 書自是之後討求累年不已以其請稍久
 故予意聊赴之今茲肇秋曝書間取曩篇
 三卷讀之邈然如隔世者即緣舊案以發
 新研黽勉續稿焉未至數月本篇七卷方
 成此後集之所以刊布于世也蓋人情數
 舊走時好也是舉也既後時好又索自售

寔獲免忘蹄者之所為非予之志也然自
 是書有前集二十有一年于茲物之全成
 必有時矣予之所未悉不俟後人之資手
 自續全之顧彼造物者倘使吾壽不憊
 地豈得而至於此哉自笑叨題于簡端
 文政十年丁亥冬十一月小寒前一日

曲亭主人撰



松浦佐用媛石魂録後集摠目録

卷之一

第十一回

渡海船中少年清談

第十二回

動磯高濤引亡骸

第十三回

神明監誠烈女得志

第十四回

逆旅初厄被俠者釋

第十五回

辨雞鳧無名氏垂警

第十六回

良僕夢寐摧美王

第十七回

再阨僅解遭舊僕

卷之二

卷之三

卷之四

卷之五

卷之六

卷之七

第十八回

認假爲真必有因

第十九回

五十毬宿親族再聚

第二十回

釋舊怨善贖新怨

第二十一回

執念入利鏹追夫妻

第二十二回

乾坤丸中亦復聚親族

第二十三回

賢寧凱旋大團圓

通計一十三回前集題目十回共為廿三回其十回以上

見前集第一卷簡端目錄終

喜

調

喜

調

前身不
識何說
後身

新羅國
胡和

新羅國
胡和

胡和

胡和

胡和



瀬川浦二郎選如

五十
絲秋



耳會遭

親

寛家何

處

おまひまや

林

と

輪

あ

田馬

村山俊平



偏哲其

邊

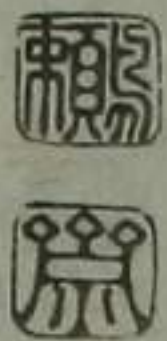
船場
輪栗



去留儘風
真別世界
あ乃難かとの

通門と舟人
渡るる
たの

世ぬを
あつたの



前筑紫探題
經高

檜垣轉馬

伊加太
浮篲



千變萬化
在汝術中
まはやくまはやく
むすまはやく
かひお給乃
まうりかたひ
まのほそり
ける

海原澳進易速

姥口歌二郎
得時

前の書前集三卷第一回より第十回文化四年丁卯の夏書肆雙鶴堂の需而心
 多く創さりて後又後集の討求ありと筆研煩言の故をいひて果
 さいけぬ雙鶴堂物語として刻板敷千枚子翁軒のゆめ落つるをりて千翁軒
 梓を續つき全せんといふ著者を乞ふ頻々之を舊作とて今さら稿を續つき
 欲せし且第十回の結局あり未の龍華王嶋母子兄弟再會し清繩自刃の段に至りて
 一部の趣向既全一又何事を綴起えとの故めその請を許諾し又五六年を
 歴る程翁軒屢柴扉を敲き請求するといふ急を以て已を得今茲病後ぬ
 研を發はして後集七卷を綴り做して稍責を塞ぬ前集發兌の歳よりして
 ちみ二千个年拙き隨ぬ老せぬ筆も又後集を續出せるを吁あいひてをりて
 前集首卷の附言め論詩歌する伊勢大和西語の例ぬ做して三三といふこと後集ゆ
 終るもの北條時宗時世るの鞍駢録淵鑑類函萬年草を引論を本文ぬの序る
 草子物語和漢の前輩から例する亦咎る足るものなり 曲亭主人再識

松浦佐用媛石魂録後集卷之一

東都

曲亭主人編次

第十回

渡海の船中少年清談也

再説瀨川采女吉次へ牛洲九郎清繩が追々雪中也との述を
 喪ひ路次の疲労を憇ん為肥前州末の龍華なる白屋に宿り討てたるも
 實母王嶋家弟浦二郎環會越よれ年來の宿願を果さぬらう
 母王嶋はその弟清繩が為自殺しく且子共の為公道を全うし清繩も亦先
 非を悔く首級を怪の吉次は贈らん為刃小伏し折る鎌倉の執權北條
 相摸守時宗朝臣の使者とて吉次が妻の父博多弥四郎が親族る博多
 倍太郎正延鎌倉より到着し執權の仰を傳へ即便吉次を返る歸路の船
 出を促りたる吉次は今さら母の亡體を捨て遠く東路を立歸るなり

張仲階が妻の故事ハ伊方里の段より

るれば。柩送の事。果をまき。要時の猶豫を乞ける。正延の孝義を感して。遂にその意を任し。旅宿へとを帰せける。是は。前集第十回の結局。されば。世の人の知。所なれども。既に居るの歲月を。歴て。今後集と。續き。若くは。只末と。視て。本と。なる。と。ひ。惑る人。も。あ。ん。然。と。り。く。選。忘。は。備。ん。る。は。彼。崖。界。を。奉。る。の。止。舟。説。休。題。有。然。程。は。瀬。川。采。女。吉。次。の。弟。浦。二。郎。と。相。計。す。次。の。日。母。の。亡。骸。と。外。叔。父。清。繩。が。亡。骸。を。柩。に。斂。め。く。程。遠。く。ぬ。菩。提。所。る。山。寺。に。葬。る。程。に。里。人。亦。も。これ。を。賃。け。く。柩。を。送。る。の。事。に。あ。り。て。中。小。日。下。親。の。め。と。り。と。も。動。せ。れ。ど。吉。次。と。浦。二。郎。と。認。違。て。応。答。不。都合。の。縁。由。を。稍。安。知。り。て。駭。嘆。せ。る。事。も。な。り。け。り。宜。き。事。も。瀬。川。采。女。と。浦。二。郎。の。双。見。ゆ。く。その。相。貌。の。肖。ふ。ゆ。ゆ。と。お。の。ゆ。い。ぶ。る。進。止。咳。逆。く。ま。も。孰。を。兄。孰。を。弟。と。う。た。げ。れ。ば。彼。張。仲。階。が。妻。の。ま。り。母。王。嶋。ま。り。初。對。面。は。吉。次。を。認。て。浦。二。郎。と。ど。い。違。へ。く。疎。忽。と。似。く。疎。忽。と。あ。ら。ぶ。り。た。と。思。も。甲。斐。亮。胞。兄。才。の。過。去。を。

曾。あ。の。偶。々。は。餘。の。袖。の。露。檐。下。の。垂。氷。凍。解。て。荒。る。離。色。は。咲。く。梅。の。世。に。春。の。影。が。春。の。影。に。ぬ。夏。愛。身。の。哀。れ。淡。雪。の。消。る。早。庭。面。を。う。た。げ。へ。會。者。定。離。人。世。無。常。迅。速。の。理。を。觀。ど。て。家。庶。簞。の。看。經。も。果。敢。る。香。の。烟。より。立。と。も。る。日。數。麻。呂。と。初。七。日。ま。り。あ。け。り。の。程。は。浦。二。郎。の。叔。父。清。繩。が。云。云。と。説。遺。し。る。締。の。趣。此。度。吉。次。が。歸。路。の。厄。難。を。拯。げ。た。計。策。箇。様。々。と。具。く。吉。次。は。頭。を。うち。掉。す。る。も。亦。牛。洲。の。臨。終。は。い。れ。り。彼。八。の。引。人。と。の。代。と。あ。る。謎。々。と。和。殿。の。注。と。ま。る。を。解。く。を。その。意。を。問。れ。ば。八。の。引。人。を。合。せ。れ。ば。是。弟。と。い。ふ。文字。は。あ。ら。や。和。殿。と。これ。は。面。影。の。う。た。げ。た。ま。り。と。肖。ふ。ゆ。ゆ。と。お。の。ゆ。い。ぶ。る。如。く。打。扮。し。て。鎌。倉。遺。ま。と。も。誰。う。吉。次。と。ま。り。と。思。ふ。事。も。福。を。遭。う。事。も。及。び。て。和。殿。の。其。如。く。命。を。預。け。し。る。の。獨。志。も。も。弟。を。殺。し。て。何。も。せん。禍。あ。ら。ず。と。思。ふ。ゆ。ゆ。と。お。の。ゆ。い。ぶ。る。天。命。は。任。ま。る。是。勇。士。の。本。意。と。も。彼。説。の。一。切。後。ひ。く。と。い。ふ。浦。二。郎。は。

わむ宣趣理のまれば吾侪のどよと違へ既ちん刃と主君あり且経高征
 伐の軍監と一と功をたはらむ然るも未だの禍を知りて命を失ひぬる身は損む
 のまらざる鎌倉殿の武威を損なはれ大身不忠なるも其の又これと異に家は事
 親のまじく國は使はれたる君も一死して損みく生て益あり且亡母の夜話も豫て
 昔より同胞の生れと死境の宮の神の示現は兄弟の性伶俐とあるも
 その才長れども兄弟社年ふく厄難あらん弟の母は養せまを託宣ありよしと
 どの口ごが家兄のまらざるも亦脱れぬ禍のあるべしかれが代る代るふ
 あらむ枉くこの説の後ひぬと辭を盡し諫へ吉次要時沈吟し
 より黙止しつゝまらわれども今ゆゑは和殿あつた月のお扮せし鎌倉遣はるは
 唯君を欺く所詮同胞同船と鎌倉へ歸るゝとどども平介之再二再四
 尋思と緯の便宜は後へたのまらざるもいそいで否ともひらけ浦二郎も亦

うち按しつゝまらざる宣への目今規定せらるるね猶處分を俟んを就く聊
 情願あり亡母の世に在せしと死媒妙ありてふが婚嫁を結むるも當國彼杵郡
 る伊万里の庄の郷士と根塚氏の獨女と糸秋とつと妙に只結髪一のまら
 る迎も取らざるより一件の舅根塚氏去歳の比より足痛の持病をこりて行步慥
 るに徒は日と過せども既して秦晋の好を結びし母の身も又
 其も鎌倉へ赴くよと彼人々も報知せしが恨られんが兄怙恃の眞愛ありて發足
 延引るのよ博三氏も鎌倉へ既して注進せられん其伊万里に到りて
 立ちの来る程の逗留はる許されぬ然るもその程の心のよと強くも
 とのよめわむとん意見のよめやと問れて吉次うち領死をよと告られ宣
 和殿のよと初七日はるのよも倍太郎より催促するのよの閑を待るのよ
 伊万里のよと鄰郡のよと山河を隔るよと旅るよと疾歸るよとよ浦二郎

歡び猛小旅の準備とてその宵へ同胞も移れし行末も是彼と語り曉く
 八声の鶏と共に時をゆくも弟を送る別れ路のあふもるあんと後むを合
 ける有斯而る次の日ふ博多倍太郎が消息とて奴隸使の齎し來り呼門高く
 名告とされ吉次もつら受取りて且その状を披見するも曩昔慈母の柩送りと果
 々後ふとあんと願ひの黙止くも実政朝臣も告えあけて既に七日の免許を
 得たりければよし出仕しる船と急ぎ某某の口今發足陸路と鎌倉馳歸て
 これらうと執權は告えあべんと必死の舟行の速るぬまわれ又風濤の障りあ
 ずく船歌よりのくの日と費人の計りてあざとく同船せむ木女曲の東歸の後ふ
 ても餘の面會は聲なきれ勿々不備と書れと吉次もよく讀く後悔する
 正大なるむ有えせ浦二郎を伊万里へ遣りまはれ彼らも來り我を
 むら中へ抜けりと怨ませんはれがと今さう一日も俟てとあわぬ切て下馬送

さとく有つうと如此と書きし陸奥紙の書札の文多れ苦くも出居の
 柱は貼著る出仕の準備と急んと萌黄威の身甲ふ近属妻の秋布が百首の
 歌を織做る恩賜の錦の戦袍を綺羅穿ふ夜下く黄金造の大刀と跨り
 武者草鞋を穿占く立出んとあつらける折々瀬川が徒者ホの緯のたろを
 ゆるけん兼馬鑣僕柳宮食うち揃りてあつらゆるあつらゆると呼門を庭門挾
 し居られり吉次遙これをも之欣然とて清繩が首級函遞すも若黨は
 門の戸閉もといひく内りと馬もち跨るを目送る人もる宿の隣りも長反故
 捷徑問ふらと弦案山子も彎く矢田の津の陣屋を投ぐも幾多さる程ふ
 北條上總が実政のこの日瀬川吉次が出仕の告えありしより轅門は敷皮布せ
 且吉次は對面し牛淵九郎清繩が首級実檢の化法あり緯果も実政も
 清繩誅伏の緯の趣を顛末と問ふ吉次は此も隠さむ母玉嶋の義は付く

みづから刃を伏し清繩最後の為体第浦二郎がらまき送る報
 夫実改頻く嘆賞と敵より清繩の知命の勇士といふ況て王嶋が義
 死の趣この母のあの子のいと惜む死のともなりと泉下の人とちりぬときけら
 追薦よままのる。げよろし後の佛支の实政宜く沙汰せん。あれらの
 懸念せむと鎌倉へ帰る。抑此回執權の吉次を召さる。御用何事と
 ねども。下七日を寛べの情を奪ふと思ひく。実改が愛願へ恨す所経高成
 し。一時は攻潰さぞ犄角の勢ひのや似れと遠くを彼賊將を擒せん
 と疑ひる。よく愚按を回さる。西海の乱をあり緑林錦帆丸ふ起す。渡
 海といふも容易く。今又これ加る。清繩が船蘭渡の残兵脱れ海賊と
 ろんぬ。又是忘る。大事の和殿の度舟行を帰る。これらの穿鑿肝要らん
 くれ百名の勇士を擇く和殿の援とる。通途功の謝せとて遲滞の

罪を贖ふ足る。博望の今朝も陸路とらぬ。今は選々軍船の
 漢より何ものとも無き誘とくと急しく身の暇を賜へ。吉次一議を
 あく言受らる。大將軍配遠慮は過く。今百名の兵士と其を送る。必
 途は禍のあらずと考れ。後の本用意のこの議あり。神佛の冥助
 るん。とあり。帰帆の勇まわり欣然と。辞去り。船を港口に赴く程。
 彼百名の兵士一箇々々名簿を捧げ。吉次は後者共侶。一船を乗
 たりける。時矢男陣中より。病あり。吉次が船に附く。鎌倉へ帰
 らんと。港口を投ぐ。あれ。吉次一箇を許さる。便船を請ふ。
 あり。竊に同船せむ。その罪見彼等。わん。この緊く。徇知く。皆悉追
 返せ。年尚く。一箇の男。けん兵士。財物。賄賂。便船。吉次
 吉次も後者も。絶く。然る程。日順風。船を忽地

あしとこれをもて供仕の御制林を犯せしもの罪万死に當れども窮鳥懐
 入るとは擣師もこれを捕らざるといふも旅の道伴世の兼愛猶且脚底を仰ぐの
 某姓の姥口氏歌二郎と呼ぶの凡観音寺へ人をまわすに問せらるる分明ならずと
 あそく演うける辯舌最も爽ゆく現理のまげえり吉次あひ感ひん怒氣を
 飲めくうち領院陳ぶる趣意言ふと隣むらぬのめ十七今試ま問う
 あり海上月明ふく金波巖と洗ふの夕詩を吟節と拍と母の雅客遊ぶ
 あく玉笛の声聴ふ勝りあれども只弄ぶるに留を何木の物とまをる真の
 好事とほる足らざる笛の濫觴のいふをよと詰問れ此の擬議其宣の所實な
 然之夫笛の雅笛あり又羌笛あり雅笛は樂を用ふへ羌笛は胡笳の類あり
 その形制と所始と舊説總く同くは嘗昔周礼を案ぶるに笙師と篪
 遂と教る工を掌るものこととをり或は漢の武帝の時丘仲始く笛を化せり

又一説の羌人より起るといへり漢の馬融が賦に由るは長笛空洞底刺あり
 その上孔の五孔あり一孔の背ふ出く今の尺八ふく似たり木子善これに注下
 あく七孔の長一尺四寸この今の横笛の太常鼓吹の部中横吹と云即これ
 ろの詳にせまく欲せ馬融が賦を照く考めて崖略よと懸問の辨ふ
 説諦を奇才の感むる吉次の類く膝の進むを覺えむとひまや今の世ふ
 かる少年あんと経高の只武勇誇りて人を知る眼力足らぬが逸ま
 清繩一箇を用ひてこの姥口を任用せらるる又只國家の洪福に彼清繩の経
 高が范増するべれも運竭ぬれみづら測らば慢小飛蘭渡の此を後
 棄く身は龍華の旅宿ふ死し清繩既に亡びて経高の會ふに翅る死
 のよ似たり滅亡せんと眼前されども事果むる久歸ると送憾限りよあそと
 いひく嗟嘆まらるる歌二郎微笑くそ又宣ふとら彼牛淵九郎が如死

玉笛鳴
多歌郎
瀬川吉次
論破



石坂録

廿

千



石坂録後集卷之一

三

千

堀口歌二郎

瀬川吉次

謀ありと云ども己を知りて敵を知らねば。僅に潜謀の術を頼る其処は自滅を取
 まるのまれば。己を知らず敵を知り己を知りて戦ふの必克敵を知りて己を
 まる己を知りて敵を知らねば。必危く敵を知らず己を知りて戦ふの必敗
 と云ふ。經高の謀の猛將僅に孤城に依るといふも。実政ゆへ遠慮小過
 還く時と失ふの今攻むを攻むと。渠が自滅を俟のこれ弱將の所行也。
 天の時と失ふの秋孫子將を英雄の心残攬といふも。合点せられぬ故也。
 あらん。縦此度の軍の克とも。經高を擒まんといふ。覺束るべき。此れ軍果に
 一々鎌倉へ召れぬ。君が幸するまや。といわれ。吉次駭くま。いふ。歎息する
 折ら。遠寺の鐘の聲遙く響く。宵の子の真中。なりの吉次耳を敵く
 二六時中の鐘の數六より六は。迫ると大玄經は由るといふ。具するよ。ゆる
 深意あり。ゆるふま。といふ。歌二郎又合て某堂南村が納音の編成

閱せし。金の音ハ四九。木の音ハ三八。水の音ハ一五。火の音ハ一六。
 土の音ハ二七。これと不易の論といふ。何と云ふ。甲子午の數
 九。乙庚丑未の數九。丙辛寅申の數七。丁壬卯酉の
 數六。戊癸辰戌の數五。己亥の數四。かゝる。今の
 鐘の數ハ六十。甲子納音の音數。よ。又疑ふ。足るの。回
 毎小古書を引く。辨才博識意外に出れば。吉次頻々感服。これけ。ま
 むる才子を識ら。過せ。悔。ま。あ。今宵目今。この良縁を天の
 賦の好友と。船中の徒然を慰ら。これ生涯の大幸。叙小字向せ。海
 ほ。某曾夜学。と。淵鑑類函を繕。その書の中。あり。元
 姚相壽曾云。大漠迤西俗。能羊を種。とあり。凡羊を屠る。その皮肉を
 啖。惟その骨を留置。初冬末の日。埋。これを地中。小著。春陽季月

上の未^ミ。胎^トを吹^フて呪^ク語^ヲまれば子^コ羊^ニありと土^{ツチ}中^ノ出^デ凡^{ソノ}骨^{ハツ}一^ツ具^ヲを埋^ム。子^コ羊^ニ数^ス隻^ヲとゆると英^イ西^シ四^シ生^シ胎^ト外^ノの亦^モ是^レ一^ツ化^トといひて波斯^{ペルシヤ}國^ノ亦^モ亦^モあり。脛^ケ骨^ヲを種^クるも輟^テ耕^ク録^ニ又^モ云^フ漠^{モク}北^ノ羊^ニ角^ノのくこれを地^チ中^ノに種^クると亦^モよく羊^ニを産^ムるとその大^オ鬼^ノの如^クこれ食^チへ肥^マく美^シく劉^{リウ}子^シ觀^ク董^{トウ}編^{ヘン}晋^{シン}文^{ブン}の菜^{サイ}を種^クつ曾^{ソウ}子^シのよく羊^ニを種^クる非^ヒ性^ノ圖^ト蠹^ク方^フ隅^{ヨク}を辨^ベせむ。その運^{ウン}大^{ダイ}るると小^コ務^コ子^シの習^{シヨク}るるとある細^{サイ}注^{チュウ}羊^ニの皮^ヒ皮^ノ判^ハ判^ハり。あれを土^{ツチ}に種^クる西^シ海^{カイ}火^カ羊^ニの胎^トのく土^{ツチ}中^ノに種^クる水^{スイ}を慨^カだ雷^{ライ}鳴^{メイ}茂^{モウ}茂^{モウ}と云^フ胎^ト系^{ケイ}地^チ中^ノに生^シ出^デる長^{チカ}むる及^キくこれを駕^カする木^キをのく棚^ナと云^フ。その胎^ト断^{タン}れると便^{ベン}行^{キョウ}又^モよく草^{クサ}を齧^カる至^シる秋^{アキ}に至^キく食^チへ胎^トの内^{ウチ}に種^クありと四百^{シヨク}三十六^{サッロク}卷^{クワン}小^コ疑^ギるるとこの大^オ疑^ギるると羊^ニの骨^{ハツ}を種^クる子^コ羊^ニ殺^スると人^ニ火^ニ是^レ則^{スレバ}理^リ外^ノのるるとされども宇^ウ宙^{チュウ}の理^リと性^{セイ}のるるとされれば理^リ外^ノの理^リと

のの又^{マタ}あづもあづも。和^ワ殿^{テン}の論^{ロン}辨^{ベン}はまほ。と云^フの歌^カ二^ニ郎^{ロウ}ち咲^キく今^{イマ}愚^グ按^アどこのくると云^フの獸^ノの羊^ニありと羊^ニに似^ニる草^{クサ}るると近^{チカ}属^{ジュク}或^シ書^{ショ}と云^フ。小^コ魯^ロ西^シ亞^ヤ國^ノ一^ツ種^ノの奇^キ草^{クサ}あり。シカ^{シカ}フ^フコ^コロ^ロイ^イトと云^フる。草^{クサ}を抽^ヒく実^ミと結^{ムス}ぶ形^{カタ}宛^{エン}羊^ニの如^ク又^モその皮^ヒも毛^{モウ}を生^シむ且^カその傍^{ナリ}に生^シる草^{クサ}へさるると獸^ノの啖^{タン}るると如^クその実^ミを割^カり赤^{アカ}液^{エキ}ありと宛^{エン}然^{ゼン}と云^フく血^チの如^ク食^チへ味^ミひ蝦^{エビ}に似^ニる。これは是^レ同^{ドウ}國^ノの亞^ア私^シ太^{タイ}蠟^{ロウ}甘^{カン}ありと云^フる顧^コふ。唐^{タウ}山^{サン}の文^{ブン}人^{ニン}墨^{シク}客^{カク}これらるるとを謬^{ミョウ}傳^{デン}く。真^{マコト}の羊^ニの地^チ中^ノに生^シ出^デると云^フ。よつ正^{マサニ}香^{カウ}の物^{モノ}は識^チせよ。唐^{タウ}山^{サン}の書^{ショ}藉^{セキ}は異^イ邦^{ホウ}邊^{ヘン}鄙^ヒのみを載^{サイ}せよ。皆^{みな}傳^{デン}の謬^{ミョウ}言^{ゴン}なり。縦^{タテ}バ彼^{カノ}がこの土^{ツチ}のるると記^キせよ。猜^{サイ}慮^{リョ}笑^{ウタガハシ}ふ堪^{カン}らるると。と云^フ。吉^{キチ}次^ジ小^コ膝^{セツ}を鳴^{メイ}るると感^{カン}ざるると半^ハ响^{キョウ}るると然^{シカ}ば頭^{カウ}を拍^ヒく目^メ今^{イマ}博^{ハク}士^シの指^{サシ}南^{ナン}ありと云^フ。又^モ年^{ネン}の疑^ギ惑^{ボク}氷^{ヒョウ}解^ゲせよ。されどもそのるると浮^ウ世^セの

雑談知くも害のるるらるら。知くも慍る一條海賊追捕の當任へん。
 る如く大将より勇卒百名を隸られ追捕嚴重なる旨この命令を
 稟へる。嚮く矢田の津を由り心と潜めく張る。今宵も賊船似た
 るもの目と渡りて泰平の兆る。夜ゆく出沒時あり。これを怕れく隠
 れ。欽和殿素より知るより。あつて潜りて告め功成るとは功を讓りて恩賞へ
 鎌倉ゆく申請を行きん。せうのりたると潜りて向へ歌二郎の呵々と
 うち笑ひてそのおもひ死のるる盗賊を鎮む。盗賊の捕へる。わが
 艘我人の海賊を馳捕るとも。世上の賊の盡る。あつて然れば盗賊あり。た
 鎌倉殿の武威衰へる。渠甚麼なるのりせ。九塵埃を避る。のり戸を
 閉てこれを鎮む。盗賊追捕ゆこれ。同ト鎮るとは渠又出ま。強て搦捕んと
 まる。塵埃を憎く拂へる。拂ふ迹よりその塵埃のいよく積る。異なる。只

うち捨く措め。このおもひ果て吉次の膝立直。敦圀く和殿の意見の
 迂遠。細人の徳小親も威をのりてこれを懲る。況く兇暴残忍る。
 海賊の徒を。これ今野の猛卒を伴ひる。只一箇の賊を。のり捕へて。
 阿容々々と。東小婦ら。その職小居く。その甲斐あり。世の胡慮するん。
 の。これ穿鑿盡く。その果を破り。鹿金よ。あつて。今時和殿奈何なる。
 奈何と。とる。と勢ひ猛く。後よ。氣色る。一と歌二郎。此も騒が。天うち仰
 びく。呵々と。鞭を。とく。笑ひ。忽地。貌を。更め。信と吉次。うち向ひ。瀬川
 氏より。夢の。世の人。魚の。あつて。これ。魚の。樂を。知る。と。ひけん。壁言ふ。等
 しく。各賊の。あつて。これ。賊の。情を。知らん。今。誰の。隠む。死。これ。亦海
 賊の。疑。く。目。小物。を。せん。と。ひ。船頭。立出。く。遠く。懐を。撈。く。と。う
 出る。叫子の。笛の。音も。漣々と。吹鳴。る。怪む。べ。海上。より。忽然。と。て。涌出。る。

賊船まどく數十艘悪鬼の如く暴雄の如く数を慮数百人半弓を弯
 鉾を舞して瞬間は近づいた素破と射落さんと射落さるといふ
 揃へ吉次が船の四方を稲麻の如く捕巻たりとひけるはれはりも猛
 ら吉次まらあまのふとたると仰天く声をききて同船の兵士
 小の呆れ惑う今けら防だ戦んとる擬勢もる或の射向の袖を撃て
 蓬庫は伏せあり或の苦を引被た念仏も言りけり當下姥口歌二
 郎の又吉次をうへり瀬川氏にのり御邊百名の士卒あれば千名の
 下あり小の大敵をべく御邊これを捕え欲これく御邊を殺す
 然れども御邊の忠義の武士の才も長これの死を借しく別まんの
 これ小懲る海賊を追捕の念を断り強て功を貪らば又大なる禍あらんこれ
 ら初度の小厄のつらく御邊を相まらふ劍難の厄迫たありわれはつら

あつち
 志解厄の
 神呪あり
 するこほ
 られ則
 末の周
 幸難護
 載るお
 誦する
 利益あり
 りり

も小のけむとも脱れぬ似れども深信しくみつら守らる安危をよ説く
 らむ御史周維御が解厄の神呪あり日毎これを誦するの劍難横
 難寛枉の罪厄まどく解むとらるる徐々誦するらむ
 答任他 唵呬罷呬 呬囉呬 呬囉呬 呬囉呬 呬囉呬
 囉呬呬 呬囉呬 呬囉呬 呬囉呬 呬囉呬 呬囉呬
 現の神呪これを授けく留別の餞をこの如き便船の酬ひに充る老
 婆心よく記憶せ利益あらん命めく縁竭る是再會は意中を竭る
 愈退くと領りて下知く裳を褰る三回わたり右よりなる船は閃りと飛舞
 月朦朧と雨調降く今す有る野の船の往方も知るるりあけり
 吉次の忙然と初夢の覚るごとく且羞く憤の遣るる然り

第十二回

勤の磯は高濤亡骸を引く

とこの又せん術ありて熟思ひ旋らまよ純は一百餘名を兵士を頼りて海
 賊追捕のり小諺すく彼歌二郎は懲されし井小樓む蛙の大海を知らざるに
 似く器量狭り。われ亦懲まの輩を伴ふく鎌倉までも帰す参らば諺
 者不測の舌小切や。還く君のちん疑ひを醸するこのあふ死欲是の亦測り
 くる。所詮緯は假托く。この百名の兵士を矢田は返まよままものあふと深
 念どくその曉くま近死湊は船を歌させ扱兵士ホは談まき。まらば
 如く海賊の出没を不測する。のさりの小勢ゆく。追捕せん。容易くは
 然るを月過々と各位を東ま。相伴ん。益益は似たり。われはより各
 位に陸路を矢田へ還り。有然女殿を改。まらん。西海の波静れ。伏
 海賊盗船あるところ。よろく隸させむひぬ。士卒を返。まは経高。む。伏
 誅せられ。彼城攻。用させらん。を願ふ。この人々の情愿する。吉次が憐

息小あふ。ま。ま。歌二郎が。ま。沙汰ま。この一條の不覚ま。吉次
 吉次の罪被はとも。今ら辞ま。所ま。但各位を連系せん。然といと惜
 しか限りま。ま。と説曉。其衆皆齊一。又往末。乍磨る。出ホ
 申歎と。ま。ま。より帰れと許され。氏神は。頼れ。託誼と。覚れ。仰
 らけ。ひぬ。殿。教諭の。あ。暇中。と身。起。傳馬。除上の
 木の葉武者。落支度。ま。似。く。愈動也。と。港口。船場。集合。て。出。く
 め。船を。遙。目送。く。る。る。浪。高。は。の。順風。ま。真帆。揚。く。別。ま。ま。り。け。り。
 是より。吉次の。主。後。純。は。五。六。人。船。を。輕。く。ま。り。れ。ま。ま。亦。速。く。日。毎。に。風。の
 よ。り。ま。幾。日。も。あ。ま。旗。津。る。る。尼。が。崎。め。著。ま。け。これ。より。も。く。も。船。を。遠。江
 灘。七。十。里。春。も。順。風。稀。く。一。豫。く。ま。り。ま。あ。れ。吉。次。の。湊。より。船。を。返。り。く。
 大。和。路。より。東。海。道。と。下。る。程。は。帰。心。漸。く。矢。の。如。く。日。は。十。餘。里。の。道。を。ま。れ。は。その

如月の下旬きつげすあつきのに駿河路すまがぢより宮根みやねの畑はたけに宿やどよりその宵よ孤燈ひとりあかりを掻起かきおこ
 しく書う写りする消息せうしきを足たして早はやに奴隷やつに齋いへる案内あんないの為ため鎌倉かまくら博多はくた倍ばい
 太郎たろうが宿所やどところへとて未明よみよみに立たて遣つかへるこの日ひよりして道みちを急いそぐ静しず小宮こみや
 根ねをうち踰こぐその薰かほ昏くま主しゅ従じゆ五人ごにん袖そで志し浦うらの波なみ打う際ぎはる松まつの樹き間まを彼か
 此こと辿たどるも長なが死し真ま砂路さじろの波なみ足あしを踏ふみ取とられれと声こゑをうけゆく程ほど天あまの俄いつ頃とき小
 結むす陰かげる海うみさ思おもはく暮くれ初はつう不ふ題だい去さ歳さいよりして伊豆いづの山家やまがに隠かくま住すむ
 荒川あらかわ加か二郎にらう武ぶ仍にやうと長城ながじやう野兵のへい太た敦宗とんすうの量りやう義ぎ小博こはく多た弥や四郎しらうの若わが黨たう関せき衰すい
 七しちが秋布あきふの使つかひとて西さい園えんへ赴おもむく途みちゆく竊ひそか敷し捕とられとて譜ふ第だいの奴やつ隷れい
 勘かん八はちは功こう成じやう後ご恩おん賞じやうを宛あて行ゆくとて一通いつとうの形かたちを取とりて遣つかへるその約やく
 束たばの日ひ數かず終はつく俟まちどもく勘かん八はちが信しん絶たつるるりて兩人ふたり竊ひそか疑うたがひ怕おそれて勘かん八はち
 の為ため損こせられ秋毛あきげを吹ふれ疵きずを求もとめらるる塔たより堤つ崩くづれる是こゝ面めんの伎わざ倆りやう發はつ

覺おぼならばのめとせんと陪ばい々々安やす心こゝろののらら然しかとと為なりしもも平ひら只ただ勘かん八はち
 弟あに身み貫くわん九郎くわんらうといふ小こ廟ぼの將しやう軍ぐん惟ただ康かう親しん王わうの奴やつ隷れい部ぶ屋やに歇やすり居ゐて部ぶ屋や子こ
 と呼よぶると奉ほう公こうももせせ鎌倉かまくら倉くらは舊ふるの辰とちゆゆ在ありしとて究きう竟けいと招まねられし酒さけと
 飲のせ物ものを脛すねませる同どうさらぬべくありしとて彼地かのちの回へい者しやあらくけるふら筋すぢゆゆ悪あく功こう
 長ながく脱だつ落らくももられのらにれ瀬川せがわが妻つまの秋布あきふが良よ人ひとへ贈たまへし一包ひとつかの七里しちりの濱なみへ流なが
 寄よるる由よしりるも執しつ權けんののめ目はまままりし一ひと緯ゐの趣おもむこの故ゆゑ小吉こきち次つぎを召ま返かへさるかん
 使つかひ博はく多た倍ばい太郎たろうと西さい園えんへ遣つかへらるる機密きみつの顛かぶ末すえ又また博はく多た弥や四郎しらうの女おんな見みの
 為ためは皆みな吉次きちじが凱陣がいじんを祈いのる願ねが文ぶんに征せい箭や二に條じやうを取とり添そへる鶴岡つるがきへ納いれるままぐ
 大おほききるるを撈ら課かせる緯ゐ云いと報ほうへる加か二に郎らう兵へい太たの雀さず躍とつして再また生なまるる心こゝろ地ぢ
 者もの秋布あきふが彼か一包ひとつかの衰すい七しちの齋いへる矢田やたの陣所ぢんじよへ遣つかへらるるえんは彼か処ところへの届とどくるまま
 者もの七里しちりの濱なみへらち寄よせられるを思おもへる衰すい七しちの船中せんちゆうでのゆく勘かん八はちは終はつめられるえん

又勘八が帰らぬ。相敷あり共侶の命を損せしものぞ。勘八は又敷され
 為渠が口より支を漏れ後産病ゆいゆめど。めまばや遠くぞ瀬川
 采女の身りまき。彼奴を途中に狙撃し日比の怨を復さず。臍を噛む及
 遠く走らん。路費もて不便せしせん。額を病し。西人商量も程は
 加二郎ははてしなくあり。一々貫九郎を使し。内管領頼綱が宿所竊し遣
 へ。俺們若気の疎忽ふと。御勘當を受し。斯長々浪宅の貯録
 弾く飢渴及ぶ。哀れ叔侄の愛を愛さぬ。此の合力を賜へ。と哀
 けよのせし。頼綱は大きく怒り。けいへもあつ。を乞ふ。再三及び。六
 頼綱竊し。加二郎が罪憎む。怒む。移る。渠今實不飢
 渴。追ふ。不良の所約を。死然。と。渠の。これ。亦面皮茂

飲く恥のうの恥ま。這回且密に。振ふ。不如と尋思。向戸を
 誠め。金一果を遣。けり。加二郎の便宜を。怒。と。おら。貫九
 郎。此。の。金。と。辛。苦。銭。と。兵。太。ゆ。如。此。と。由。を。報。意。中。成。示
 け。既。子。盤。纏。の。を。ま。し。れ。采。女。が。帰。る。路。に。埋。伏。し。怨。を。承。弁。し。他
 御。ま。と。と。の。次。の。日。より。貫。九。郎。を。親。姑。峯。の。く。ま。遣。し。吉。次。奴。が。ゆ。り。ま
 時。日。を。定。く。捜。索。め。く。知。ら。せ。よ。と。分。付。け。の。り。程。は。睦。月。の。過。と。の。如
 月。の。末。つ。豫。て。斥。候。に。立。り。け。貫。九。郎。の。喘。々。伊。豆。の。隠。宅。に。帰。来。つ。瀬。川。采
 女。主。後。の。昨。夕。親。姑。峯。に。宿。と。り。り。お。ま。の。黄。昏。比。の。大。磯。小。磯。と。ち。過。く
 日。の。暮。も。とも。鎌。倉。に。著。り。著。り。と。急。ぐ。ら。の。遣。過。し。詮。を。野。約。と。く。准
 備。と。あ。の。ま。と。呼。吸。吻。あ。む。報。う。ま。ん。加。二。郎。兵。太。の。雀。躍。し。そ。の。俟。ひ。り。
 足。場。も。よ。り。脱。落。せ。と。忘。も。果。を。各。々。身。軽。に。打。扮。つ。豫。く。よ。り。逐。電。の。用

意をあらうく只荒果る白屋に住番あるの惜む足るを投て往方の定め
 終も緯十二分は敷ひければ加二郎兵太の征箭と背負く半弓を脇挟み貫九
 郎の短鉾を引提く人もあぬ山踰し相摸路とて急程を名鎌倉へ遠
 りらぬ動の磯はまろけりこの時日の稍傾む下晡と背にたの地の總て真砂
 路ゆく右邊の渺々る蒼蒼海原よりうち寄る波の音高く左辺の人家遠く
 くと丸々の磯馴松の生茂ゆる隈よりあち究竟の地方を主後二人足場を
 揣きて三方に立別れ松の樹蔭に射して吉次がのり来るを今放々と俟程は
 その日も既に暮初に汐風寒れ黄昏時袖志動の浦はひいて貌姑峯のくより
 来るののり来る主後眼を定めく遙く吉次の馬上を若黨取
 奴は主後纒は五人に竹前比近く来るまよ一の笠前伏の川加二郎克彎鏢と度ら
 矢坪の窟違ひ吉次の左の股を大く射きて馬より控と落しあちくりらぬ

こころのいま取衣て立騒ぐ後者さへ脱さどと兵太が頼り射蒐る征
 箭前小背を射れく俯をもりの或は又頭骨を射く矢庭は死するもあちか
 る辛く脱れ東へ走るの只一人は過ざりけり緯既よと為課せし長
 城野兵太の吉次が頭を捕らんとら投捨く大刀抜發し走り来る仇敵を欺
 引寄せん為射られ候も身も動さく虚滅をうけ吉次も亦呼吸を揃て
 程をよけれと抜敷は臥し兵太が向臈をむと斫拂へ兵太の足又足を
 砍落されく醫居は撲地と倒れる程もあち貫九郎も短鉾を拵くまよ
 来るも直賜る吉次が高脛を又と衝くよ灸所をなげ物ともせり吉次の
 返す刀は鉾の柄丁と砍取く矢声をうけて擲つる煉貫九郎の臈より射ま
 縫串も苦と叫ぶ小まを隙に吉次の兵太が頭を搔んと登下り刺
 腕を兵太の下より握前めく深き屈せむ引組上と下へと捺あ折らる



動の磯の
 二兎
 吉次を撃

石川銀次傳卷之一

千之五車箱

降々疾雨初電初雷間々時々鳴り足柄山下風烈しく荒磯を
 洗ふ高濤は組る兵太吉次へらち放解れつ忽地は兵太へ遥より揚き松
 根より礮石の頭を大に撲推れて脳精出く緯絶ら吉次は引く波を引れ
 澳に漂ふ尽し沈む存亡も往方もあはれむふけり有然程に加二郎の御
 兵太と資人ともう箭を其首に投捨くまのゆゑとる程に疾風雷雨凄く
 面を向んやうのきけれ怖く樹蔭に退る要時霽れる候程に雨歇き雷
 電歟りく暮ぬとらひ天の月明く夕映の海に遺りて幽る浩如騎馬の
 武士の鎌倉のこよりとあを望むるあやめん鎌倉の響の音は間ちく
 えふ加二郎耳を敬く序次りう。是をふ迹を埋めく逃亡のれが又博
 倍太郎正延の吉次は先んて鎌倉へ歸著ら渠が母の喪よりて聊遅参の
 吉の趣并は牛淵清繩が伏誅の爲体を時宗朝臣はゆえあげてとくその到

著とそや三四日と候るこの日貌姑峰の畑より吉次が使札到来
 今宵の帰府を報へ倍太郎は又これらより再び主君を告えあげて時宗の
 日ごろより候多のひひるれが其午の比より幾遍とる。采女はうりあを
 と諮問ると頻りこれより倍太郎はなう途まで立出て吉次を迎へて蒲綾
 笠の野將袂束しと馳馬よりち跨り吉次が使を立たる奴隷一箇は鎌をとりて
 その日未下刺鎌倉と立出馬の足掻を早めければの暁は日大礮や小礮の
 地藏堂まで来る比天猛に結陰に雷雨頻り降をげば堂の檐下は馬を倚
 せく要時霽奔間をゆく程に動の礮より逃を来る吉次が後者の笠をとりせん
 めままりて堂内は取合へる初に倍太郎は吉次が横難を定る知りて大に
 驚れぬび馬よりち乗せく件の礮へ急ぐ折雷雨の既霽奔され途ゆく焦火を
 買とせく只一息は乗著るに僅言敵の既逃亡けん吉次が死骸は只長城野

兵太が顔を破られ、深きの死骸の松の下る磯石のほとりあり、只是のこゝにあつた
 ちく加二郎が方人多く奴隷買九郎も深きを肩より半死半生をりけるを生次々と
 綁めく縁故を責問する買九郎の苦痛は堪む加二郎兵太が謀合しつゝあま
 吉次を怒り、且吉次が亡骸の波まじりて、性方をとらむと定む首伏せり
 倍太郎の四下近死浦人ホを召聚へくその宵吉次が亡骸を去せし下知七
 ければ浦人ホは捕船をいとうともなく漕浮めく或の鶏を板子に乗し或の釣索を
 繰りし二時あり、索しりとも亦その甲斐もなかり倍太郎のひ捨く且浦
 人を退し兵太が首級を齎し買九郎を追立ちくその時方鎌倉宿
 所へく著ると依件の主の趣を博多弥四郎へ報知らせ弥四郎の亦人を
 りく瀬川が宿所へまらしく女兒秋布を告りける方さの駭嘆悲位を
 具しりんのさまをわく、つづくは、緯省ぬ着官宜く猜ま、有斯く博多倍

太郎の詰且出仕し、即使主君時宗朝臣、瀬川吉次が枉死の、瀬川加
 二郎長城野兵太が夙怨の、一條まじり、奴隷買九郎が首伏の趣を告まら
 せ、時宗駭死且怒り、彼加二郎兵太の首を刎死め共ら、頼綱が面を顧み
 その死を寛め、追拂いせし恩を受けて、因心をわらむ、私怨をりて、愛臣瀬川吉次を
 斬り果せしを、奇怪なれ、這奴ホが悪古、其のまら、彼買九郎との奴を携
 問せしと下知、多の當職の有司奉り、買九郎を獄舎より牽出、背を割
 骨を挫ぎ、いとも厳しく責らければ、買九郎の堪む、加二郎の奴隷勘八を
 りく、秋布が使関、簞七を道中へ殺させ、そののれ、めよ、介後買九郎とて
 間者とし、吉次一家の預る、鎌倉中の風声を定め、此度吉次が帰るを
 知り、埋伏ある、緯の趣、其れは怨を復す、及ひく、直に逐電せん、竊に叔
 父の頼綱は、路弗員を乞、密告す、その奸計十の、八九を首伏し、ければ、時宗

このよとを留めて今其奴に所要る。とて罪を行へと。遂に頭を刎らせけり。
 これより内管領平九衛門尉頼綱も君邊猛ま首尾を引籠ておろり。
 ける有然程の時宗朝臣へ経高誅伐の禱の爲次の日鶴岡へ社参あり。要時
 額つ死頭を擡ぐ四下をうらみ視ゆる。素木の四方に征笠前二條をうらみ無き。
 願書の死る一通あり。同近侍坐し。社僧をさへ指して彼へ近属納し。
 の牧願主へ誰と問ふ。社僧答てさし。異業に神内人博三弥四郎が宿願の
 旨ありて進らせり。とてい。このもるはまをゆ。時宗さへ七と領て。願書と
 ぞり卸さく。讀してこれを留めよ。中。の文言は。経高誅伏せむと。吉次を
 速に凱陣あらせむと。写せし。一條を留めめ。志をく。社僧は。誑返させ。校宣の
 中。これ今どう。あれ。願書を。あま。又。遞与ま。征笠前へ且く預け措く。さう
 ぬて。社僧の論。社壇を。お。心。と。前。駈。後。後。の。目。覚。見。死。叱。咤。の。声。松

吹く音も枝を鳴さぬ。執權の威風。輝く鎌倉山御館へ。歸す。あ。の。疑。心。暗
 鬼を生せし。より。さ。あ。の。く。い。安。ら。ね。次。の。日。内。管。領。頼。綱。の。外。口。を。許。し。招。れ。よ。せ。
 この鶴岡へ社参の折。さう。さ。の。意。を。知。せ。る。博。三。弥。四。郎。素。延。願。書。を
 取出く。指示し。抑。経。高。西。海。は。跋。扈。し。く。よ。既。ま。せ。る。兩。歳。及。べ。も。元。兇
 いま。誅。伏。せ。む。の。故。は。時。宗。を。魂。を。痛。し。の。神。は。祈。り。佛。の。念。は。く。只。逆
 賊の速に滅んことを欲する。博三弥四郎何のる。れ。主。の。真。愛。と。真。愛。ひ。と。せ。ん。
 この私の情。よ。任。し。く。渠。が。女。兒。秋。布。が。良。人。を。昔。本。を。慰。め。ら。し。く。や。の。く。ま。で。氏
 神を。敬。馬。し。な。り。経。高。誅。伏。せ。む。と。い。ふ。と。も。吉。次。を。速。に。凱。陣。さ。せ。む。ひ。移。と。書
 する願書。只。何。の。を。も。その。不。義。不。忠。言。語。同。断。罪。反。逆。を。せ。し。め。し。速。に。召
 する。誅。伐。を。死。の。小。あ。ら。ま。を。捕。ま。れ。准。備。を。さ。せ。と。敦。圀。猛。く。命。に
 多。く。頼。綱。眉。を。う。ら。し。髪。を。め。く。脚。説。で。い。へ。も。弥。四。郎。の。素。朴。の。循。臣。野。心。あ。る

登くもゆるむ。凍文墨は疎ければ。その心もあらまじく。ちほ僻言を記せし。の欲
 且そのよを糾明あり。陳ざる所をよりあはる。月穩便のあふ沙汰を。のりせも
 果む時宗朝臣の頭を左右。うち挿す。頼綱の美。は微なり。齊非を吹んと
 する。や。弥四郎疎忽の行。心。とも。國賊の死を祈ら。君を不台。罪ある。の。を免
 さ。誰が。後。死。大。使。遣。罪。の。疑。死。を。所。負。ま。り。尋。常。の。う。ふ。あり。
 り。是。ど。も。忍。ぶ。べ。く。何。の。を。忍。ぶ。死。と。く。捕。の。准。備。し。て。弥。四。郎。を。召
 よ。せ。よ。無。益。の。諫。の。聴。く。隙。あ。ら。ま。じ。と。日。比。ゆ。も。似。ぎ。氣。色。損。ど。く。寛。む。べ。く。も。あ。り
 づ。れ。ば。頼。綱。大。く。畏。り。て。形。の。工。ま。計。ひ。ける。有。介。程。は。博。多。弥。四。郎。素。延。の。実
 子。ゆ。も。ま。ま。愛。塔。の。瀬。川。采。女。が。横。死。の。宵。より。數。死。の。増。ま。秋。布。を。尉。心。め
 め。り。日。比。麻。生。の。老。の。眞。愛。苦。の。朽。折。ま。る。病。む。と。の。あ。ま。勤。仕。を。怠。り。無。益。電。く
 の。と。ぬ。り。ふ。忽。地。召。状。到。来。し。て。速。に。出。仕。せ。よ。と。ある。火。急。の。君。命。ま。ら。ち

敬身。躬。く。礼。服。を。敷。正。く。御。館。へ。参。る。道。ま。ら。向。新。よ。け。れ。遠。く。瀬。川。の。宿
 野。立。より。て。召。よ。り。勤。仕。の。よ。と。女。見。秋。布。に。告。ぐ。秋。布。は。つ。と。と。ほ。り。要
 時。沈。吟。し。て。昨。夕。の。夢。寐。の。夕。り。ふ。け。六。朝。より。何。と。も。鳥。啼。の。常。る。心。も。心。よ
 かな。は。ら。り。目。く。病。氣。の。よ。う。な。り。て。御。館。の。中。を。伺。ひ。ま。と。り。を。告。ぐ。弥。四。郎。の。呵。々。と
 ち。ち。笑。ひ。く。その。日。比。眞。愛。は。沈。む。を。る。の。心。は。迷。ひ。の。君。命。と。召。よ。り。の。駕。を。俟。む
 あ。く。も。く。と。い。は。れ。況。く。加。二。郎。兵。太。ホ。の。悪。事。の。よ。く。露。頭。く。吉。次。を。惜。せ。ぬ。主
 君。は。御。疑。心。あ。ら。ず。や。と。名。迹。の。ゆ。き。を。仰。ま。る。吉。事。と。覚。る。退。り。出。を。ま。ね。り。と
 の。ひ。あ。ま。後。者。を。い。て。ぐ。ま。ま。去。け。り。既。し。て。弥。四。郎。の。御。館。に。参。り。着。る。鈴。の
 間。の。青。侍。鳴。石。林。平。鯉。口。原。心。六。逸。早。く。出。迎。へ。り。君。の。先。の。程。より。待。り。の
 さ。る。の。と。く。と。先。と。先。と。誘。も。る。弥。四。郎。の。共。せ。り。進。ま。る。大。鳥。の。間。の
 近。く。程。は。左。右。に。無。さ。る。帷。幕。の。陰。より。頭。れ。出。る。方。士。四。五。名。博。多。弥。四。郎。且。く



石云翁集卷之一

下り欄

留逆徒經高ハ荷擔ハ君ト否マ不忠の大罪遂ニ逃レ天の責仰マ
 よク誅ス名告ル呼ビ群立テ蒐ク前後ヨリ組ンとモ揮テ放シ釋ス
 弥四郎ハ更ニ急ニ一ハ句ハ陳謝シ暇ニあラるハうハとモ小搔キ投テ退ル老の
 脊力ハ一ハ生懸命ハ雲ハ時ハ寄セとモ角ハへトもモ竟ニ多ク執ル推テ伏ラれてハ幾ノ刀トもモ
 刺レるハ五體ハ續ク如クもモ血ハ塗レてハ死シ時宗朝臣ハの折ラるハ頼綱ト
 後ニ翠簾ハの裡ニ面ヨリ齊シ者ハ共死骸ヲを取捨クとモ不淨ト清メとモこノハ
 後堂ハぞハ入リ鳴呼ビ君ハの寵ハたノむハ時宗賢良ハるハぬハあハねハとモ只ハ狐
 疑ハ一ハ僻ハありハこれハよリの罪ハの疑ハを寛シめテ城ハ程ハ歴シ悟ルゆハありハ
 頻ニ後悔スあハひハけリ然リとモその甲斐ハあハらハぬハ秘ハとモ奸曲ハの膽ハを括テ亡シ者ハの
 汚名ハを雪キむハ切キのハ小賞ハをモくハ哀ハをモるハ。

松浦佐用媛石魂録後集卷之一終

松浦佐用媛石魂録後集卷之二

東都 曲亭主人編次

第十三回

神明誠を監シ烈女志を得テ

博多弥四郎ハ従僕ハホハ不憶シ主ハの撃レれハもモ洩シやハ駭シ怕シ本所ハぬハとモと
 且モ瀬川ハが宿所ハ立寄リ緯ハ如此ハ々とモ報レれハ若シ黨ハ俊平ハらハ駭シ驚シとモと
 秋布ハぬハ報知シ腰刀ハを搔キ合シてハこれハ續クけレとモいハもモ託シらレ外ニ面望シ走リ出スとモと
 博多ハが従僕ハも喘キぞハ走リとモ且モ俊平ハの撃レとモひハ弥四郎ハが亡骸ハを板ハ石ハの
 乗リとモ博多ハが従僕ハホハ扛擔シせハ凋然トとモかハりハまハるハ依リ奥ハに扛居ルを疾ク
 遅クと秋布ハハ走リとモつハ衣搔キ遣リとモ空ニ骸ハ小携シ著ルとモとモのハ泣キ沈ミを慰メ
 難シ俊平ハも手ハとモ又モ頭ハを低ク苦シ宵ハの憂ハ也ハ朦ク也ハの関ハらハるハ共ニ侶ハの禁難ハ
 涙ハにハ浩ク処ハは次房ハの咳ハきハるハ来ルのハのハ便ハ是ハ別人ハらハも博多ハ倍太郎ハ正延ハ

罷らんといひ多く。大刀を引提ぐ身を起せし俊平も兼美とてふ。生
 平の親し中房も緯更やまき恭く。額をつらむ目送りける。且く俊平と
 秋布ふち對ひく。何とぞ思召やん左ゆも右もあつらひ死に彼御願文の
 一義也。雖不の二字を書加えく。おん爹々君を罪させし。鼠川長城野か
 徒快恨るの所為か。とといふ秋布目を押拭ひく。さきか下そのるるを
 熟思ひ回らさふ。うそやとらふ幼稚よ。書讀むるを好む。疎歌々詠
 人の討の鬱悒や。筆把ることも多あやう。その中お過る。歳彼鼠川
 加二郎が。と無礼らるるを懲らさんと。渠が魁弱不具る。比與く讀
 當坐の。歌東路乃多度。迺瑞籬名嘗。依氏愛。詠詩神乃行。鴨萬葉
 假名。書做。一。執扇を彼人か。さらす。の恨を。含。寛。を。締。び。て。長。城。野
 兵太と相譚り。日か君か。おぼえ。おびく。送。お。才。を。戰。せ。し。お。その。折。お。彼。人。か。ハ。ハ。ハ。

かひもさく。うち負く。贖罪を蒙る。この鎌倉を追。さ。か。い。や。後。く。怨
 讐の。お。ひ。を。さ。く。小。勤。の。磯。邊。隱。は。吾。所。夫。を。狙。撃。し。由。歌。の。料。加。以
 父大人の願文を偽筆し。竊る罪。お。墜。せ。し。も。彼。人。々。の。所。為。さ。ら。ん。縁。故。を
 推。ま。と。死。鈍。や。こ。ら。ら。賢。才。を。て。い。で。も。あ。る。死。人。の。非。を。詠。誇。つ。その。人。お
 贈。り。さ。る。負。さ。る。を。憎。し。と。人。を。殺。し。え。神。も。照。放。負。せ。し。お。さ。く。一。夏
 事。の。こ。の。牙。ひ。お。め。聚。合。ん。や。か。ま。良。人。を。喪。し。も。又。父。大。人。の。罪。さ。る。も。
 生才学。お。誇。り。さ。る。身。の。咎。お。あ。る。さ。う。か。う。悟。ら。し。生。ま。ら。天。狗。道。ゆ。も
 墮。ぬ。死。の。身。の。罪。お。そ。い。と。あ。る。は。赤。石。の。神。の。冥。罰。を。受。と。も。一。生。涯
 歌。を。よ。ま。書。も。視。し。悔。の。八。千。遍。百。千。の。び。日。ま。ら。ら。身。を。恨。ま。て。も。返。を
 した。死。天。の。行。親。と。良。人。を。先。と。い。う。存。命。ゆ。ら。ん。や。と。死。口。説。は。ら。ち
 泣。く。護。身。囊。の。組。紐。の。斐。お。斎。さ。る。婦。女。子。の。方。寸。刀。を。見。し。と。抜。け。り。既。お

自盡と云え一六俊平の吐嗟と云う。透さき楚と推禁め。六御心や乱れん。
 家の艱め已を譲ら。むづら罪さひあつ人の及おぬう。むきども。けん身刃の
 伏しあつ。誰う又彼雙と撃つ。冗。伶俐はきども有繫の婦人心を鎮めぬうと。
 頻る諫めり。換ら。あう。ゆるみ筆放を刃を鞋に納ま。六叔の死ぬも死はまをそ。
 身を投俯く。泣ぬける。有介程の俊平。その宵素延の亡骸を葬らんとそ。
 準備をら。博多瀬川西家の奴隷。秘代。る。輪子を竊め。擡出さる。
 その身も共ぬ香華院の送り。あだ。酒。か。経と讀せ。更。闌る。比。莖果。食。共。
 侶宿所。帰る。秋布。が。在ら。む。六。の。の。と。驚。馬。さ。彼此と。索。程。の。
 春の夜。され。む。曉。り。けん。咎。と。被。り。籠。居。の。折。る。白。晝。六。索。も。あ。る。
 是。す。夜。毎。々。々。々。人。を。出。し。と。その。身。も。共。ぬ。か。る。或。ハ。川。筋。鎌。倉。乃。端。山。
 めど水波。経。死。を。公。ぬ。り。と。彼。此。と。と。索。る。と。既。六。七。日。ぬ。及。ぬ。も。その。亡。骸。も。

んる。よ。ま。い。ま。心。の。憂。や。う。く。も。る。い。つ。な。れ。か。か。や。せ。の。執。念。深。禍。鬼。の。
 寅。縁。と。は。ま。ぬ。物。を。さ。か。ま。る。そ。や。主。と。博。多。の。大。人。の。横。死。ハ。仇。と。君。と。の。所。行。
 る。脱。と。う。た。ぬ。理。も。且。と。後。室。さ。る。あ。れ。と。異。之。嚮。ぬ。の。憂。ぬ。堪。へ。う。く。
 自殺せん。と。あ。の。を。か。う。を。く。諫。め。禁。め。し。く。も。猶。死。鬼。ぬ。引。引。は。淵。田。ぬ。
 投。き。ぬ。ひ。一。軟。か。て。八。頼。む。主。も。る。速。ぬ。追。腹。切。く。恩。義。を。泉。下。ぬ。報。せ。ん。
 の。を。と。ひ。訣。め。つ。坐。を。占。む。既。ぬ。刀。ぬ。ま。を。き。し。を。心。地。ぬ。必。ひ。之。せ。六。王。の。
 仇。人。ハ。一。箇。皇。土。の。内。を。と。も。ま。ら。と。の。白。胤。川。加。三。郎。を。撃。撃。果。し。く。後。ぬ。
 こ。そ。死。生。を。其。処。ぬ。定。ん。と。尋。思。を。し。く。果。敢。ま。る。も。その。日。を。漸。く。消。し。け。ぬ。
 然。バ。又。執。權。北。條。時。宗。朝。臣。ハ。博。多。素。延。を。誅。せ。し。り。七。八。日。を。過。せ。程。ぬ。一。日。
 内。管。領。頼。綱。を。召。近。つ。け。予。ダ。年。来。瀬。川。吉。次。を。不。便。の。ぬ。の。か。ひ。ぬ。渠。が。
 才。を。愛。ま。る。り。さ。ゆ。ぬ。り。曩。ぬ。経。高。征。伐。の。軍。監。ぬ。任。せ。し。六。その。功。ぬ。た。ぬ。

ねど。這回博多弥四郎が不義の科の誓者。吉次が溺愛者。僻支の
 よてかまへ亦吉次も縁坐の科をいそぐ脱走。渠の既帰府の道中、動の磯の
 川加二郎ホ小敷れり。その世はありといふも。妻子も慰むべりの
 世帯を官籍し。追放せしと仰らる。頼綱のこらるるをまへ
 加二郎が亥拘ひ。こらも咎を被り。先度不懲て遂に諫を
 兼ふと応つ。退きかんとする折ら。近習の侍走り来り。鶴岡なる神主が
 神勅の注進あり。使一召る。と報る。時宗駭き。神怒る。いふもかこ。
 日よびつらうを使ん使者をよめ。之をわらせ。と回答。文注所。小出夜ハ
 頼綱ホ以下の近臣。當座の扈從。あけける。登時鶴岡の神主の使者。海邊甲
 善子のやどり。頼綱のち對ひ。神主言上。奉る。一條の神救あり。
 扱も。西三日。已前。よ。當社時々。鳴動せ。神官。怖と。群議を疑ら。今朝も

卯の時の半より。十二座の神樂を奏し。神慮を清め奉り。今茲九才あり
 ける。行童の神の被らせ。あつ。踊揚り。狂ふ。半响許。猛の妙音を護
 賜し。神官の告多。博多弥四郎素延。忠義素朴のの。鼠川加二郎が
 恨め。同類貫九郎といふ。二個の下司。素延が願書を竊畧。長城野
 兵太の文を易し。雖不の両字を増加。その意。炭雪の違ひ。来て素延
 無實の罪。死ぬ。素延が本文。突。経。高速。誅伏し。云云と。のける。を。も
 かの。回。罪。の。を。害。し。神。怒。り。入。恨。め。然。る。と。又。吉。次。が。妻。子
 さら。罪。多。忠。貞。の。道。脩。く。廢。と。寛。を。伸。る。所。る。天。災。地。妖。を。起。す。
 上下。交。危。る。先。非。を。悔。過。を。改。め。政。道。を。正。し。甚。麼。々。と。繰。返。
 法。と。突。支。の。告。多。神。官。ホ。或。駭。き。或。畏。る。時。を。移。さ。ず。これ。ら。の。よ。り。後。
 多。終。注。進。奉。る。願。多。萬。機。寛。容。の。政。を。あ。ら。け。言。上。仍。件。の



石川録後集卷之三

六
下り海辺



石川録後集卷之三

下り舟

ぞ。息吐あを演ふるる。時宗主従うち駭き。送め目と目を注ぐ。怖とて
 各々黙然。その中。時宗朝臣。小膝を礎と打鳴りと謬る。あ九夫の裁断。予の
 亦鼠川加三郎。謀られ。良臣を害せ。過失神慮。さこそ。いと。も。か。ら。ま。れ
 ども。當家の武運。盡む。不測。神の外。わ。い。さ。う。懺悔。せ。ま。る。べ。か。は。頼川
 吉次。が。妻子。追放。の。沙汰。を。止め。宜。く。彼。而。亡。臣。ホ。が。後。を。い。と。う。憐。む。べ。し。
 平左衛門。頼。予。が。名。代。の。速。の。社。参。り。幣。帛。を。奉。上。神。責。を。謝。奉。上。予。の
 明。曉。の。参。詣。せ。ん。使。者。の。あ。ら。う。この。意。を。得。く。神。官。ホ。報。知。せ。と。辨。せ。り。下
 知。り。身。の。暇。を。賜。ふ。ん。使。者。の。歡。び。退。き。出。頼。綱。も。そ。か。依。り。走。り。宿。所。の
 退。き。行。水。し。身。を。清。め。三。歳。駒。の。鞭。を。鳴。り。鶴。岡。へ。参。詣。し。通。幣。帛。を
 進。せ。り。主。君。懺。悔。の。情。態。を。神。前。に。默。禱。し。けれ。ば。行。童。の。忽。地。鎮。ま。り。衆。皆
 安堵。の。息。を。き。き。有。如。此。程。の。時。宗。朝。臣。の。頃。日。家。の。籠。居。り。博。多。倍。太。郎

正延を召出。八幡宮の神懸の奇瑞のうを。他。を。正。延。の。駭。然。と。且。怕。と
 且。歎。ひ。頻。り。小。膝。の。進。む。を。覺。む。時。宗。も。て。吉。次。素。延。ホ。が。家。督。の。を
 ども。渠。ホ。小。兒。を。い。せ。ん。但。吉。次。が。妻。秋。布。の。南。殿。ゆ。も。愛。せ。ぬ。を
 宜。く。扶。持。し。ぬ。ま。べ。し。その。餘。の。る。云。と。詳。め。や。え。知。り。拉。ん。せ。り。を。呼。留。め
 汝。再。び。彼。処。に。到。り。秋。布。の。意。を。傳。へ。あ。ら。う。言。軟。と。又。繰。返。し。説
 示。の。あ。ら。う。正。延。の。歡。び。と。ち。か。ん。前。を。退。出。せ。瀨。川。が。宿。所。へ。赴。き。け。り
 案。下。某。生。再。説。瀨。川。が。若。黨。村。澤。俊。平。へ。秋。布。が。往。方。を。索。る。夜。も。通。宵
 後。ら。む。疲。れ。目。睡。え。その。曉。の。夢。の。中。に。それ。と。曉。る。よ。う。の。西。三。箇。の
 奴。隸。を。將。之。未。明。の。篋。輿。を。昇。り。鶴。岡。の。社。頭。に。到。り。篋。堂。を。下。關。く。小
 秋。布。の。疲。勞。の。面。色。を。荒。蕪。の。上。を。り。何。し。麼。の。と。駭。き。ま。り
 その。故。を。語。る。小。秋。布。の。稍。頭。を。搯。り。ぬ。る。夜。に。告。ぐ。子。の。籠。居。り。存。り。

然そ便かきつはけり。響の和殿のいづる如く不幸のうぬ不幸を累し家艱ハ
 生才学博士態のこころが科ぞ。必ふその身の恨し。自殺の覚期をあら
 とも大く和殿は諫めらまはし。志を得果さむ。あつとも父大人の冤枉を雪めむ。
 存命するともその甲斐ある。神佛いまだ棄てず。祈る不験ならんや。と思ひ起し
 親良人の忌服の怕まはる。仲も日々身を贅する。死ぬる不憚るあやめ。
 鶴岡の大神の社頭は祈念を凝さる。いと深念をいり走りぬ。かの宵より
 食を断りて親の枉冤ハ當社ハ願書を奉る。その支よりと發りぬけむ。
 尙らむとて神罰を食へた罪を犯せし。然らば親の枉冤を解諦さむ。
 直將神の威徳ゆも及む。秋布が露の命と七日の間取らせ
 ると丹精を凝らし。程小社壇折々鳴動し。神樂の行童ハ大神の被せぬ。
 託宣ゆりその故ハ如此々と宮奴の罵騷く。原來念願驗あり。空一からすと

道路の倒る。このゆりせんと。身もろく。宿所へあらんと。身ハ疲勞なり。往のゆる著を
 和殿へいふ。あふ日ふがを。よく知りて索来つるぞや。知るへ準備の
 轎子文昇と云ふ。来中死ぬ。直も不測の夏ゆ。といふ。俊平駭歎し。世を
 老繞季ゆ及ふ。と。月日ひま。地ハ墜る。あふまはく。神國の靈社の
 奇特顯し。然るに験とる。是深信の致を。牙と。且ぬ。あはく。僕ハ
 めん。の往方と。索難し。この曉の夢。あふ。公然。一箇の老翁杖方。立在
 汝の主の秋布が。往方と。あふ。欲する。欵。準備の復興を。齋し。と。鶴岡の
 社頭へ。赴き。簞堂を。闖へ。遅く。怒。あふ。と。いふ。歎。と。夢。覚。り。あふ。平
 夏。ゆ。り。と。形。の。如。く。計。ひ。の。竊。め。ん。迎。め。来。と。直。正。夢。め。果。し。て
 違。ひ。豫。て。不。憂。め。堪。ふ。と。淵。回。め。投。め。い。え。猛。ま。て。亡。る。ひ。と。あ。は。れ。ん。

あらまゝもも索ぢひける。王將神の示現ゆれり。と憑くいと告る。秋
 布弥感と。齊一奇異の多ひと。僕輿の扶乗らま。潜ひて宿所を歸りぬ
 け。俊平の秋布の茶を薦め粥を啜らせ。さ多く必効る程の通夜の疲労の稍
 痊す。心地清々たるあり。浩処の詭使と。博多倍太郎正延頼川が宿
 所に来臨。鶴岡の神勅主君の恩命。素延の罪を怨殺せ。後悔の
 緯の趣親族の子を親。博多氏の跡をも立下。さると。君命を詳述
 傳へ。こゝのまゝ。又一條の恩命もを。瀬川博多の家督の
 夏その養嗣の速め整ひ。秋布が宿願ゆら。使届け得
 さ。と仰らま。と告る。秋布主従鶴岡と君所の。彼方是方と
 伏拜む。感涙留り。且秋布の涙を飲め膝を進め。正延も。對ひ
 君の寵恩生を牛馬の變るとも。報奉る。不足らむ。就こひ。この

願ひぬ。良人吉次が當の仇彼鼠川加二郎。名く逐電。皇國の外
 よも出。幸な。婿々。女子。先。和漢の史傳載せ。勇
 婦烈女の。又。力。及。志。劣。願。親。良人の仇。
 鼠川加二郎を撃捕。亡魂を祭慰め。介后の養嗣の願ひを許さ。この
 上の慈愛ゆ。この譏を稟。俊平も進み出。言。こ
 一。僕。瀬川が譜第道孝吉次主三代の恩義人。大方。大
 術。書籍讀む。聊。今。秋布が仇討の後見。七助。と
 宿念を果。主恩を返。の。僕。素懐。の義も
 合。主。齊。一。正延。領。通。妙。真。愛。樂
 共。道。一。家。の。片。隻。を。起。貞。女。の。孝。烈。の。披。露
 け。既。鶴。岡。の。神。慮。の。稱。ひ。主。従。宿。志。を。遂。今。更。の

疑ふべし。久後憑くいとふか秋布主從神の冥助の深信の応報もつらん秋
併君の善政歟寡孤獨の至るまじ。憐れむ。慈悲と又その洪福を銜もまじく
看とも。撃つ仇人を撃つらんやまじく免許のえ沙汰を俟奉るのまじく。このふ
正延領まじくその義のまじく。君の待不樂あふぬ。も罷んと身と起ま
送迎も重裝績の折理正死武丈夫が式墓してぞ別とる。有右氏倍太郎正延を
恥く君所めあつて時宗朝臣の如此々々と秋布主從が願やう。仇撃のまじく
趣を具聞えあつて。時宗やの合笑。秋布は是閨秀の才女。深窓の書
聞く歌を詠むと。紫女清少ゆも恥づる。びとを舞。大刀を撃とる。武
藝のうへ心とる。又彼鼠川加二郎。憎ても憎も能く。大辟不赦の罪人之
國中の御知くと。擄捕せんと。秋布は萬里の逆旅の赴とる。も
居る。復讐の志を遂んと。二兩年を過へ。あつても。渠が願ひと

聽さん。亦勸懲の違ふ似つ。その義のこれと尋思して。後日の沙汰及ぶ
べ。如此まじく。示さる。正延の唯々と。躬く宿所へ退出けり。有然程の
秋布の籠居を許され。世間廣く。一日毎の香華院の参詣。親と良人の
菩提を吊ひ。且その墳墓を造作。と。佛更三昧。長き春の日を消す。の
うら。仇討の願更。一日片時も忘る。と。折々博言正延め。ん沙汰奈何と催
促。浩処。北條上総。實政西國。凱陣のよ。豫くそのゆえ。の。後
肆月の。先及び。実政鎌倉。還著。時宗朝臣。見参。この日。在鎌倉の
武士執權の家臣。御邸。聚會。賀祝の饗饌。就中。実政。不皿を賜。り。て
祝義の田樂を觀せ。ら。肄畢。時宗。実政。近く。招き。軍の。を。問。ぬ。
実政。其。早。春。注。進。仕。り。高。軍。師。牛。淵。九。郎。飛。瀨。渡。の。咎。ぬ。
楯。籠。り。を。瀬。川。吉。次。が。計。策。ま。り。て。牛。淵。を。欺。引。よ。西。末。の。龍。華。ぬ。吉。次

直を撃ち捕らぬ有然程に経高の已が居城の引籠り勢に既折けり某
 元を遠攻へ速に攻撃せしむるに経高飛瀾度の若を技とてその翼を
 失へども千餘騎の賊兵あり力戦を志すに御方も士卒を多く撃れんか且
 敵の兵糧竭く進退其処谷るとた一舉に経高を虜せんと遠慮を廻り
 稲麻の如く困せし夜に篝火を焼曉し又折々鼓を鳴りて攻蒐らんとする勢ひを
 敵示しと駭しとてその自滅を俟程に一朝敵の城を遙に見るに早炊の烟
 竟に絶く馬の嘶く声もせしとて原来敵の謀に疾攻破とて下知されし軍齊
 開を鼓りて早雄の若武者亦斬を浴し塙を乘騎驀直に攻著て二の城門
 破りて破る敵入もあつりありあり何と衆人呆とて彼此をえ冬ふの城門の
 東の方めいと大きき脱穴あり原来早晩穴を穿ちて彼知より落亡しつる其の
 奥を極めよとて二人を容れとて見せしとて大約廿餘町ありて遠城の背を海邊の

脱門あり彼処に殊に切所とて成の兵を措きつるに賊徒とて直をよく知り
 かつ長かるる脱穴を幾日あり穿ぬえふ慮ひの足らざりて捕逃せしこそ朽
 をけと疾その往方を索とて八支部とて軍兵多く出づ樹を伐り草を刈
 拂ふとて腰もさく涉獵る程に彼此相見居る賊兵懸生拘りて経高が往方を
 問ふも城を落し時皆散々ぬるに経高何地あるぞ存亡定りあるぞと
 たりとて経高も生拘を誅戮しと九洲の徇知ら骨相書をて経高が所在を
 穿鑿せしと絶く往方を知るよとて逆徒の城を破却しとかくと凱陣
 仕りぬ悔らるる経高を討漏しゆども九州既静謐と公私の大幸此うありと
 とい勇ましく演説を時宗はくちゆきとて總州這回の軍配の意外に鄙怯るる彼
 賊の軍師とせしと牛洲九郎清繩の軍監頼川吉次が計畧を乗せしとみづから
 首を贈るふ及びとて経高忽地膽を冷しと落支度をきつるに遠巻めし目を

送の渠の數町の脱穴を穿せしめしふぞや短兵急め攻蒐らる射方ヨク敵をれんと
 遠慮の然る事と云ふ或は水攻或は火攻方便をりて攻破る射方を損せし
 城を抜く軍術のいさむゆべし然る事その議及せしと矢種兵糧を費しあたら
 賊首経高を走せし抑誰が怒ぞや四境一日も静る時宗の日の寢食を
 安んず宵衣旰食園の大夏拘ひし士卒と戦せしとのせられの所云宋襄の
 仁ぬ似く胡慮ぬと云ふと憚る氣色もさく懲りぬる實政の畏れと
 病痾の假托もさく出仕もせしけり且しく時宗が後方侍り
 博多倍太郎を足久りて実政が這回の不覚をいひびらりと怒ぬの惜むべき
 のの只瀬川采女吉次へ渠実政の従を始終彼処に在らんぬ必く実政を
 諫め経高を虜ふるべし且秋布が情義の感と吉次を召還せし平慮の
 一失臍を噬むのよけり已比及ぬ秋布と俊平を相具しと出仕せしと
 彼を考らし又頼綱を招き近づけ経高追捕の一條ハ勿論諸めせしと國中ハ
 下知を傳へ搦捕を進ませる武士六御家臣あるべし庶民も賞錢を賜ふ
 べし縦罪ものとの功なりて罪を許えこの義をさく御知せしと遺る
 隈る政ちこの日の廳を果ぬる

第十四回 逆旅の初厄使者の釋

かくその詰且博多倍太郎正延ハ秋布主従を相具しと時刻を違へるあり
 時宗のよけを依ぬひと文注所ぬ出ぬり秋布を近く召しよめ汝女流の
 非力とて親良人の復讐を願やうを事神妙とこれより仇討免許の御教
 書をのり下し且盤纏の爲金二百両をのりて從僕俊平と心を合し仇人
 加二郎が所在を索く討捕を歸参し今よりその期を俟せしと叮嚀仰日と

二百金を賜ひけり。秋布の歡し。只感涙の咽ふ。世の
 有之。君恩の謝ひをせえぬ。遠侍の退出。この時内管領頼綱。秋
 布。若黨村澤俊平を遠侍の召登し。執權の仰を傳へ。汝主恩を以て
 故。秋布。仇討の供め立んと願ふ。殊勝。子思召る。百折千磨の艱苦。あ
 とも。今の志を程さざり。主を佐と本意を遂よ。功あより。恩賞。わん又一條
 別。あらゆる。國中。拘らる。追捕。の規下。知嚴重。汝主。從。逆旅の間。經高が
 所在を考ふ。を注進し。則。是。吉次。が生前の素懐。稱ふ。莫大の忠
 節。この。又。餘。夏。さ。秋布。の。仰。示。さ。汝。ま。よ。この。意。を。以。て。秋布。の
 達。上。等。閑。ぬ。兼。さ。と。繰。返。し。い。ひ。こ。せ。俊平。歡喜。雀躍。して。稟。命。を
 折。秋布。の。文。注。所。より。退。き。内。管。領。の。君。恩。の。よ。ろ。こ。び。を。述。く。主。從。

共。侶。君。所。を。出。り。出。る。と。死。正。延。の。二。を。送。り。こ。この。日。の。首。尾。の。辱。き。を。祝。き。
 俊平。又。頼。綱。の。傳。達。せ。れ。經。高。追。捕。の。規。下。知。を。秋布。の。告。め。有。終。程。の
 秋布。の。宿。所。へ。か。ら。ん。と。く。あ。ら。う。這。年。來。南。殿。の。時。宗。の。母。公。を。慈。愛。を。被。り
 生。の。辞。別。を。も。や。ま。と。と。軀。南。の。御。亭。に。あ。り。つ。執。達。の。女。房。の。云。云。と。う。考
 久。南。殿。歡。ひ。あ。ひ。と。む。さ。う。近。く。招。く。不。覺。の。涙。を。さ。ら。や。ぬ。宣。ふ。あ。ら。う。吉。次
 素。延。ホ。非。命。の。ろ。い。と。惜。む。餘。り。あり。親。と。良。人。を。月。の。中。に。喪。ひ。ぬ。价。の。哀。悼
 今。さ。ら。い。へ。く。も。あ。ら。う。と。孝。烈。の。志。を。逞。う。仇。討。の。義。を。聞。え。あ。げ。あ。ら
 御。免。を。蒙。り。近。日。の。首。途。を。告。げ。餘。波。惜。み。限。り。も。あ。ら。ぬ。只。速。に。夙。志。を
 遂。ぐ。ぬ。あ。ら。う。を。俟。ん。の。と。その。日。を。何。時。と。揣。せ。ぬ。留。別。の。見。参。る。れ。實。に。あ
 ら。相。譚。く。人。を。も。身。を。も。慰。め。よ。と。か。ん。不。孟。を。受。り。ぬ。後。も。貞。四。表。人。表。

物々々々長き春の目もけをり短くともえむひも南殿の語次ぬ又秋布の夏
か。そまゝ風流の才蘭と詠出せる秀歌も長く女博士もいつて博識入会
まき。遭ハ問ふとどひる。二つこの疑惑あり萬葉集の山のそめむらむら
去られ。こまゝ左丈思恵君の在らむ。又むら。集めむらの住む渚沙の入江の
るり沼のあかたつ。あまひま。あむむ。又むらのむら鳥も詠り。このあま
いもの。鳥の二種ゆ。鳥より形状ちひ。よ。君れ遊ぶのる。よ。日まも
知ま。あれも何れより。むら。あまひま。あむむ。よ。名義をゆる。よ。又伊勢物語の
夜もわけ。狐の食うえ。あまひま。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。
物々家鶏も書。よ。附會さ。催馬樂。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。
あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。
あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。

いふの同トといふ二説ハ誠ハ然るべし。鶏をひといふ夏は據ある。夏を考
む。置土産の説諦と疑ひを釋さ。よ。宣。秋布羞。面色。あむむ。
額つた。頭を擡げ。問。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。
先非を悔。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。
誓言の侍り。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。
日。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。
あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。
博物家の値遇。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。
け。許。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。
知ら。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。
夏。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。あむむ。

婦女子の博士態なるを悔く今よもる所行をせまらぬのぞと誓ひ
 亦愛なるを悔く今よもる所行をせまらぬのぞと誓ひ
 清少和泉式部小野小町の傳をたも貞操のこゆ疎うり你さくら非を
 知ましく云云とたひ訣ふ人の及ぶ事ゆえ現婦女子ゆえ仇を撃んと欲
 する男子の情態文を袂く武の依らざよ宿望を果えやかまらぬ
 さの追の秋布ゆわむと変成男子さけるのを風流の疑向といひ
 似る身の内裏恥たふなにかういふ世尊の對しと法向かふ
 八歳龍女成佛の二段を聞せし今の你的心操必ひ合はる義ゆえをいふ
 ぞと推くは諸法実相の法華されば男も實相女も實相非男非女も實相
 説く龍女の儘も成佛も説く該なるも変成男子とあるは是
 男子の成佛ゆえ女人の成佛ゆわらざるこの所異釋あり理趣釋經ゆ
 男女の梵語の出るを按する男も梵語ゆえと女の梵語ゆえと
 是れはよく観るとは男女の梵語ゆえと女人ゆえとの二點を加ふ
 のこのし点のことも通用しと二を災禍の点との又妄想嫉妬の点とも
 の具ゆ字義ゆえ有如此者八才なるは龍女が法華の諸法實相の
 大旨を了得し一切衆生悉有佛性龍女も佛も差別なく凡夫も佛も煩
 惱も菩提安相も實相法柿も甘乾善悪不二邪正も一貫迷ふは隔
 ありと了達する等の證ゆ渠が心裏の明鏡を釋尊の亦肉せし如意宝珠を
 進らばと經文ゆ説くは摠く言語ゆ演うを注せんと欲する心開意解と
 り義ゆの釈釋尊の頷く龍女ゆ印可表を遇宝珠を受を經文ゆ

石野金仙集卷之二

十五

説言のこころ心開意解なり。登時龍女の角折して、女人の角の甚だしき
 のぞ煩惱妄相嫉妬執念愛惜の心則是の五欲を字義の當まれば、彼
 点とるまゝのこころし点を取て見れば、便是入ること。所云男子の梵語めり
 迺變成男子の義入て、を無垢と釋せり。大日經疏第九の由る入て、
 無垢と塵垢の畧をいひ、即垢とて、を無垢と釋せり。成道佛果を遂ぐる
 南方の果徳を標し、無垢世界の男子なり。即無垢執心之然と、心の迷ひぬく
 女人の即女人の男子の亦女人の同し。形體のより約し、名義のわらば、
 よりと新婆沙論の劫初の時の男女の形相の異なる事と説く。涅槃經第九の
 菩薩品如来の常住佛性を知らぬの女人の男子と名づく説り。かゝる
 その形状こそ男女と名づくも、心は隔る。女人成佛疑ひ、と説く。今より
 を今より、熟思の合は、親と良人の仇敵を祖撃んと、文辭を相今より

武夏の名を揚げて、その入變成男子と、これこそ風流の技のし点を除却す。
 武藝の元と宗と、仇討の首途の餞別取とせん。おん野辺の指れ
 護身刀をとり、あひく。是命婦丸と名づく。筑紫鍛冶の業物、長
 一尺二寸あり。鞆の銀の猫を附け、一條院の愛さむ。韓猫の故事
 の命婦丸と名づく。この逸物の猫を、彼鼠川を撃捕し、勝むといふ
 とあるべからず。寔に愛せしと祝し、刀を賜は、秋布の遠く。左右の
 受棒と感涙の進むを覺え、そが刀を要め、帯と身の暇を請は、宿
 所とを退出ける。有知之而又秋布の俊平と相計ふ。親と良人の七七の追薦佛
 夏隔昨果、御法の首途引く。修羅の巷へ旅衣、あつちから
 帯の博多正延と相譚。奴婢の食身の暇を取ら、瀬川博多の西屋舖を
 正延の預け置行仕衣を敷せ、その曉の俊平と主従二人住馴。鎌倉を立出て

在り。千里の遠旅の赴く。博多倍太郎正延の腰越を。送る。遂に袂を
 分ち。有秋又秋布の往方定めぬ旅中。のまど京師に究め。繁華の地あり。
 且も彼処へ趣く。仇人の所在を。撈知る。手か。りのもの。やせん。と。俊平が。任す。
 東海道を。百十數里野を。過ぎ。山を。ち。踰る。露宿。宿。風。梳。押。習。草。枕。
 旅。寝。の。憂。を。身。ゆ。ぞ。知る。草。鞋。の。足。を。傷。ら。且。て。秋。の。路。傍。の。草。の。葉。を。
 鮮。血。の。染。め。孤。村。の。宿。を。投。り。て。夏。の。宵。の。月。光。の。送。ら。ま。る。行。め。秋。布。の。
 容。止。の。い。と。美。麗。に。死。ぐ。人。目。の。そ。か。わ。と。死。に。空。を。深。く。の。或。と。死。に。虫。の。垂。衣。の。面。を。
 累。辛。く。道。中。大。約。十。日。の。ま。り。急。ぎ。京。師。に。到。り。三。條。大。橋。の。邊。客。店。の。
 宿。投。り。日。毎。の。神。社。佛。閣。を。彼。此。と。巡。拜。し。仇。人。の。所。在。を。知。さ。ぬ。と。祈。
 る。日。と。も。六。條。の。妓。院。四。條。の。勾。欄。行。客。聚。の。所。殊。更。眼。を。駐。て。仇。人。
 如。耶。爾。似。る。もの。も。わ。り。や。と。機。を。配。る。と。四。五。十。日。の。及。ぶ。も。それ。と。や。人。の。

得。遭。ぬ。か。且。浪。速。の。赴。き。亦。復。彼。地。を。索。ん。と。既。小。京。師。を。立。ける。朝。
 秋。布。日。比。信。も。清。水。寺。の。觀。世。音。へ。今。下。の。詣。つ。八。幡。山。の。八。幡。宮。の。鶴。岡。の。
 大。神。と。同。神。の。を。し。ま。と。る。と。彼。神。社。も。参。ら。れ。と。願。ふ。の。や。俊。平。の。
 その。意。の。任。す。先。清。水。へ。参。詣。を。素。より。急。ぎ。旅。る。且。舞。臺。の。繪。馬。を。ち。
 瞻。め。音。羽。の。曝。布。の。邊。に。到。る。の。年。尚。弱。三。箇。の。行。客。伊。勢。度。會。の。太。
 神。宮。へ。脱。参。せ。り。の。名。わ。む。劍。太。麻。の。の。を。押。さ。る。藁。笠。を。背。負。ふ。と。
 栲。の。汚。垢。漆。の。脚。絆。の。紐。を。脛。高。小。結。び。做。し。同。行。二。人。と。寫。し。る。管。笠。を。
 圓。坐。し。件。の。曝。布。の。邊。の。手。の。合。る。募。縁。柄。杖。を。ち。卸。を。曝。布。の。
 寄。せ。受。け。頭。を。敲。き。旨。冷。と。稱。し。三。枚。を。ち。飲。み。ち。ら。
 秋。布。を。ち。と。女。中。の。鎌。倉。人。の。を。ち。と。今。鎌。倉。の。執。權。の。御。内。人。
 瀨。川。采。女。吉。次。の。内。室。の。博。多。秋。布。と。い。ふ。才。女。の。和。漢。の。書。籍。を。肩。小。藏。め。



石動録後集卷之二

十八

千石車赤



石動録後集卷之二

千石車赤

物さうゆく世と我亡夫と彼人の素戔生ゆくわかれればその面影を一点
 違ひ鏡に映る影の如くと定ふ傳聞するは初かの脱社参児をり
 龍華のわいと彼を浦二郎めわらむと必は熟視するその面影の一点
 なるも「夫に似ざるか」渠のづら別人も吾夫の弟ゆわら
 ざるを和殿のいへる如く俺們を認り軟偶中飲るねも平人ゆわらざ
 り。善悪邪正人の稟性表面のよれるものあらわき且ゆ怪死人のめい
 ん快からむとくもて急ぐと一里を走り既ゆ疲勞する間も遠く
 りゆけし主従もや心むらぬ其処より又路を急ぎ項の陸月の中流ゆ
 昏入暑の堪ざる是首の並樹被首の木蔭と屢想ひつれば既八幡へ
 詣る比日にも西の傾きゆくかて今宵浪速まよぬ著んと吐ひさ。黄昏
 時の造り何処に宿を討むべしとち相譚り社頭を退出る更ゆくと

一里許こよりの先途の曠野ゆ。雖邁々々人家あり。程小なる日山の
 陝小没果る。十六日の月の出るる不我町ゆ。今宵の宿す小わからん
 斯と暮る日高くとも八幡小留るべしを悔たるをきけりと主従頗小
 肺を噬の。今さら八幡小返らんとも却小迫るるゆゆせん。必難は復
 走ると数町ゆ。但見ま前途の茂林の中閃々として火の光最も幽小
 顯ま。主従齊一歡び。原来彼処人家ゆ。とち宿を討んとく
 歩の運びを急ぐ。その処小到り見ま樹芭を締繞し。東面小
 偏小なる木門ゆ。栗の素樸を柱ゆ。偏哲昇といふ三大字を彫做し
 樟の生化石の扁額を掲げ。主従は月光ゆ。この光景を熟視てこ
 田舎の道場あらん女子を留るる否を知らぬ。と左右もひあいらて今宵の
 宿りを討んとく。門戸を頻らち扣け裏面より誰を応り。同宿の沙弥

所以のゆゑとゆゑと問へ住持の微笑するの不審を理りしれ當庵の念佛
 堂ゆくこの地を偏哲林とゆゑの檀越講中居りしを曩の太宰の
 経高が逆乱のゆゑのりよも人の心の安らね諸檀講衆も離れりこれ
 よも目今へ貧道と只一箇ある徒弟の荒る堂宇を守りしを差入る物と
 るけしとも近曾強盗如々小起り人を害し物を畧る風声既の隠し
 こま小下と下晡より門戸をたたく鎖固く相識ならね止宿を許さば然れ
 どもおん身へ武士の撃手劍巻法に長多ん萬が一悪黨が宵田畧るち
 入るとゆゑ暗跡の土鑼を鳴らさべ。當下を身起出く強盜等を敷留め
 只も幸ひのきりよこの近村の患を除く功德にさうも莫大らんよりおん身
 武士の故ふいと憑くゆゑのり余るこのあまとも今宵をうり貧道
 師弟の枕を高く睡るるれ打火の報ひに二銭も望しうらむといと正首の
 説諭せ秋布の駭然と側聞る外視もあま俊平頻に感激しくいと
 巨細の教解ゆゑ一時の疑惑を散り現人家遠きあらで心細きも入
 ろんあま今宵のきりよをうり用心まはしといふ住持の歡ひ
 とく粥をすゐらせよと声高か小呼立ま地爐小蒼紫折焼く炊き小
 隙る件の沙弥の二前の交粥をりてまの秋布主従の薦るあせ物
 糲粉漬の舊し茄子も無色界縁る折敷も死る碗も時小取とる百
 味の飲食主従の箸を揚ぐ快く飲食し浅くお管待のよままびを
 述べ已ま住持の羞る面色ゆる客人達へ声音の坂東訛と傳れバ
 鎌倉の人のあま繁華る地の人さま小汚穢く味は死交粥を
 薦る相応しうらねど鄙語のいふる袖の振るる死をいふせ然れども
 旅をり死のゆゑかる更も後々夜話のつふるゆゑ夜を中と

賊婦が受とく。ちて中々ある小疑ひ者。ゆふの男女二人の名も盗
 賊ゆとそわのほらめ人ぬ油断をさせん為妍き女を伴ふ。彼も此も相須利之
 聖六波羅殿へ訴やう。首を刎らるゝのぞ。這奴が腰の重女ある。居
 其の金を隠し持る鉄二三百両わんとおれ。又女が懐小隠し。短刀
 ちん其の亦何処や。竊畧するのゆふと。両箇の悪僧言語巧み。這
 とく嘲るぬぞ。秋布の俊平も赤呆と倍然と。ゆひ合ふと。共量るぬ。這
 悪僧六強盗あり。知らず。伎倆の乗せられ。武運の竭る。過世の業報
 か。今更悔恨む。御愚魯なるべ。もふぬ。悪僧ホの言と心を
 表裏し。ゆふ六波羅殿へ訴ふ。元天あぬ程ぬ竊め。七路費の財を
 畧るる。君の免許を被り。仇討の宿志を得。遂ぞ今強盗の手ぬ
 死ぬ。何人う亦如此々々と。舊里人ぬ言報。西園の浦二郎との信と。

親族あり。今茲彼地ぬ赴か。訪んと。申斐も。今とをい。せ
 寺の茂林ぬ骨を埋めやせん。是非も。死身の果ぬ。と。ゆふの。主従
 齊一覚期と極め。争む。屠所の羊と身を。後世。人。の大事。れ
 弥陀佛々々々々々と。心ぬ唱る。佛名の音ぬ。秋蟬の長々ぬ。世を。唱言
 けり。その中ぬ俊平。再ぬ。後室。美人。を。殺せ
 と。後室。色里。へ。身。を。畧。んと。揣。と。の。一。旦
 活地獄へ墮させ。命ぬ。神明佛陀の眞助。て
 宿志を遂させ。如右せ。今ゆふ。果敢。頼。祈念を
 疑らす。王ぬ。千々ぬ。心。を。推。有斯之程ぬ。悪僧。板厨の戸を引。取。出。山
 商量。既ぬ。敷正。住持の悪僧。板厨の戸を引。取。出。山
 刀。沙弥。が。七。本。の。砥。桶。ぬ。水。を。注。ぎ。入。る。を。住持。を。引。き。合。て

月額の毛を討つ覚の研味刃を引提く俊平がわたりぬき憎まひぬやれ
 盗見よく聴けよ六波羅殿へ牽ゆつた罪をせんと思ひも生身二人を
 ちとと將と申と死途中の失脚煩うと得もる上途の夏小頸も贈
 二さるの費のゆむ覚期をせよと見ゆす刃の光りぬ秋布の吐嗟とをうり
 氣を胸と寄もくせんと縛の絆の索の引笛らんと醫居ぬ挫と轉ひる声
 惜す位沈め砥桶撥遣る徒弟の悪僧の賢音高し勿泣々と立
 ともく索拿縮る真柱も現直うぬ邪怪の手料理既ぬ住持の悪僧の刃と見光り
 と揮揚と名俊平が細頸を打落さんと折うら何の程ぬ潜寓え外面立
 在と竊聞とる捕もの武丈徒小夥兵五六名戸の節より鳳きと吐嗟や
 目今俊平の身首処を異ぬる危窮を猜せし件の武士彼禁めと焦燥る
 声と速く夥兵の板戸開放らぬと御説と叫りくぬ十手をうら

揮ち揮住持を柱と俊平が前後に立ち勢ひぬ不意を打き一両箇の
 悪僧おもむ麼奈何と駭遽と住持の刃を合落し沙弥ハ賢とち技
 けん立ちとつて幾遍の尻杵着てを輾びる登時件の武丈ハ進み入り左見
 右見と住持の對ひと威儀正しく和僧ハ本菴のまゝ某事ハ六波羅の北の
 正廳北條武藏ハ時村朝臣の御内人海原澳進と呼ぶものハ近曾ハ幡山崎の
 邊の強盗隠住よりその所をえあるより某仰を奉る追捕の為ハ潜て徘徊
 夜とくもの口を張る程の嚮ぬ湯を叩せぬ為夥兵の門戸を敲せぬ裡面ハ
 絶く応さぬ女子の哭声をえぬのあろぬとぬぬ樹笹を推破らぬ士卒
 齊に進み入り菴の外面に近づくと裡面の容と竊聞せぬ這男女兩人ハ諷りて
 甲夜小宿りを討めぬ深夜の物を竊とる盗賊ハ紛とる彼知ぬ在りて
 定ふ知まぬと六波羅殿へ將と申の訴せぬと憲断ハ依るぬぬぬ



九七〇 八十八年



石川金徳集卷之三

千箱車藏

然るを何ぞや出家の似けき。もほら殺さんとせられ。佛の慈悲の粗踏
 走く。猶且國家の法度は違へ。某ホ計らざり。あふ来つる。あそ幸ひ見
 索附の傍。遽とま。直よ六波羅へ將か。情由をやゆ。者共をやく
 罪人ホを受捕む。と焦燥多。登時蕃主の悪僧へ跪き頭を搦て。澳進が
 いふ。をもちゆ。わ。り。う。と。あ。つ。る。親兵ホを。遽。推禁めて。各位且く
 等。更。海原殿の教諭の趣き。乘伏せ。る。あ。ね。も。命を。り。く。擧捕。の。所
 巨盜を。の。傍。各。位。へ。遞。与。て。六。狗。骨。折。鷹。爪。捉。ら。る。と。の。鄙。語。も。劣。り。り。
 各々。の。つ。づ。還。ら。せ。更。天。も。明。ハ。當。庵。を。將。と。六。波。羅。へ。参。る。と。い。は。れ。る。果。む
 澳進。ハ。呵。々。と。冷。笑。く。原。來。菴。主。ハ。賊。を。捕。ま。各。聞。を。願。う。秋。某。が
 職。分。ハ。然。る。派。出。家。の。い。ふ。任。し。と。を。空。く。と。還。ら。ん。や。公。の。と。き。め。れ
 菴。主。の。今。と。我。們。と。俱。六。波。羅。へ。参。り。更。此。の。猶。豫。す。べ。く。と。

困。ト。住。持。ハ。沙。弥。と。目。を。注。し。釋。も。も。あ。の。夜。の。曉
 方。近。く。あ。り。ま。る。あ。ま。秋。布。主。從。ハ。陳。ぶ。便。宜。を。な。ご。り。主。客。邪
 正。の。問。答。を。も。ち。ゆ。わ。る。が。俊。平。ハ。あ。い。ま。て。澳。進。の。ち。對。ひ。海
 原。殿。と。ち。ら。ん。等。一。百。と。よ。某。ホ。ハ。盜。賊。ら。ず。這。法。師。ホ。も。盜。賊。れ。そ
 故。ハ。箇。様。々。と。い。は。れ。せ。も。敢。て。澳。進。の。眼。を。瞪。ら。し。声。を。立。す。這。盜。見。悖。々
 也。陳。ま。ま。と。ま。何。を。う。ゆ。死。親。兵。達。ハ。この。盜。見。ホ。が。贓。物。を。皆。携。り。牽
 立。と。よ。い。そ。ぐ。と。後。ゆ。立。り。出。去。ハ。親。兵。と。秋。布。俊。平。が。索。捕。詰。追。立
 る。を。い。と。本。意。き。は。目。送。り。し。而。惡。僧。ハ。袈。紗。袈。衣。彼。三。面。の。金。さ。み。の。り
 行。と。を。禁。め。り。齊。一。歎。息。を。り。ける。畢。竟。秋。布。主。從。が。安。危。存。亡。甚。麼
 ぞ。そ。次。の。卷。の。解。分。る。を。聽。ぬ。

松浦佐用媛石叢金後集卷之二終

休甫式田幾可駭驗對其卷之二終

休甫式田幾可駭驗對其卷之二終
休甫式田幾可駭驗對其卷之二終
休甫式田幾可駭驗對其卷之二終
休甫式田幾可駭驗對其卷之二終

松浦佐用媛石魂録後集卷之三

東都 曲亭主人編次

第十五回 雞鳧を辨れ無名氏敬言を垂る

却説秋布主従の不測に必死を免れ
六波羅の捕手の頭人海原澳進と
名告まゝの嬰兵ホも牽立ち
偏哲庵を出る折主従齊一
海原澳進へ盗賊追捕を職と
還る俺們主従が陳ぶ
酷史こそゆつらり遮
奸賊の毒舌を脱
執権の御印の仇討
許の御教書を取り出す
武州の村
鈍くも賊の謀
阿容と六波羅へ牽

る。と鎌倉をよもゆえる。六只主従のうの。とて亡親良人の恥なりか。左ゆも
 右ゆも禍鬼の祟りを攘ふ科戸の風ハ五口併が為吹ゆ。と形き。死世を憤る
 ち。下懐ひをいへ。え。岩摺む鷲の獨戸。獲ら。と。只餌。水媚。時の勢ひ
 せん。術のさ。牽る。隨。め。く。程。め。る。け。ろ。ろ。死。ハ。澳。進。も。野。兵。ホ。も。京。師。の。ま。を
 背。め。る。浪。速。の。め。ふ。赴。き。り。登。時。秋。布。も。俊。平。も。ま。ま。び。心。め。る。か。う。こ。の。海。原
 さ。う。い。ふ。の。共。六。波。羅。殿。の。下。知。ぬ。從。ふ。捕。多。の。武。士。あ。ら。ま。せ。て。俺。們。が。懐。ふ。物。あ
 正。ま。と。く。知。り。く。甲。夜。ふ。宿。り。を。入。届。け。そ。彼。賊。僧。ホ。が。伎。倆。の。裏。を。かく。詭。謀。り
 の。め。や。わ。ら。む。然。ら。亦。俺。們。を。何。処。ま。さ。う。將。く。ゆ。死。人。迹。稀。き。郊。原。を。ま。ま
 殺。し。財。を。畧。る。る。ら。め。さ。ふ。至。り。て。あ。い。合。ぬ。曩。ハ。俺。們。が。陳。む。る。う。を。一。言。半
 句。も。聽。さ。ず。と。又。悪。僧。ホ。を。疑。め。搦。捕。ん。と。も。せ。ま。う。い。ハ。肚。裏。ハ。一。物。あ。る。騙。賊。の
 後。さ。う。ん。の。ま。ま。前。山。ハ。虎。を。脱。し。く。又。後。原。ハ。狼。を。遇。る。か。似。し。る。主。従。ハ。死

期ハ。あ。ら。び。近。つ。死。つ。り。又。今。さ。ら。ふ。歎。ん。や。と。騒。ぐ。氣。色。ハ。さ。う。の。け。り。有。然。程。ハ
 海。原。澳。進。ハ。頻。り。野。兵。を。し。ぞ。ぐ。と。そ。が。俊。秋。布。主。従。を。牽。の。り。と。と。十
 町。あ。ま。り。と。長。か。る。松。原。の。左。右。ハ。渺。々。水。田。さ。る。一。路。上。を。過。る。と。死。東。ハ
 既。ぬ。ま。ま。及。け。り。當。下。海。原。澳。進。ハ。野。兵。ホ。を。呼。笛。め。く。さ。の。ま。ま。遠。く。ゆ。く。あ
 及。び。ま。の。め。と。ま。く。相。計。へ。う。と。し。ひ。ハ。袴。の。校。と。ろ。小。堤。ハ。尻。を。う。ち。掛。け。ま
 秋。布。と。俊。平。ハ。今。澳。進。が。云。云。と。い。ひ。つ。る。う。を。う。ち。せ。く。扱。の。ま。ま。の。処。ぬ。く
 俺。們。を。殺。ま。ふ。こ。そ。と。斬。さ。う。と。い。ひ。ぬ。ま。う。の。あ。悪。ひ。ま。も。せ。む。立。在。を。野。兵。ホ。ハ
 澳。進。が。や。う。り。近。く。牽。戻。し。く。さ。も。被。る。主。従。の。縛。の。索。解。捨。す。い。ざ。と。ま
 躡。り。立。退。き。く。主。の。左。右。め。つ。の。あ。る。聲。み。あ。豫。さ。の。尋。思。ハ。違。ひ。秋。布。も
 俊。平。も。是。ハ。什。麼。と。ま。う。の。あ。且。驚。き。且。呆。き。と。忙。然。と。と。少。選。ハ。正。回。へ。ぐ。も
 わ。ら。さ。り。を。疑。惑。さ。し。と。澳。進。ハ。含。笑。ま。う。左。見。右。見。ハ。秋。布。主。従。ぬ。ら

石胡金後集卷之三

千餘車非

對ひ。緣由を告ごのひ。さぞ訝しく。あつらん。然とも。識らぬ。と。あつぬ。
 某を忘る。ひ。欲きの。音羽の。籠の。糸む。被。も。他生の。縁。その。折。
 つら。相せ。ま。ん。身主。従。昨。夕。通。厄難。既。見。ま。う。貞烈。孤忠。の主。
 従。着。殺。ぬ。ま。ぐ。も。わ。ら。ず。い。ろ。竊。ぬ。救。ん。の。を。と。あ。も。老。波。親。切。や。徐。ぬ。
 跟。を。附。く。ぬ。果。し。て。偏。哲。林。る。賊。僧。の。宿。り。を。討。く。あ。つ。ら。死。地。の。階。に。
 む。ぬ。知。ら。ぬ。件。の。賊。僧。の。太。宰。の。経。高。が。舊。臣。で。邊。訖。平。次。將。純。と。呼。び。
 の。又。その。徒。弟。の。青。入。道。の。將。純。が。若。黨。多。り。岩。幕。九。郎。即。こ。こ。入。往。ぬ。
 經。高。没。落。の。比。彼。ホ。主。従。西。国。を。も。ち。ま。く。逐。電。と。主。の。先。途。を。入。る。心。を。
 ぬ。只。顧。ぬ。世。を。潜。ん。為。髪。を。剃。り。姿。を。窺。し。と。抖。敷。行。脚。の。法。師。の。打。扮。
 彼。此。を。偏。歴。し。と。京。師。近。く。旅。宿。せ。比。偏。哲。菴。の。頰。破。し。と。無。住。り。を。
 取。立。ん。と。推。く。菴。主。の。あり。し。り。行。客。を。欺。き。留。り。殺。人。と。す。殺。害。と。衣。賞。

盤纏を奪略る。殘忍無慚の癖者。之某。こ。こ。を。知。ま。る。ふ。よ。り。奇。術。を。
 の。ま。ぐ。の。如。く。貌。を。更。親。兵。を。將。と。六。波。羅。殿。の。御。内。人。海。原。澳。進。と。い。ふ。
 偽。稱。し。と。ん。身。主。従。を。救。ひ。の。孝。烈。孤。忠。を。愛。ま。ふ。か。疑。ひ。ぬ。心。の。
 底。を。説。諦。ま。ぬ。の。ひ。る。見。人。の。誠。の。主。従。を。び。驚。き。ま。う。と。初。と。暗。を。
 定。め。と。這。無。名。氏。を。熟。視。ま。不。現。き。の。音。羽。ぬ。假。漆。ま。の。と。い。ま。し。と。彼。
 腕。社。参。の。少。年。と。の。折。の。年。齡。の。十。六。七。と。い。え。り。い。け。ぬ。人。柄。重。重。と。二。十。
 五。六。の。壯。佼。と。い。え。り。ぬ。疑。ひ。の。あ。は。解。く。べ。も。あ。ら。ま。し。と。秋。布。頓。り。驚。嘆。
 一。と。圖。ら。ざ。り。け。好。意。ぬ。大。厄。難。を。極。ま。と。再。生。の。恩。人。の。実。名。と。も。告。れ。
 ま。何。を。ま。ま。ぬ。再。會。と。這。回。の。報。ひ。を。す。よ。ゆ。ん。雜。奇。術。の。あ。ま。と。と。ぬ。
 き。の。路。頭。の。乞。者。ぬ。け。の。親。兵。四。五。名。を。相。従。へ。る。頭。人。と。い。れ。ら。ぬ。の。あ。ら。ま。し。と。
 偽。り。と。い。ふ。後。平。の。膝。を。進。め。和。君。の。吾。儕。主。従。を。よ。く。知。り。ま。ま。ぬ。欲。然。れ。と。ぬ。

吾侪主従のいまご和君を多うきり死そのいさをせきり加以左右侍るこのいさを這親兵このいさをと何のぞ
 和君子仕る人々然このいさを然このいさを外このいさを備このいさをと欲願このいさをの具このいさを説示このいさをと疑心を齊
 させんと主従齊一詰問このいさをの疑念このいさをと無名氏このいさをのうも突このいさをるこのいさをう領このいさをきて
 日このいさををこのいさを盡このいさをさこのいさをるこのいさを如右このいさをの如このいさをも理このいさをりこのいさを日このいさををこのいさを名このいさをもこのいさをるこのいさを性このいさをもこのいさをるこのいさを素このいさをより
 一所不住ゆてこのいさをの時このいさを西このいさを在このいさをり又このいさをと死このいさをの東このいさをの遊このいさをひこのいさを弱このいさをきをこのいさを資このいさをけこのいさを枉このいさをと
 拉このいさをぎこのいさを只このいさを善このいさを人このいさをの荷このいさを擔このいさををこのいさを悪このいさを棍このいさをと交このいさをり遊このいさををこのいさを劇このいさを孟このいさを荊このいさを荷このいさをが亞このいさを流このいさをの如このいさを困
 俗このいさをのこのいさを男このいさを達このいさを唐山このいさをのこのいさを俠このいさを客このいさを者このいさを流このいさをもこのいさを必このいさをるこのいさを日このいさををこのいさを牙このいさをと遠このいさをくこのいさを且このいさを天このいさを稟このいさをの
 奇術このいさをありこのいさを兩このいさをを石風このいさをを起このいさをし木このいさをを刺このいさをる人このいさをとこのいさを草このいさをを締このいさをる牛馬このいさををこのいさを足このいさを更
 這親兵このいさをホも家僕このいさをゆもこのいさを備このいさを丈夫このいさをゆもこのいさを手このいさを悪このいさを入道このいさをノ平次このいさをを欺このいさをん為このいさをふ
 のと作りこのいさをるこのいさを一このいさをつこのいさをのこのいさをゆこのいさをとこのいさをいこのいさをひこのいさをつこのいさを左このいさを右このいさをのこのいさをつこのいさをのこのいさをぬこのいさをるこのいさを親兵このいさをホを皆このいさを撒このいさを撮このいさをて掌このいさをの
 上このいさをのこのいさを衆このいさををもこのいさをとこのいさを日このいさををこのいさを不このいさを真このいさをの人このいさをゆこのいさをゆこのいさを紙このいさをを剪このいさをる細このいさを小このいさをる人このいさをの體このいさをゆこのいさをる

る折このいさをら戦このいさを朝風このいさをの吹散このいさをさこのいさをまこのいさを紛々このいさをと何処このいさをともこのいさをるこのいさを失このいさをれこのいさをれこのいさを跡このいさをゆ
 俊平このいさをが行囊このいさをと大小このいさをの両刀このいさをと悪僧このいさをホが袈裟このいさを法衣このいさをと彼黄金このいさを之このいさを両このいさをのこのいさを法
 衣このいさをの間このいさを遺このいさをりこのいさをるこのいさを奇このいさを異このいさを妙このいさを術このいさをのこのいさを主このいさを従このいさをゆこのいさを驚このいさを嘆このいさをし且このいさを呆このいさをるこのいさを正
 半晌このいさををこのいさを又このいさをいこのいさをふこのいさをもこのいさをありこのいさをを無名氏このいさをノ行囊このいさをと両刀このいさををこのいさを揚このいさをるこのいさを即このいさをここのいさををこのいさを俊
 平このいさをの返このいさをへこのいさを舊このいさをのこのいさをどこのいさをくこのいさを身このいさをの著このいさをめ且このいさを誠このいさをとこのいさをいこのいさをけこのいさをひこのいさを和殿このいさをの今このいさをの世このいさをの有このいさをるこのいさを死
 清白このいさをの義僕このいさをもあれこのいさをも人の心このいさをの脆このいさをきのゆこのいさを善このいさを小進このいさを共このいさを善このいさを小程このいさをり悪このいさを小進
 ぬこのいさを悪このいさを小程このいさをる壁このいさを言このいさを水このいさをの器このいさを小従このいさを小異このいさをるこのいさを日このいさをと和殿このいさをを相このいさをまこのいさをるこのいさを小恐このいさをらく色
 慾このいさをの惑このいさをひこのいさをありてその牙このいさをを謬このいさをつこのいさを正このいさをのやあこのいさをん慎このいさをと定このいさをと説諭このいさをせこのいさを俊平このいさをふこのいさをく
 感激このいさをしこのいさを教諭このいさを寔このいさをの所以このいさをに死このいさをのあこのいさをず某このいさを今このいさを茲このいさをハ三十八歳このいさを尚このいさを初老このいさをのいこのいさをを
 至このいさをらこのいさをせこのいさをしこのいさを日このいさををこのいさを死このいさを後このいさを室このいさを小俱このいさを一このいさを奉このいさをるこのいさを日このいさををこのいさを得このいさをざるこのいさを所このいさを行このいさをゆこのいさを柳下このいさを惠このいさをふこのいさをわこのいさをるこのいさをこれこのいさをバ
 傍難このいさを免このいさをとこのいさを死このいさをを知このいさをるこのいさをとこのいさを表このいさをれこのいさをるこのいさを造次このいさを顛沛このいさを戦々このいさをとこのいさを怖慎このいさをと夜毎このいさをふこのいさをる

宿をばも後室と室の睡らむ。猶く年をかきあへば。この言ふ詭理わらふ。
 天雷小震まき死をえとの義の心安と誓言ひをきき秋布も亦無
 名氏ふうち對ひて。曩小仇人を撃んと。鎌倉を出り日より主従下日も
 復雙言の志を移さる疑難の心もつをけまき過一宿り。猶且今の
 教ふよそ未然を禦さ侍るべ。寔ふん身入人あそ人あぬ妙術あり。俺們が
 久後の吉凶も成敗もよく知りそこそとせしめしめ。願ふ具小示させあそらん
 中後をふ事臨まきあそらん。あそ死るの言もあそ。猶このえの好意ふ
 こそと亦他更もき。請問へ無名氏頭をうち掉す。日と知らざるふわらぬも
 天機の叨小漏せざる。これ吉次兄弟の外家小舊縁あり。昔瀬川
 道孝夫婦が鏡宮小子を祈り。側室玉嶋を獲て。遂小寧見を産
 けり。もかんが鎌倉なる石切山の望夫石のやうゆ。猛小産れ出る。は皆

是松浦佐用媛の因果と惹る輪廻應報今生ゆり果せり。この故ゆ
 吉次もその弟浦二郎も夫婦送小相愛。夫婦全く聚ると輒からず。
 あそわれも後々まき。孝烈忠信の志移らば。一婦ハ榮え一婦ハ枯ん具も
 亦その親の善悪二報小由る。あそ亦奈何ともせしむ。今よりそ
 三歳の後乾坤丸ゆ。再會せん。こを記臆せ。あ合はるとあべ。
 ころぬと説示せ。秋布ハ感涙の襟を濡らまを覚せ。無名氏を伏
 拜。君が教ハ氏神の託宣と。あゆむ。あ忘るべ。死との心を無名氏
 推禁め。これあ九丈の為小拜。徳あり。あ神の眞助も佛の利益も
 禱る。あ誠されば。あ虚空を拂ふ。あ曩小鶴岡の神の託宣も
 親の為小命を捨んと誓言ひ。あ身が誠小依れ。只日か吉次兄弟夫妻を守ハ
 因縁あると。生前の業報盡ね。ああ。あ初厄を

脱だつきこれども又また遠とほうらず再また厄やくわらん慎しんまと諭ごらん左ひだり邊へのま生なまをたへるて
 このけ袈け裟さ法ぽう衣いハへ惡あく僧そうホが身み小せう著ちやくうけんのまれもも形かたち状じやうハま正ただくく佛ぶつ衣い遺いく
 人ひと取とらせんま松まつのえ枝えだ小せう投な掛かまる二に面めんのきん金かねのかた片かた々々とお落おるをかんてもからで遠く
 袴はかまのひも紐ひもをと解とけつ羽う織おも脱捨すて野將しやう衣い束たわれ牙が木ぎをかんて為なす假裝げのま今いまハ
 一いも要るといひひつ背せ小せう著ちやくうけ燧ひ袋ふくろを搔撈かき火を鑽懸くる枯結く縷る草くさの
 燃も立たてる人ひと袴はかまも羽織おも投入な々々燒や捨する煙小せう怕おそま居越いのい息いきのの田での畔より
 而しか二に隻しやく者しやく高たかく蜚去ひを秋布ふ遙とほ目め送くて又無む名な氏しふうち對ひ君中ちゆう既いふ
 志しを好まして身の仇とありしよう生せい涯げ風ふう流りゅうの技をせげと心こころ小せう誓ちか言げんひらり
 一いを南殿なんの知一い石い小せう身みの暇ををまうしつ見けん参さんの日の言次げん小せうあらのむら
 鳥とりのあらの義ぎと鶴ををりしの名義ぎを問せぬひ然然ぜんけしももまらの
 一いハこらいの心を知りしようの心を云と生口せいやうし長き旅
 宿しゆくのまりく小せう博はく物ぶつ家か小せう值ち遇ぐしはるまも問質しつして歸府ふの日小せうおし土ど産さん小せうま
 けれと答ませしるゆり死し者しやく今いま居い越いのい息いきの立をしれがそのるの了
 得えよまひ已らし。かる時とき小せうさるるを問もん奉ほうる鳥許こるべしどうかるまる貴人きの
 問もんせぬひ支されば教を受うけ願ふの言げん示しさせぬと他た支しさすい無名
 氏しハうち笑るがう頷きその知りをたるこう彼かの陸りく畑へんが埤雅いを見る巻の第ハ
 譽うの下小せう陸りく畑へんがいるとわり方ほう言げん小せう齊せい宋そうの間小せう凡ぼん物ぶつ盛せい小せう名なを名つけく
 冠かんといふ郭注かく小せう日に今いま江かう東とう小せう小せう息いきのヨミミと無數ぶ無む數ず俗よく小せう冠かん息いきといふ
 といふ冠の和訓わハ即安あん又また息いきの和名わハ即加か毛もうといふをわらちと唱なるようハ
 たとちと相あ通つうされば又鷄けいををけしといふ同書どう同どう卷まきる鷄の下小せう日に或あるハ
 い鷄ハ系べ故小せうを系といふ鴨ハ押べ故まこれを鴨といふといへりかまま

一いハこらいの心を知りしようの心を云と生口せいやうし長き旅
 宿しゆくのまりく小せう博はく物ぶつ家か小せう值ち遇ぐしはるまも問質しつして歸府ふの日小せうおし土ど産さん小せうま
 けれと答ませしるゆり死し者しやく今いま居い越いのい息いきの立をしれがそのるの了
 得えよまひ已らし。かる時とき小せうさるるを問もん奉ほうる鳥許こるべしどうかるまる貴人きの
 問もんせぬひ支されば教を受うけ願ふの言げん示しさせぬと他た支しさすい無名
 氏しハうち笑るがう頷きその知りをたるこう彼かの陸りく畑へんが埤雅いを見る巻の第ハ
 譽うの下小せう陸りく畑へんがいるとわり方ほう言げん小せう齊せい宋そうの間小せう凡ぼん物ぶつ盛せい小せう名なを名つけく
 冠かんといふ郭注かく小せう日に今いま江かう東とう小せう小せう息いきのヨミミと無數ぶ無む數ず俗よく小せう冠かん息いきといふ
 といふ冠の和訓わハ即安あん又また息いきの和名わハ即加か毛もうといふをわらちと唱なるようハ
 たとちと相あ通つうされば又鷄けいををけしといふ同書どう同どう卷まきる鷄の下小せう日に或あるハ
 い鷄ハ系べ故小せうを系といふ鴨ハ押べ故まこれを鴨といふといへりかまま

小鳥の群をわぢかると和名せしむ又雞を子とするも皆唐山の故
 事（和訓）と名づけし（の）系の和訓（つる）とも又（あ）多るとも讀む義あり
 雞ハ羽の（と）飛ぶ（え）の（え）なる（の）の（こ）より（と）系（ひ）置（ひ）る（と）鴨（あひ）も又（あ）飛ぶ
 正得（え）さ（て）ず（つ）手（ま）唾（ま）し（ま）く（お）押（お）す（ま）鴨（あひ）と鴨（あひ）の和名（と）あり
 今俗（の）か（と）讀（よ）る（と）非（あ）り（ま）か（ま）け（ら）の（あ）鳴（あ）声（の）あ（ら）る（と）彼（の）謡（の）
 の（と）その（と）故事（と）失（ま）れ（ま）催（ま）馬（の）樂（の）云（と）訛（り）を（傳）へ（る）無（名）の（辨）小
 似（ふ）し（と）も（と）扣（ま）き（と）鳴（ま）る（と）鐘（の）息（の）才（の）女（の）為（の）談（の）と（と）緯（の）詳（の）小（の）説（の）明（の）廿（の）秋
 布（の）歡（の）び（の）い（の）ふ（の）う（の）も（の）あ（の）ふ（の）を（の）側（の）聞（の）せ（の）俊（の）平（の）も（の）俱（の）小（の）汗（の）を（の）感（の）ト（の）ける（の）無（の）名（の）氏
 秋布（の）い（の）ふ（の）う（の）ち（の）對（の）ひ（の）と（の）見（の）身（の）既（の）小（の）穿（の）鑿（の）字（の）の（の）非（の）を（の）知（の）る（の）甚（の）妙（の）あり
 穿（の）鑿（の）字（の）を（の）好（の）む（の）廣（の）博（の）小（の）誇（の）る（の）人（の）の（の）為（の）一（の）生（の）涯（の）書（の）厨（の）と（の）れる（の）家（の）を
 身（の）を（の）脩（の）る（の）よ（の）ま（の）ふ（の）る（の）も（の）一（の）況（の）女子（の）の（の）博（の）士（の）を（の）傷（の）痛（の）き（の）の（の）

天然良配（の）を（の）ぬ（の）あ（の）身（の）を（の）措（の）け（の）る（の）人（の）小（の）物（の）を（の）向（の）る（の）穿（の）鑿（の）字（の）の
 科（の）め（の）一（の）生（の）苦（の）勞（の）の（の）絶（の）ぬ（の）め（の）又（の）一（の）俊（の）平（の）の（の）為（の）一（の）生（の）涯（の）と（の）それ（の）執（の）權（の）より
 賜（の）り（の）二（の）百（の）金（の）の（の）遣（の）や（の）と（の）私（の）小（の）要（の）め（の）る（の）盤（の）纏（の）り（の）又（の）數（の）十（の）金（の）あ（の）ら（の）ん（の）と（の）三（の）百（の）金（の）
 婦（の）人（の）の（の）相（の）見（の）と（の）三（の）百（の）金（の）を（の）携（の）る（の）萬（の）里（の）の（の）路（の）を（の）無（の）異（の）め（の）る（の）徧（の）歴（の）せ（の）む（の）欲（の）
 抑（の）難（の）き（の）所（の）行（の）さ（の）む（の）と（の）盗（の）難（の）め（の）る（の）金（の）の（の）言（の）三（の）故（の）れ（の）と（の）心（の）の（の）最（の）可（の）嗟（の）小（の）説（の）論（の）せ（の）主（の）從（の）驚（の）き（の）且（の）感（の）ト（の）く（の）い（の）そ（の）う（の）明（の）教（の）小（の）違（の）ん（の）後（の）々
 心（の）の（の）銘（の）と（の）成（の）る（の）べ（の）と（の）答（の）け（の）登（の）時（の）無（の）名（の）氏（の）天（の）才（の）ち（の）仰（の）き（の）あ（の）れ（の）又（の）是（の）既（の）小
 日（の）の（の）高（の）昇（の）り（の）と（の）長（の）物（の）の（の）時（の）の（の）程（の）を（の）知（の）ら（の）ざ（の）然（の）ら（の）を
 袂（の）を（の）分（の）と（の）鬼（の）蝮（の）袴（の）の（の）單（の）衣（の）の（の）裳（の）を（の）引（の）折（の）毛（の）牒（の）を（の）頭（の）に（の）立（の）別（の）と（の）ま（の）る
 折（の）ら（の）遙（の）小（の）追（の）来（の）る（の）兩（の）箇（の）の（の）賊（の）僧（の）各（の）々（の）山（の）刀（の）を（の）腰（の）め（の）る（の）竹（の）槍（の）を（の）引（の）提（の）む
 飛（の）ぐ（の）似（の）く（の）近（の）つ（の）を（の）無（の）名（の）氏（の）信（の）と（の）見（の）か（の）そ（の）凡（の）昨（の）宵（の）彼（の）奴（の）小（の）を（の）擊（の）捕（の）ん（の）と（の）

一石鬼録後集卷之三

七

千金車載



秋

三右衛門

三右衛門



勇を奮て
むめい
死名氏
二兇を撃

死名氏

全中

石刃鏡秘集卷之三

一宗車

敦圉きまき叫よびが邊へま玩あそが擬勢ぎせを憑たび岩幕坊いさま槍やりを拈ひぎく衝懸つるを無名むな氏うぢをみ身みをそ反そうそくく穂頭ほと左ひだりの握留にぎりめき引ひ抜ひくく勇士ゆうしのち大刀たう風かぜ槍やりの真中ま斫落ちと程ほどのゆゆきき邊玩へまが勢いきひ悍はく衝つく竹槍たけやりを彼あ此こ三度さんど遣違ちがひひと足あしを飛とく踏落ふみせせば左右さゆう齊いっ山刀さんを技わざき閃ひめめくく撃手うんと進すすむを丁ちやう礮ぱうと受流うと奮撃ふん突戰とつ目覚め一上いっ下げと秘術ひじゆを盡つくせしし無名氏むなの殺ころ立ちち色いろめ死し騷さわ々々両箇りやうの惡僧あく逃にとと岩幕い背せをき大おほく劈きとと苦くると叫よび倒たとと邊玩へまもも二三さんヶ所ヶ所と殘のこ負おひひくく夜結よが生死せいももるる刃やいばの雷光らいや天あまの俄頃いつ結陰むすと礮ぱう々々と鳴雷なる朝立あの雨あめ瞬ま間ま松まつが枝え洗せんふ樹下じゆ層そう蹴揚くの泥どろ俊しゆん燈とうきき撃う大おほ刀たう取次とるるふふ邊玩へまを肩尖かたより無枝竹む創くわ斫ちしし刀やいばの牙くは新あら刃やいばの無名氏むな神術かみ奇特きの働はたら縮ちぢ葦あし蔭かげへ退ひきき立たをた初はめめ目成め話わるる秋布あき主しゆ從じゆ心こころも

天あまも稍しやう霽はるる兩りやうの小歇せう立た出でるる適あたい恩人おんと声こゑをかかるる巴や見みかかへへりり今いまもも其その処ところ居ゐるる軟賊僧なんもも殺害ころをを且かつババ地方ちゆうのの小抑留せうせせれれ係合けいの無益むの所行しよ入いるるこの間ま去いるるややよよくくといいそそが折をらら雲うををぬぬままびび聚ありり又また降ふるる驟すず雨あめ撲つまま忽たち地ぢ息いき吹ふかかへへ岩幕いの稍身しやうを起たてて敷しんと進すすむを無名氏むながが煉れんの刀尖やいば愈いすす細こ頭あたま撲地つと撃うち落おせせばば鼓こと立たるる血焔ちを見捨み捨するる主しゆ從じゆがが往方かうも天も定さだめるる怨恩おんと情なさけの別わかれ路ぢのの名残なの惜おぼしし不測ふの奇遇き再會さいのの後あとをを原はらの松まつの下した蔭漏かげるる雨あめ濡ぬるる浪速なみへ赴むかひひ三歳さんの後あとをを原はらの松まつの下した蔭漏かげるる雨あめ濡ぬるる浪速なみへ赴むかひひ

第十六回

良僕夢寐の美玉を摧く

原是浪速なみの都會との福地ふ船ふね日ひ々々入津いるる萬物ばん輻輳ふせるる商賈しやう貿易ぶの港みなとの民たみの鬼おにの眼まなこひひぬぬるる亦また石上いと都みやこの迹あとああれれ

平安京の比目山水の勝景を只海水の眺望ありは俗地といふと死の人間疎まらるべし。こまを福地といふと死の守銭虜の識を治るべし。こま又秋布の無名氏別居より俊平の杖掖とく。その日浪速の著ふけは天満のやまの客店小宿を定め主従日毎のわちこちと徘徊せざる隈もさく仇人鼠川加二郎が在所を索討めつ又いくさくの目を弥る小三伏の炎暑やうなぐ冷く魂祭る宿月見る基謀月捌月と過るまふく。こま宿のいさむら竹うち戦ぐ夕夕は毎の秋の上風と詠りけん然るぬ。秋の悲し死ののる小塚を出せと誡める。閨秀麗人の幸る死や親を喪ひ良人の後まき。苦小寝干を枕とし。萬里の逆旅の仇人を索る秋布が心盡し。いふべうもあらざるべし。ゆと死杖と。憑き坐るこまの抹卓ともおりの俊平只一人のこま亦さるのゆ。慎まふく見ゆ

はは男女席をさる。授受むといふ。教を忘る。あらざる。旅のあれは。甲斐なる。疎め辭敵も。親しめ後安らざる。左の就とも右の就ても心いとし休らぬ。旅宿さる。小年れく。浪速の春を迎へとも仇人の所在を知る。世の暖ゆる。比肥の測小趣き。浦三郎やをも訪ふ。鏡の宮へ詣んと。さる。天満小ありける。如月の下院より。秋布の何と。心地煩く。見え。俊平大。驚き憂く。醫師を招き。薬劑を討め。さる。小勲る。然。里と。ち。臥せ。程ゆ。あらず。只を。く。小痞。發り。く。苦む。との。大。さ。る。ぬ。も。症。ま。不。又。忘。る。こ。ま。如。し。こ。全。く。屈。く。る。氣。の。こ。ま。病。疴。の。氣。長。く。保。養。さ。る。と。醫。師。が。い。へ。今。さ。る。舟。行。う。とも。西。國。へ。趣。ん。る。稱。ひ。う。こ。かり。さ。る。程。の。春。の。暮。る。日。影。鬱。悒。き。夏。の。来。けり。天。満。の。旅。店。の。西。面。で。暑。熱。ゆ

得堪う死をいふとこの夏を送らん難波村のやうに死借屋のわ
 としへ俊平のその人小就と件の家を見ふゆえに一町人の女徳居と
 りのの住捨る迹ととぬりてども障子席薦の類も具らざといふ
 とる。庖厨とも二間あり。浴室も遠くを假漆の橋居あり。小
 勝は言ふ処ありと。と必ふ恥立かへり。秋布よりを告る。和殿が宜いと
 必ひまふ。又何を擇ん何処へ行くと。いふ。俊平歡び。肆月
 下旬の主従二人難波村へぞ移る。是より後。秋布の病著い。ち。瘡ら
 ぬ。俊平は又醫師を易く療治を乞ふ。初の如く。今茲の秋の季より
 秋布が病著やう。重く臥せ。俊平い。ち。驚き。眞愛で
 間ち。と。を。看。と。と。所。為。ぬ。賢。る。ぬ。壯。伎。の。多。ひ。と。ふ。と。更。も
 べうもあつと。備婆ととも資ふせむと。必ひつ。そを家主小相譚の

この借屋の家主の月籠屋店九郎と呼ぶ。小商ひをやるもの。て相
 と五六間いと編小なる母屋に住り。その性木訥なり。と。聊。実。情。あ。る。の
 る。不。快。く。兼。引。く。傭。人。を。索。る。程。陽。月。の。初。め。至。り。輪。栗。と。い。へ。る。老
 婆を將て来と。月傭めと。薦めり。渠の相肩の棒太と呼ぶ。西の船場
 る。轎夫が母の齡の五十餘り。口より利く。何事ぬ。眞實に。と。り。て
 進止ふ。この日より。置。火。打。水。汲。む。炊。の。所。行。医。師。許。菜。劑。を。乞。ふ。も
 俊平のこの資あり。下肩休る心地。然と。折々。幼。錢。の。耗。る。と。る。の
 あり。を。負。た。故。心。汚。穢。き。輪。栗。が。所。為。歎。と。多。と。必。の。捨。り。回。り。料。さ。す。
 ころ。も。程。ぬ。の。年。も。残。り。少。ぬ。る。ふ。ら。素。より。盤。纏。小。豆。を。飲。む。妹。の
 一。わ。し。年。の。尾。の。管。を。ま。せ。く。も。あ。ら。ず。俊。平。の。長。き。夜。さ。が。う。幾。遍。と。り
 起。り。秋。布。が。枕。邊。を。う。周。き。爐。の。炭。を。續。き。湯。茶。を。薦。め。て。一。夜。さ

懶らず。輪栗の多し居狎る。隨ふもまじは仕とる。傷痛きるのハ
 ありとも。秋布も俊平も今更ぬ栗とて。とるハ亦何事もなす。
 一々稀なる。徒然ちまは。輪栗ハ火盆を中めく。俊平と對ひをり。江湖
 上の物さるる。とまる。序ぬ後室さまの病著ハ氣のかこころいふのめあえ。
 こころ。嬌婦めく暮る。あは。さる。病著の發るぞか。おん身もあやう。物頑し。
 老朽さる。身ゆもあはぬ。後室さまを慰めせむ。さる。病著の發るぞ。ち
 置きさる。ハ油断ぬあは。ま。乍。麻さる。情由のあは。知らぬ。ど。男女の主従が
 僑居さる。女夫さる。ま。と。宜ふとも。誰か。實事と。あは。死。日ら。ハ。仕。ハ。ハ。ハ。
 せん術ハ。さる。も。あ。え。鈍。き。も。事。ハ。依。る。の。の。を。と。真。實。と。ち。て。長。く。と。俊。平。ハ
 いと。浅。ま。と。さ。ハ。他。事。ハ。紛。ら。さ。と。さ。ハ。臥。房。ハ。入。り。さ。る。日。比。の。疲。勞。ハ
 熟。睡。を。し。さ。る。か。さ。と。秋。布。ハ。次。の。日。の。早。旦。より。猛。ハ。病。著。瘥。り。息。か。さ。ハ。

今ハ。目。も。さ。る。肥。の。州。へ。赴。く。師。走。の。天。ハ。雪。を。犯。さ。路。ゆ。め。ぬ。さ。ハ。ハ。
 病。煩。ふ。と。も。の。め。く。死。ぬ。ハ。勝。べ。と。さ。この。日。より。さ。只。顧。み。そ。ぐ。立。さ。
 巴。さ。ま。ハ。俊。平。も。禁。め。さ。る。輪。栗。ぬ。身。の。暇。と。さ。店。九。郎。ハ。宿。所。を
 返。さ。る。年。極。中。院。ハ。主。従。二。人。西。を。投。て。立。出。る。い。ハ。へ。の。人。い。さ。と。あり。酒。ハ
 礼。ハ。始。り。さ。乱。ハ。終。り。人。ハ。五。常。を。心。ハ。見。く。五。常。を。全。く。さ。る。の。稀。ハ。君。臣。の
 恩。義。夫。婦。の。情。愛。交。遊。の。信。實。師。弟。の。授。受。好。憎。褒。貶。愛。惡。取
 捨。その。始。り。と。終。り。の。比。々。と。皆。是。る。悲。さ。迷。悟。相。遠。さ。善。惡
 比。鄰。を。さ。せ。り。扱。も。村。澤。俊。平。ハ。忠。義。純。粹。の。心。を。の。逆。旅。ハ。秋。布。ハ。仕。さ
 正。さ。る。二。と。存。ハ。及。べ。も。男。女。の。礼。儀。を。正。さ。る。夜。ハ。下。室。ハ。睡。る。さ。る。晝。も
 戲。言。を。の。く。慰。め。す。その。性。酒。を。嗜。む。醉。狂。の。失。る。その。身。健。さ。る。け。さ。ハ
 勉。く。艱。苦。を。辞。さ。る。と。あら。さ。今。の。世。ハ。いと。有。さ。き。老。實。堅。固。の。良。僕

供めさら立せらるるこれなる小安想ありとも情慾ぬ惑ふ不義の奴
 とるがこの両歳の艱難劬勞も忽地泡沫と消ぬべし。日と虫惡魔の身小
 憑めく狂まめわんざん曩小彼無名氏が口を相しく色慾を誠め
 するも所以あるる恐るる慎むべしと心ぞ心を敬言め。これより後情を禁め
 慾を征する工夫をせよと必ひつ又睡り多。間話休憩有然程小秋布
 主従のその曉の浪速を立ち。三四日と程小播磨と備前の封疆ある。
 大山巔の麓の来ぬけり。比の十二月の下浣樹抄の木葉落盡しく松柏の
 標を頭。山川の流水半涸る石背も渡小堪。山ハ雪の上小雪を積る。
 羊腸の路絶ゆる。里の萱の軒小萱を藏り。焼火の儲優々寒風肌膚を
 犯して遠碇の音も耳小留。群雁水田小氷を摧く。近郊の堤も目小
 廻り。一橋渡果と亦一橋あり。一程行盡しく又一程長。鄙曲いへる事あり。

春ハ旅夏の温泉小送る。秋ハ野遊ひ冬ハのり居旅中の艱苦いけれハ
 われど玄冬の寒けき朝陽光の短き時萬里の路とせんと壯夫もる月
 病る小兄嬋娟なる一婦女子の霜を載き。雪を犯しく心ほくのあぬ。なる。
 肥の州遠くも程小大山巔の麓路ゆる。秋布ハ舊病の猛小發アま堪ぬ
 なる小瘡小宵と苦めらる。瘡の難義小俊平ハ枯尾花を折布せてさる。よ
 勤る小あハ人家遙め。農夫旅客の過るも稀ある。山脚の曠楚るけれハ
 いとせん術るたののう。懐小くけける。丸葉を搔探り出しく。疾用ひんとく。且
 とも齒を切ア。受くべうもあらず。湯ををんぬもよりのる。は石滴るるとも
 搦ひのく来き。沃き入ると。彼此とえある。きついと清らるる流水を
 合手小搦ひ揚ま。僅小四五歩の間小水ハ漏盡く。我遍も亦勞しく
 功る。已正をぬむ。搦ひ。水をそ。依小口小含。舊の所小歸来り。病

臥し果敢々々一人あちる死が如き秋布を拵き起しと申す。中々く小
 丸菜と口づらつ件の水と口中の糧入る小葉へ水とゆる共小受納をねと
 ぬども。痞のいも。治らず。抱る。俸のほしく。その顔むをうち目成。西
 施が心を病ると死大真が渴を患る面影もかありけんと必ひの稍見蕩る
 まぐ心地まうの宵うちささぎ。曩小みづか。誠め。忠信孝義の五常の
 のえ。かる首尾又あべやと。多病惱る人をいふせん手足の大きく冷
 ぬる。温めとあむ存と。ひとごちも。多懐小さ。入。足の
 草鞋を脱捨さう。多太股の間の措る温る。との久。死と某の功より
 うけ。秋布の詰ら。と。痞の僅小治。多。小か。身邊を。生平のあ。俊平が。い。非礼。人抱。何事。驚。怒。衝放。俊平。抱。手。固。此。緩。人。詰。

氣色ぬ。喃後室。二。以来。忠と義の外。胸の物。俊平が
 か。迷の不便。嚮の長き病著を看と。冊。朝
 たる親。仕。その折。不覚。初。下。水。濁江の深き
 迷ひを。遍。これ。誠。磨。曇。玉銚の道。ぬ色
 情。宵。焦。つ。依。る。今
 必。肌と膚。合。鏡の二面。口。程。水。妹背の盃。頼
 二世の姝。三世の縁。主の後室。既。君。不義と知。今
 さ。の。き。丸。夫の執念。夜。只。一夜。の情。かけ。や
 喃々。死口説。艶語。呆。秋布。腹立。声。り。立。俊平
 む。和殿。悪魔の魅。入。決。年来。浮。良卒。義僕と
 衆人。誓。身。恥。せ。稱。ぬ。と。知。日。を。捕。不義



あけのぼり
 晴日のけしき
 なまよりの
 けり人の
 そらのたまの
 こころの
 誓

非道なる望小返を言葉集めぬ。放さむやと敦圍く揮り敲り嚼
 著く腕放ちて一反をり走退ども人家遠き山脚の野邊小夕たえそ。
 来る人もる死霜枯の虫るるく吻く息と裏く胸の地車の長橋渡る
 心地しく怖氣竦え朽をく四下見らる有繫ハ女子悍く刃をくも月小
 脆き涙ぞいと進みける俊平の飽まぐ辱められも物とせせず身邊
 近く立ちよまき喃後室さま今いかに邪正の差別ハ素よると兼知ぐま
 心一恋慕よや不忠といふるも非義横道といふるも濡ぬ先こそ
 露をも厭へ今さら否と宣ふとも志を改めく舊の素地ぬるまゝ旅を
 同行世の好意さくもかゝるも過世より結び縁と諦めく靡きぬ人と
 手と取るを秋布ハ吐嗟とをくり振放ちる声戦しくや俊平世の常言
 ぬ非道の前の道理ありといふとわが義理を並くいひ懲をぬぬぬぬの

心を鎮めし世後ろ。迷ひぬせよあるを憎いとくいのめあらず女子の身を
 り親良人の仇を撃んとかくを旅路の艱苦も厭ぬ日ふが節操を
 捨て阿容々と和殿の望小返まゝや宿望空一かむと七仇人加二郎を討
 捕らふ余後のともかゝる。随ゆるる日もあらん時を俟ぬ何事の成就
 去る死ののぞとよあの道理を汲み死す。迷ひを零し去り。去歳の春
 鎌倉を出ぬ日より旦暮頼む和殿のこころ心変りまゝ王従が
 今さら陝布の目布の胸合さくるんぬ供ゆも立下俱し別して
 枝撓むこの身ひとぞ恙なく。何処も行くべ死然とそ速く和殿の
 ありぬ従ひ死譯ハ目今いさぐ如し。こころを貞女といふも和殿が義
 士の名を賜るも今の迷ひを又舊の忠義小返をのぞく。俊平死と理と
 推し。いさぐらゆる怜悧さありの風情を柳のいと哀ま俊平

ことばをばむむ。うち笑ひる近つ死す。理りめうと宣へども三歳児のあまむ。
 たる虚言の欺るのめなる。よくあそぶもいふやう。色へ思案の外とりのふ。
 三年三月の後と契りて心長閑く俟のあえんや此方向東と引はけく。
 携るを透さず振放り手弱けども烈婦の魂この野の露と滅るとも。
 汚されどとく懐る命婦丸の短刀を手にやく晃りと引技く胸前逼て衝
 懸る俊平あちこち身と反らして腕捕る冷笑ひ情死ぬ尚早うふ。
 戲とよると操居く刃と奪ひ取らんとせりと秋布の奪と下とを柄の
 左右の手を掛け挑み争ふ一生懸命その身と壓み踏々と輓びかきバ
 刀尖狂々乳の下とと刺貫き灸所の深ふふ要時もあらず苦と
 叫く仆俯も俊平と驚きくおのくつふとむらり寄まきまき秋布の
 頭と擡疾視る怨り死る村澤俊平汝が心の迷ひふよや兩歳以乘千辛
 万苦の旅宿も竟ぬ仇とらり親良人の讐敵も得撃ず非命ぬ死
 まる朽惜とよかうきるべと知るきくや肥前ぬ赴きく浦二郎ゆを訪
 ずりのを外ぬ資のる死のまらぐ。今ハ神ゆも佛ゆも棄られ身そ悲し
 けは南無阿弥陀佛と唱へる言葉の中ぬ腎の色も變り息絶る。こめ
 至りて俊平ハ忙然と手と又き頭を低くわたりが玉碎けて磐石の堅さを
 恨む花落りて夜嵐の烈きを憎む人の命の果敢るうふ菩提の心かう
 屋く萌しく迷ひの雲霧霽り於忽地宿酒の醒るごとく頓り漸愧後
 悔りて浩嘆か方も有りて扱わるべ死ぬあうまバ亡骸ぬらち對ひく後
 室様々々々某とぞ憎も憎も飽るかむせらめ怒とらひひちるら。
 あまうぬ大く角ひぬひ刀尖の狂ひより深瘡ぬ命を隕さま一は是
 某が手とめと害一奉りぬ異るふかかむま五逆十惡の罪を犯せし

某も身と半裂かせしとも人見く足まるとも死ぬぬなど切くもの
 罪滅し小時を程さむ腹免切く死天の旅路も従ひまらん死ぬる命を
 惜うらで主の仇も加二郎を得撃さるこそ遺憾けし加旗舊里ぬ一箇の
 姉の在るが幼稚きと死別しつらうその存亡も知るふあり。めんが
 善悪賢不肖いづれあれど人慾の禁めか死魚の餌の釣あるをぞ知
 つの餌を貪るの相似し迷ふ小人悟る賢者懺悔も今の甲斐ぞ死
 愚さる身を恨るの。曩も彼無名氏の相せしこの不幸ぬ。當りし由
 是過世ぬく作り業報るんもいざや自刑を行んと。諸肌脱く刀を
 抜取し刃の袖を巻添く。南無となす刀尖を吐へると突立るとも頻て
 腹痛しく愕然と驚き覚け。是暁方の夢ぬ。身ふや難波
 村あり。夜半臥しる依りて行燈の油竭く滅んと幽る。原来

夢ぬくありける。とどむも宵の裏き。腋下よ背を冷やうある
 汗の流し。寝衣の裏を浸し。心を鎮め。獨はくと
 病著とい痛おく。枕邊侍り。折々尚う。死限ぬ。容止も美
 久し旅宿も。病著ふ。臥し。心苦。死限。瘡らせぬ
 かと。只何と。憐む心。頻て。常ゆも。見つる。後室。その。容止の
 美し。死を。惜む。折ら。甲夜。輪栗。渡々。戯け。問む。語り。せし
 聞捨く。臥房。入り。寝ら。依り。借あり。長き。旅宿。男女。の主従。貞
 標。忠義。造り。膽魂。人知。大。輪栗。が。如く。疑ふ。の。ヨ
 か。か。瓜田。の。屢。李。下。の。冠。疑。似。あ。る。も。亦。主。従。の。不。幸。

二十
 疑似あるも亦主従の不幸は

こそ果敢る死のついでにひつげと寝るともあま目睡る夢といふと世の
 わるち死主の逼るる積命を預さるるらせし心汚穢一秋告ね
 人のあまむとふともいふて心恥る死をゆるるる身の暇をいひ辞
 去る潔くせまやけとも今ふそのつらむる宿志を遂さるる
 折この曉の悪夢を告ぐ懺悔し法師あるんは外れと
 肚の向ひ腹の答ぐ深念の臍を固め是より後の初め優そ謹慎を
 宗とんよ秋布の仕へり却説又その年の暮る春も花月の初瀬の
 假染るる浪速津ふと春を迎へ鎌倉を出より既の三稜の
 うがくへ又何の目小仇人加二郎環あつ宿志を遂んと秋布が只管の
 焦燥る病むぐる苦をまを俊平も慰めらるる瘡癩の心を盡
 せぬ如く此々の処の名醫ありと俊平は人を走らして件を醫師を

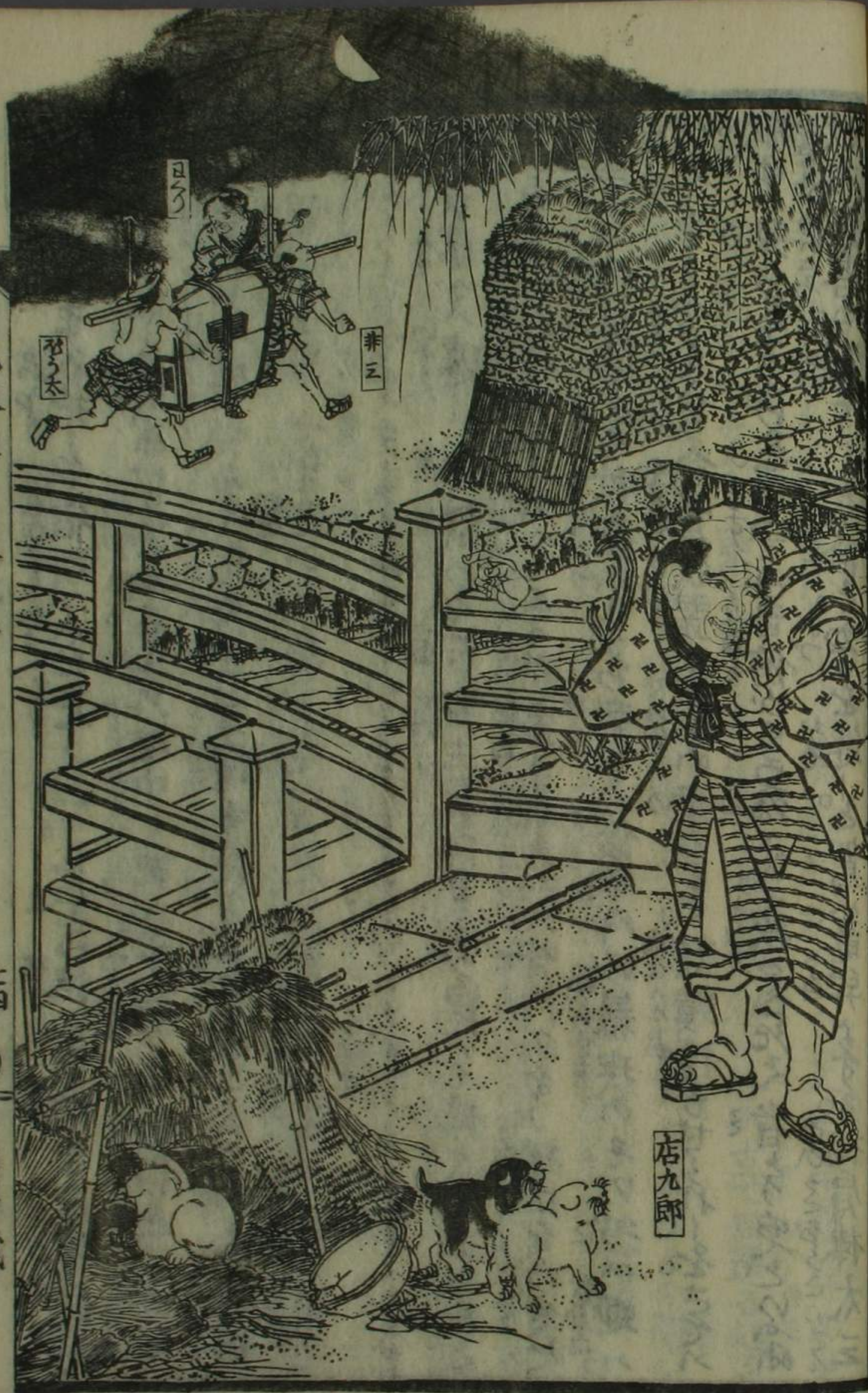
招きろ。當下醫師の秋布が腹を診ひ退き俊平の長く婦人の
 病病へ難治の症えあれども一方あり用ひ必愈ん只一個の葉劑を
 缺の葉劑の病家のあつと旅泊の事る携るあや不口を
 知らずといふ俊平膝を進りそのつらむる物やとせし向ふ醫師答へて
 治るる物ゆひの病人の臍帯この一種を加味せると死も餘葉も
 共功驗あり推乃る幸ひあるといふ俊平歡び走り病牀に
 到り秋布の如此々と醫師のいふと報る秋布も亦歡び現
 じつが臍帯へ今枕の邊をたぬ護身囊の中あり用ひらるる
 出るといふ俊平遠く舊の二室の退きまき醫師又云云といふ
 醫師の顔き然る病病へ愈るべし某今湯劑一貼を調合せんこの
 一貼の清浄水三碗をのり半碗の煎用へし初め先武火をのり中

よりの文火をのせよ。下晡より黄昏に至ると死の煎法當分分量の如く
 煎得る半分多ると死彼脐帶をも煎火をべし。文火を
 用ふ之日の將小暮んとせると死この藥を用ふ七日月めく平愈せん等
 閑ぬるまのひそといひつゝ一貼を調劑して醫師のせやく辭去りぬ有知之而
 俊平ハその日申の左側より件の藥劑を煎火を少選も他多め任す煎火
 半分ぬらんとせしと死病林の趣きく秋布ぬかくと告れが秋布ハ臥るがら
 護身囊を搔合も俊平ハ處与せし俊平ハ此をぬく又土爐のちと
 下ぬ退き護身囊と披き見る内ぬ種々の神付わり又吉次と秋
 布ハ二親の戒名を記し楮位牌あり。そが間紙ぬ包るののりて
 秋布ハ誕生の歲月日時を書つはるは是るべし。ち角く果と裡面ぬ
 脐帶ありけし即便こを茶鍋ぬ根へ入し。神符と位牌と脐帶の裏

紙ハ舊の如く囊ぬ納り柱の釘ぬ掛置きの要時土爐のほそりを
 去らぐ分量を試る果し黄昏時ぬ造り半碗ぬり。處し
 茶碗ぬ根し病林ぬのてぬ秋布ぬ薦めけり。姑く俊平ハ護身
 囊を返さんと。掛る柱の邊をる件の囊のち。こを誂て
 輪栗と呼こを問ふ輪栗ハ素より知らせし果ハ手癖のよらぬ
 のぬ。動まはつ錢の耗る夏もある。疑く正し。油
 この丸を苛刻ハ責も問ま黄昏時の心し。零時とも柱ぬ子ハ油
 断大敵悔及がす。さのさ行心しけりと額と病し云云と秋布ぬ鞍ぬれ
 秋布頻ハ嘆息し。護身囊ハ惜む足らぬ内ぬ貴き神符あり。親
 良人の位牌あり。を失ひぬハ信心の疎ある似し。然りと急
 ぐはく。さる穿鑿し。とぬ俊平ハ緊く涉獵らず。秋布ハ

次の日よ。病著日々平き。食もたま。夜もよく。睡り。僅か七日より。みり。
 心地清。ちか。ちか。俊平。あ。あ。歡び。醫師。厚く。酬を。あ。あ。あ。
 い。夜。護身。囊の。失。る。の。快。う。あ。あ。折々。ひ。ひ。出。く。輪
 栗。波。々。向。質。を。輪。栗。の。一。箇。や。二。箇。私。に。何。め。せ。ん。疑。は。し。く。
 る。傍。ま。も。綾。錦。を。護。身。囊。の。一。箇。や。二。箇。私。に。何。め。せ。ん。疑。は。し。く。
 勤。も。要。る。身。の。暇。を。あ。ひ。ね。と。あ。も。外。聞。こ。ろ。け。は。い。あ。ま。と。あ。程。あ。
 その。次。の。日。輪。栗。波。々。俊。平。あ。ち。對。ひ。く。こ。の。娘。が。昨。夕。猛。小。産。し。と。被。家。
 一。死。後。室。さ。る。の。病。著。も。大。く。あ。る。瘡。を。あ。へ。且。く。身。の。暇。を。あ。せ。娘。
 不。肥。立。侍。り。あ。復。こ。も。参。ら。ぬ。と。い。ひ。あ。る。俊。平。こ。の。婆。々。と。好。人。物。と。あ。あ。
 どの。た。婦。人。の。長。き。病。著。と。う。ち。あ。ひ。あ。る。あ。看。と。え。こ。の。影。護。き。う。も。あ。あ。
 久。く。留。り。置。い。れ。ど。も。既。病。著。瘡。を。あ。へ。西。國。行。の。近。き。あ。あ。然。る。波。々。あ。あ。

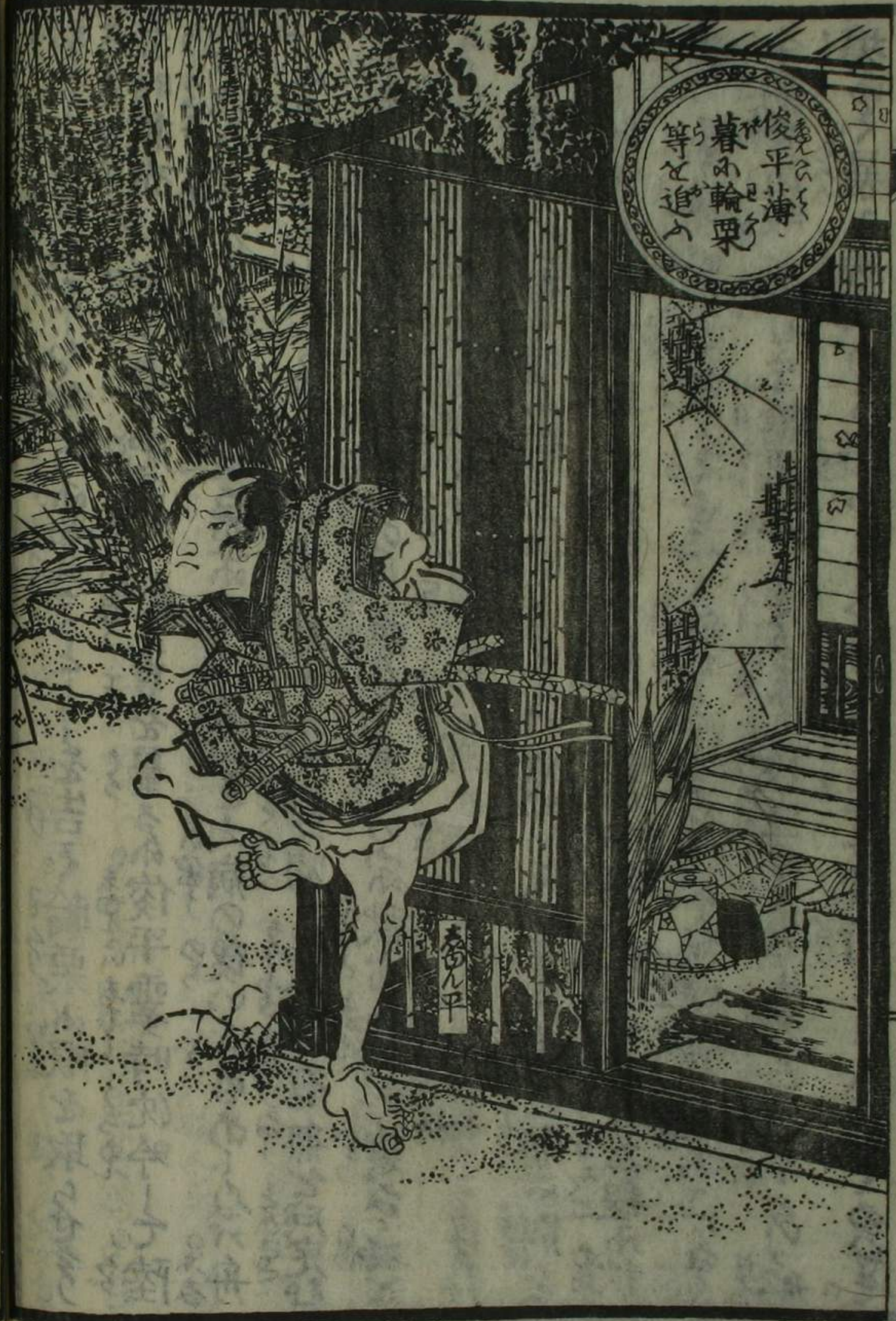
要る。と。尋。思。を。秋。布。如。此。々。と。う。を。告。ぐ。輪。栗。小。暇。を。取。ら。せ。り。
 登。時。秋。布。一。日。も。あ。く。肥。の。洲。へ。赴。ん。夏。を。量。る。俊。平。要。時。沈。吟。し。て。陸。
 地。へ。仇。人。の。所。在。を。撈。る。便。宜。さ。る。あ。あ。と。大。病。の。後。い。く。日。も。あ。あ。舟。
 行。ぬ。ま。ま。の。あ。あ。あ。某。船。場。へ。赴。き。西。國。へ。歸。る。船。船。の。有。無。を。同。定。む。
 べ。その。船。必。あ。べ。は。旅。路。の。用。意。を。一。夜。と。い。ふ。秋。布。歡。び。く。遺。る。物。を。
 鳩。め。仇。討。免。許。の。御。教。書。の。裏。小。行。囊。の。藏。め。れ。ど。盗。難。揣。し。け。れ。
 と。是。回。秋。布。項。小。掛。る。便。り。と。俊。平。先。家。主。の。店。九。郎。小。別。を。
 告。ぐ。就。賃。を。遺。る。取。り。行。装。を。整。え。西。の。船。場。へ。赴。き。有。然。程。小。秋。
 布。も。旅。路。の。身。装。と。を。俊。平。が。還。る。を。俟。め。その。曠。昏。小。ひ。ひ。ひ。
 今。朝。身。の。暇。を。取。せ。る。輪。栗。波。々。走。り。後。室。さ。る。夏。を。侍。し。俊。平。あ。あ。船。
 場。ゆ。暴。小。病。病。小。詰。ら。い。と。危。く。見。え。折。り。過。り。あ。あ。



石動金徳集卷之三

九四

石動金徳集卷之三



石動金徳集卷之三

石動金徳集卷之三

うちも措まふ抱く宿所へ人を走らして。こゝの棒太を招きませ。駕籠を
 送りかきまよと。多ふけしど如右と。途中で死んと人喰なり。然けしる俊平
 との今る心地の慥め。死身の一言遺を死にそのゆゑといふる。よる棒
 太の駕籠を吊して。おん迎ひのまゝ死に。いざ夜といそせ。秋布大く驚き患て
 その心のこる死る。先家主のこれらのよを告ぐ。笛守をも憑めと。立やまると
 輪栗婆々ハ遠く推禁め。否家主とのへこらふゆゑに。棒太もまぢねと
 いひまら。裳を寒げくおんと。折家主店九郎ハ背門の。縁由を洩せて
 咳き。借屋の秋布ホも。ち對ひ。俊平の暴疾のその縛の趣ハ
 彼処へ。よくせえ。今宵欲翌ハ出船に乗ると。諸贖債もせられ。をこそハ
 船の乗ら。且。笛守ハ吾体か。ろる。疾々死。者とう。と。いふ
 秋布。心。の。い。捨。る。を。遅。と。駕籠昇。する。相肩棒太云

里の非三乗。程ら。その。伏。出。せ。輪栗婆々も。足中草履穿。あま
 齊一駕籠の附。東と望。走。店九郎ハ外。立。目送。程ハ
 日ハ暮。戸を引。閑人と。ま。程ハ俊平。か。あ。や。と。り。小膽を
 潰。裡面ハ。左見。右見。おん身ハ。嚮。船場。暴。病。病の
 發。と。輪栗婆々。駕籠。用。後室。將。ゆ。死。と。告。る。を。俊
 平。あ。む。その。訝。死。と。お。吾。們。ハ。病。病。の。發。と。且。立。え。る。中。途。で
 輪栗。あ。ぬ。の。い。怪。遠。く。と。追。ま。る。を。店九郎ハ。呼。笛。め。死
 身ハ。西。の。船。場。も。歸。來。つ。る。知。ね。る。駕籠。東。へ。走。り。ぬ。伏。見。の。船。場。を。ま
 や。と。心。は。く。る。を。い。ぬ。り。て。の。ろ。ろ。と。夕。間。暮。東。を。望。と。追。ま。ゆ。畢。音。俊。平。が
 輪栗。ホ。と。追。蒐。と。又。甚。麼。る。話。説。く。ある。そ。の。次。の。卷。ハ。解。分。る。を。聽。ね。か。

松浦佐用媛石魂録後集卷之三終

松浦佐用媛石魂録後集卷之三

錦栗木より直横より又甚秘の暗指の... 其の巻の輪合の... 錦栗木より直横より又甚秘の暗指の... 其の巻の輪合の... 錦栗木より直横より又甚秘の暗指の... 其の巻の輪合の...

松浦佐用媛石魂録後集卷之四

東都 曲亭主人編次

第十七回 再厄僅に釋く舊僕に遇ふ

輪栗婆が獨見る相肩棒太と呼き酒を會り賭突と嗜く奸智又長る悪棍るる母の輪栗も頑買を六竊疾とあるものる親子折々謀合... 輪栗婆が獨見る相肩棒太と呼き酒を會り賭突と嗜く奸智又長る悪棍るる母の輪栗も頑買を六竊疾とあるものる親子折々謀合...

鬼録後集卷之三

曲亭主人編次

正のさうらぶを。折少の母の箇様々々ふりせん。送の證據のる死を。彼亦の
 他郷ののさま。以勝を。とあべ。斯十二分。謀るといふ。灰ま。彼主役の
 明明後日の比西國へ赴くと。いふ。遅々。其。唇を。啞と。先。母を。呼。び。て。
 商量せんと。肚裏。計較。既定。け。己。計の。轎。夫。三。里。の。非。三。と。い。ふ。
 悪校の機密を告ぐ使と。素より。妻子。い。る。り。を。産。一。の。と。い。ひ。あ。り。久。く。猛。不。
 輪栗。暇。を。請。一。と。還。と。恥。く。が。密。謀。と。云。云。と。説。示。を。慾。の。為。小。身。を。も。
 忘る。會。林。女。を。斬。の。悪。波。を。頭。を。傾。け。耳。と。う。く。既。は。半。响。を。り。斑。を。
 齒。を。顯。く。と。ど。び。高。く。う。ち。笑。ふ。と。嘻。漫。へ。音。高。一。と。棒。太。心。つ。け。ら。ま。く。鉗。も。
 ち。ぬ。口。小。を。蓋。み。押。へ。四。下。と。と。ろ。の。近。屬。夢。寐。の。う。ろ。り。も。け。る。財。儲。の。商。量。を。
 皆。く。前。表。と。今。知。り。ぬ。こ。見。を。答。る。ま。あ。ら。ね。ど。も。和。郎。が。這。回。の。計。較。の。後。の。後。
 ま。脱。落。る。謀。り。ゆ。く。究。め。妙。に。縦。彼。俊。平。奴。が。強。情。張。り。争。ふ。と。角。

只。假。托。結。果。と。當。分。影。を。隠。さ。ん。の。ミ。介。ら。左。せ。よ。右。せ。ん。と。密。談。小。時。次。
 殺。一。の。日。未。の。左。側。より。棒。太。の。難。波。村。小。赴。く。竊。小。秋。布。主。後。が。形。勢。を。
 張。を。既。小。考。く。晡。時。より。俊。平。の。行。装。一。と。西。の。船。場。へ。今。の。十三。間。川。の。赴。く。と。定。
 小。見。認。り。け。れ。恥。と。宿。所。小。ま。り。の。令。と。云。云。と。輪。栗。小。報。く。計。策。と。行。せ。
 俊。平。の。船。場。へ。具。小。疾。い。幾。り。ぬ。と。秋。布。を。欺。て。准。備。の。加。馬。小。龍。ふ。ら。ち。乗。
 一。は。棒。太。と。非。三。の。昇。り。を。一。と。東。の。船。場。へ。今。の。八。軒。家。の。お。く。あ。り。の。夜。舟。小。乗。り。
 伏。見。の。花。街。秋。京。師。の。妓。院。へ。售。ら。ん。と。秋。布。の。年。尚。こ。ろ。死。女。流。る。れ。ど。二。輪。
 以。来。逆。旅。の。艱。苦。を。喫。せ。よ。り。入。情。を。よく。解。一。と。俗。吏。小。馴。る。才。あ。る。と。も。
 この。時。既。小。免。れ。く。死。禍。鬼。ま。あ。り。祥。あ。り。けん。俊。平。が。病。痾。危。一。と。告。ら。れ。る。小。
 駿。遠。く。輪。栗。と。此。も。疑。の。む。且。曠。昏。の。工。を。よ。轎。子。小。ま。り。乗。せ。ら。れ。く。お。て。の。
 西。と。東。の。方。は。お。て。の。路。と。遠。一。と。ひ。け。り。有。然。程。小。俊。平。と。

輪粟波安ら謀られる秋布と逐留んとく又一足も萬歩とく東の船場を
 ちろ當小日比信なる神明佛陀の御名を念し祈願を掛て路の凸凹嫌ひぬく
 接し接ふりて今田嶋宮崎の両町のありたる田圃の何とら小至ると死折
 らる隈る夕月光の白晝の如く明りける前庭遙に見つて一挺の十字駕
 籠は一箇の老波女とおぼれり附後中へ霞道を東へ只管まゐる彼るべし
 と心心の飛立ちたる早きども前途の一徑路る後より逼る追失ん彼
 より先へ邁抜く捕留んと尋思をく路る死田の畔とち遠りくゆく頻りにそ
 ぢらとすまきする捷徑まく集よりのち一町をり霞の東より遠り出たり吐湯
 息きれく堪へずもあつりく喘々路傍る樹柵の蔭に埋伏し近つて来
 たる件の駕籠と遣りも過さず跳出て棒端取す推戻し怒る声残ゆを
 ちくはせりく小膽太くとも泰平の世に主の婦人を勾引さんと欲まほの首の

と飛ぶをも忘れる寔は鳥侍の白後より昇久きまゝと敷圍る力に究めく突
 戻せ棒太と非三の此も騷ぐ遺損ひ一肩休めと吐たるるそが終り路
 傍よりち却ち駕籠の内なる秋布の俊平が罵る声小原来たる身も輪粟
 等小謀られけりと初く時をくうち驚きぬんとまほは豫々準備をせりと
 驚く駕籠を垂るる筈は外より絨をぬれぬやと喃を掛けぬと叫ぶを
 笑ふ非三棒太の各々息杖突きて駕籠の左右小立たりける登時輪粟の進
 る出俊平よりち對しての瀬川の若黨との世にさるものぞく今ゆく思ふ
 休のるあつ五口併に正しく主をばらるる縁故もゆゑと七勾引者の騙児のとき
 きて了るの宣ふ知らぬのくせせん耳の垢を小指の爪で搔出しく管絃か
 あの秋布の吾侪の女児棒太が為の妹とさるる何の故とも思ひて疑れん
 と言長くともゆゑの吾侪の良人か武藏る金澤に在り比あ秋布を産りかど

世渡る楫が廻らば子共二人の字をかり。吾侪ハ然る方さ西の乳母は出んと
 思ふ折執權さるの御内人博多弥四郎ぬいの内室が石切山あく女の子を産ぬ
 當分乳房ももむと媒妁も人あるより。女見を里親は赤子なまごど生れ
 ぬへまありし根が山中より産の氣はたて分婢さき赤子なまごど生れ
 總小三日の暈昏睡死は息絶へり。當下ある下弥四郎ぬい竊に吾侪子宣
 中。この夫婦の年来子のまやうとち敷たて神祈で佛念ふ。やうな
 産せし女見あるふ七夜あめ及びまきかき空くまをうらまはし。知せる忍
 地は血暈升りて共は黄白水の客あやるとん。鴉見のめい惜めども甲斐
 この哀れ小又一層の敷たてを添ふことあふ。不幸のうの不幸ありま。よりて汝
 と密談を里親許遣へる。汝が女見を且く貸せ。今宵竊に入替て。妻あ
 云々と女見の死せしむをまきかき。かく産婦の肥立床後い又せん。術のいくらも

わらん枉この説を美引く。苦しめられを貸けり。泣ぬらるる。憑せぬ。否
 とのんひまごめく良人の告る暇るけま。その宵竊に里親より吾侪が女見を
 入り復し。入替子小貸し。これ吾侪の乳母はま。一とせあまの
 過せども貸る女見を返す。縁に己をのせ良人の告く折々ある。下弥四郎
 ぬい竊に催促するのり。左の右のと難波を並べ。事ある。精の
 彈まは。豫くの密説。奥さる。告んとひひは行通る。やの。趣理の
 ねまごも。今いら女見を返へ。事ある。程も面る。且外聞も。あり。うら
 親とる。子とある。あま假寐の縁らんや。過せより結びる。宿因とて
 貸る。枉く女見をうら。おま。その代り。少分。二百金。を酬とせん。け
 引て。と。拜まぬ。を。うら。口説ま。推辞より。く。遂小の意。を。任せ。比金
 二十兩。贈られ。く。約束の。附金。を。この。餘。は。小調達。せん。妻時。候

石段金持集卷之四

四

第廿九

祇。と申す氣を。吾侪を言ひ欺る。余後事不假托。吾侪は暇を取らる。
 吾侪がとて件の密事の漏れをせんとせしめん。初め似ぬ。下の殿の計ひ
 とい憎けども。世の主後。理非共。勢以異なる。められ。切。残金百八十兩。残
 遞与。と債。と今。と急。調ひ。實を。今。
 其春。ま。名印。一通。證文。遞与。違ひ。心
 放。金澤。比。良人の其。住。野。浪速。津。赴。
 と。俄頃。の。起行。今。要。時。候。今。茲。の。其。春。博。博。殿。より。百。八十。金。遞
 与。と。ある。證文。の。ある。地。を。去。ら。便。る。所。へ。枉。春。ま。田。と。
 諫。め。も。田。ら。ぬ。良。人。の。無。慾。の。上。人。物。會。け。も。錢。財。の。絶。え。た。性
 質。に。終。る。實。を。極。む。と。遞。与。せ。殿。不。實。ま。甘。春。ま。候。と。その。詮
 せ。ら。り。又。實。ある。人。る。浪。速。へ。程。り。住。り。と。件。の。金。を。贈。ら。ん。と。

立。て。吉。日。され。浪。速。へ。と。幼。稚。に。棒。太。を。携。り。舟。行。より。この
 撰。津。國。へ。赴。く。良。人。と。引。別。を。當。は。べ。も。あ。れ。吾。侪。も。俱。浪。枕。海
 上。を。夏。ふ。と。この。地。の。人。と。り。博。博。と。の。件。の。金。を。春。ふ。り。と。
 ら。腹。を。入。り。入。り。催。促。せ。も。山。河。千。里。を。隔。て。を。あ。ら。不。任
 せ。程。の。良。人。の。五。十。の。秋。を。一。期。の。返。り。旅。小。赴。り。年。尚
 多。獨。見。の。棒。太。大。十。字。駕。籠。昇。り。細。煙。を。あ。る。も。忘。れ。の。件。の
 金。を。棒。太。を。鎌。倉。遣。と。物。せ。ん。と。せ。る。目。の。ま。け。れ。も。七。盤。纏。ま。り
 整。然。と。止。せ。博。博。と。の。一。昨。歳。の。春。あ。ら。ん。世。を。ま。り。
 ぬ。又。女。見。秋。布。の。瀬。川。采。女。吉。次。と。の。脚。内。人。の。奥。さ。る。あ。る。れ。も
 瀬。川。の。身。ま。り。の。程。も。若。黨。某。甲。と。の。情。由
 あり。透。電。と。風。の。便。り。と。あ。ら。不。隱。れ。と。と。神。を。及。身。の

ト支中與らば後室の誕生を定ふんるの形と縁とも石切山少く生れぬひ。
 その縁の趣へ人傳ふとく知むを。ありふ汝悪波の後俺們男女の主後か久しく
 この地小橋居を考ふるまよりく淫奔の日其陰人と名ひけん。あをりくさぬぐる悪
 心を起す折いぬるろつろつ諺く。庵福の柱小楓忘れ。後室さあ護身囊を
 いらさく竊取く。囊の裡面る戒名実名且誕辰の歳月を。をらさく知アそく
 邪智奸計を逞くせ。虚妄の長談人の耳目を欺くとも。これを決く實言
 とせむ。博多殿より賜ア。い実あふ出しく。アせよ。自迹と名印は相違る。い
 二百金足らざるも盤纏を取らまは。工もあらん。素より。は。証文のあるも
 何らさすべ。ありといふとも胡論へ。つ。主後を他御のれ。と。ひ。蔑る。光棍共州の
 守の廳へ牽ふ。彼も此も推並く。刃の縮とるを奴る。ま。身も大望を抱る
 主後。の。細事は。構つ。ひ。時日を費す。と。を。好ま。と。後室。れ。は。遞。と。

しく空轆打ぐと退け命の助けぬせんむ。といひ。果。輪栗波女。い。を。
 つたつけ。突著く。声のめ。是。在。若。黨。の。落。著。白。る。博。多。の。女。児。の。生。き。て。哉。
 眼前。ま。る。和。主。で。も。入。替。子。の。緯。の。秘。密。山。と。和。主。が。知。ん。該。は。る。一。人。の。あ。ら。は。ぬ。
 秘事を。諺。と。ま。は。な。く。入。る。あ。ら。ぬ。の。皆。虚。詐。欺。論。より。証。据。証。文。を。何。
 如。ま。ぐ。も。め。て。出。く。つ。子。を。子。を。せ。ご。らん。や。刃。の。縮。ま。せ。ら。は。べ。身。の。科。犯。せ。い。
 覚。は。る。死。は。和。主。の。命。を。助。ら。る。施。し。ふ。あ。好。も。る。一。戲。言。吐。る。と。四。馬。と。の。後。
 平。些。の。騷。が。ど。く。御。向。も。志。を。く。い。ら。さ。ら。証。文。の。形。の。あ。る。と。く。と。く。出。し。て。
 足。せ。よ。と。の。輪。栗。の。目。を。剥。く。あ。ら。と。う。その。術。の。啖。ぬ。引。破。る。紙。一。枚。虚。を。
 と。和。主。を。さ。さ。く。引。裂。れ。く。悔。ん。と。く。と。く。實。の。表。の。百。八。十。兩。十。八。九。年。の。
 利。足。を。加。え。く。四。五。百。兩。も。あ。る。べ。を。二。百。兩。あ。る。肩。も。せ。ん。捨。服。紗。よ。む。ろ。と。り。と。
 要。小。著。へ。る。盤。纏。を。終。遞。と。く。女。を。受。取。る。と。の。女。を。遞。と。く。と。盤。纏。を。

ぞ伏持くぬともぬらよ一とく埒と明むとつめけ棒太由進み出くあや
 生白け若黨との昔のむら今今あ秋布己が妹推黙て聴聞をれ
 敵も老女と侮くつらぬをころり自よむくくむるまどををてあ暇
 りいふんあへ何処への持出くのを以棒組遣と息杖を突鳴り
 先棒へ立をええは二里の非三扱るがめく今宵夜一夜子あても蛙の面へ水
 かけ論蛇とも長くなり短くさう候草臥睡氣馮一が尚甲夜秋誘を
 ぐと後棒へ肩推入れ共侶は擡出を遣らとと駐る俊平挂る輪栗
 携るど丁と突を谷利を歐せ利の秘術小輪栗と叫苦と仰反て美取
 蔭小仆せけり素破狼藉の親の仇逃しとせどと駕篋うち卸を棒
 太へ息杖うち振く敷んと進め俊平も刀を抜く受流し受流しなる
 再度の厄難透を規よ二里の非三俊平が背後より頭を臨で敷ら息杖の

閃く程身沈ま左へ避け勢以餘り棒太が肩を礮と打ら同士敷
 まると罵る前後隙るた奮敷突戦駕篋の裡面る秋布も絆急る
 きの氣を回て懐もきり短刀見りと引抜く堅く絨る窓戸残斫放
 斫放出を見久は相肩棒太や好化貨をまらまると叫ぶ胸声耳あや
 入りけん輪栗の忽地身起しと秋布を捕んと寄るを依せと見り
 懐刀を物ともせむ彼方へ潜り是方へ避くあちこち要時疲勞たる透
 間小刀をち落しと探倒しと動も吐嗟と叫ぶ脣吻へ拭衝まは
 布囊襟上抓で引立ち小脇締著引掲る東を投く走りゆく老
 波子似げな力量割技遣らとと俊平の敵は柱れれ
 せん縛る折ら稲蓋最蔭小立躰まら絆の邪正を窺けん一箇の行
 容衝とゆり輪栗波子肩尖をまらと抗る推戻せむ妨をれと

石云金後集卷之四

十第車非

秋布と地上と控と振捨くも拭き巻篋る。餘切の魚刀を懐より抜出
 し閃々うち揮き胸前臨み突懸るを此も怯まぬ彼方の行客刀を
 抜く西三合敷もと見え一が輪栗婆々へ身を天さる筋斗でく首うち
 背後小撲地と飛び軀を前小休せけりこの光景は非三棒太のつら
 とぞ思ひけん逃んとまほを後平があひせ掛るの煉の大刀風背肩尖嫌
 ひるく深き弱る両箇の光棍息杖捐く輾轉に我登一懸て一十々
 滅の刀尖刺徹一筆苗き重き時息を吻む血刀鞘を拭ひ納めく彼
 行客よりち對ひ何処の人なき絲ども大厄難を救きこれ主後が大
 幸るの貴名を留まらけり歩もよほ程は秋布も衣帯もたは
 鬢の後毛搔揚く。あ悪棍も謀らまき危窮小逼り主後を拯せ
 めんと再生の高恩小てせはるされ名生りせむと共侶は左右つれを請

問ふをこえわつたる件の行客初々笠を脱捨く。喃後室さぬ後平との
 りふせ衰七と認忘れぬひく。驚く是方の主後と何し麻とるら
 且歎び且訝す。る月月光あつらく。四とせ以前小世を去ぬと思ひ
 若黨閑し衰七小紛ふ。もあふも秋布の感涙のそり。落るを袖小
 禁めく。喃し衰七和殿いつく。か使ふ。西園へ赴け。その冬も次の春も
 候小甲斐さる。日比歴く七里の濱。流きより。和殿小赤願して。つら
 所夫へとく贈りたる。彼一果衣さけるを不測小守の時宗。亦肉して。つら天を
 召久せとく。此ろ博多倍太ぬ。西園の陣中へ遣さ。と小後小灰小
 傳へ兼り。和殿の道中。あく仇る。人小敷。れけん。とあへい。痛く
 夜毎々々の看經。和殿の俗名戒名を念。と。菩提を吊ひ。心も
 るて今宵。環會。と死る。人の甦生。心地。を。秋。を。察。

多。といへば又俊平の絶く久しに暮七ぬ。鎌倉の主人の艱を詳に
 傳へてのひに秋博多殿さつて主人は非命に終らせぬ。此の故に某が
 百折千磨の艱難劬勞の既ふ三稔及べども。仇人は環りあつて心の
 憂苦を猜しくよ。とよは暮七目をあつた死にけんと。某がその
 うち物の屑もあらばも。さうさへ居りあり仇人の所在は撈せぬ
 たは。かん物くもせまう欲せど悪棍あせよ。二人も切害しく。虚しくこの
 地方を立去らば。莊客們の抑留せしむ。緯の難。我あやうとあらんか
 ぶ。今更そのつらう。閑談の室はあらむ。誘ふ他所を避く。送は意中を
 盡さ。といふ秋布も俊平も。あはべ。と應は。主従二人天満のか。ふ
 赴く。既ふ。十町あまの。及ぶ。と。尚甲夜ふ。河原は。深は。たは。一
 軒の酒樓ありけり。主従は。休れ。と。齊一矮樓。さう。登りて。酒を。師せ

飯を出させ。心も。不飲食。く。過去。と。相譚。ふ。暮七。声。我。潜。く。く。
 曩ふ某かん使を。弄り。く。西園。る。陣中。へ。赴く。道中。播磨。の。室。ま。ぐ。到。り。
 日西園へ渡海の船の。この。曉方。ふ。出。る。あり。登時。某。も。や。陸地。の。風。難。ず。
 と。い。ども。その。遠。死。と。弓。と。弦。の。風。ま。よ。の。舟。行。く。も。只。是。千里。一。時。之。便。船。せ。ん。
 と。尋。思。を。う。つ。その。曠。目。より。船。を。乗。り。上。り。同。船。の。旅。人。水。主。楫。採。木。の。陸。は。
 登り。く。一。人。も。ぞ。ら。む。より。其。只。一。人。咎。を。被。だ。く。甲。夜。より。寐。し。船。底。ふ。
 癖者。あり。熟。睡。せ。し。比。潛。び。よ。く。氷。を。白。刃。と。り。て。某。が。吭。の。あ。ら。を。刀。が。大。
 ぬ。く。刺。當。り。某。も。ま。は。敬。馬。死。覚。く。竊。ふ。を。り。て。刃。を。探。る。幸。す。り。く。氣。
 管。を。外。に。刃。の。く。を。外。に。向。ひ。より。み。づ。ら。反。切。て。身。を。起。し。彼。癖。者。を。
 海へ。火。と。斫。落。せ。し。某。も。亦。深。瘡。を。ま。づ。か。依。船。は。什。也。と。同。船。の。人。々。
 水。主。楫。採。木。漸。々。ふ。か。へ。り。來。り。某。も。ま。は。敬。馬。死。覺。り。片。息。を。り。と。室。津。を。

船長許資容の醫師を招きて金瘡を縫せ湯茶を与ふ勲有り。船との曉のまに繩を解れども某の長が宿所の病臥と日比を麻止り。件の長へ性としく情あるものりければと懇切に勸るもの。圖ら出でける厄難あく火急のち使を果を正治るる。且大切なる行囊を船中あく失ひを船長のちらむ。主もる行囊を某が物とらんとおひる預り措ぬ。かく某が金瘡の聊々瘡の比船長の彼行囊を某に返せり。とら某が物とらねば云と断り。折船ふこの果衣の外物とら。とら。いと疑ひ惑ひく。件の果衣を披死をせ。裡面の雨衣の物と一通の。實あり。その文言は此度於道中博多弥四郎が若黨関に衰七を斬害。秋布がその良人瀬川采女を贈遣を一包を奪取。證據としく携り。ら。賞錢いとふ依る。死の也。歲月日勘八との鼠川加二郎と書り。

あつそめく仇を知り返勘八が船中あく某を殺さん。時先行囊を。竊畧く北背負ひる。とら。終海へ沈め。行囊を失ひぬ。とら。送恨か。大切なる贈物。失れり。越度とら。形とら。この一通を微とし。守へ新なる。彼鼠川が好悪の顯さんと。疑ひる。とら。心なり。瘡養生を。程を。年の果敢る。盡て。旅宿を春を迎。愈んと。又破る。舊瘡を。苦められ。心なる。焦燥。病病の勝ん。の。室小在。程。肆月の比鎌倉。主家の。災害。灰。且驚死。且歎く。憂苦腸を。断可る。瘡を。全。瘡ら。船に乗。五月の比。鎌倉。か。何れ。仇討の。願ひ。村澤俊平一人を。起行。今。二十餘。日。と。止。れ。と。れ。迹を。追著。を。旅路の。供。

石云金後集卷之四

舟車集

と心なりの早きとも舊瘡頻りに再發し一歩も運一動もとゆるがぬ
より博多倍太郎の死宿所は遠道にてとて療治を加へる大約十月
の暮りよして終つ瘡快きなり有然程に死の迹も皆消えおせ既に鎌倉を
去んとせし時倍太郎の情ふくて盤纏二十金を賜てければ首途の前の日は
賣卜の翁に就て死身の往方と占せし陸奥のくを去るといれれと実とく
去歳の春より陸奥なる五十餘郡を経歴せしむる盤纏を費し今茲に
春より京師より上りてる舟に往方と去る程は某が宿とつて諸國を商
旅等の定宿とせし客店を三つ合宿の行客入代立謝り膝突合まる可
る所は宵へ徒然に堪ぬもあつて雑談怪譚をいひ人を慰めみづから慰め
與むるもの多る旅中より夜或人のとりけり肥前國彼杵郡る伊万里の
莊に鼠川加二郎といふ武士の浪人あり一眼の瞽で一足も少許痺りたりされ

武藝の達人とていふ甚るる故に世を厭み里人よとも交はれ然る武藝
捷し人を埋木ふあつていと惜むとて語りぬ某これを側ゆくと心も非虫立
たるをりしる月然らぬ面色しくその鼠川が人とるを具に詰問ければ其人は
否僕も件の人と相識するけしども舊の鎌倉武士あり今も妻子もあり
りり。伊萬里の浮浪人の仇敵加二郎に疑ひる。縦今も身ひとつ
あつても素直に討捕せしと云ふがらあつても二年以来旅宿し仇人を
索めんとせし。死後主従は告むてこれの一人の死は速し死後往方と
せぬと且暮る。あつて神佛に祈りし。昨夜又ある人のとりけり。今浪速
る難波村に僑居する男女の主従二人あり女は主とわが死を倚稀る美
人あり。年ハ廿は足らぬれど。多く頭髪を剪たれば。寡婦よりある。長死
病著し療養盡しを世に名留置もあるのあり。妙茶を用ひたりけん

七日なるに瘴のぬと人傳はつらとりの。緯の趣を熟あひよそを先主後よそ。
 七の昼船小乗のこの黄昏は東の船場は著る。難波村をあらわし。只
 見の昏船小乗のこの黄昏は東の船場は著る。難波村をあらわし。只
 管と急ぐ。略道圖らむ。厄難中は行合し。悪棍木を漏さむ。敷き苗しんせ
 めくもの本意は稱へり。これたぬと咽喉る。金瘡の迹を。又加二郎が勘八
 取らせり。實を懐より。とり出しく。せければ。秋布も。後平も。膝の進むを覚ぬ
 ず。感嘆し。く声をきき。中。秋布の塵浄。身と清め。四方は迎
 ひくる。来信む。神仏を拜する。歡ひ。氣色は。顯る。又。衰七。うち。對ひ
 生死存亡定る。二稔を。麻止る。再會の引出物。せられ。仇人の在家。一言
 千金和殿の功。二稔。以来。艱苦の中。隸隨ひ。後平と。異る。今
 下日も。多。肥前の伊万里へ。赴くべし。さう。さう。へ。箇様。と。旅中の艱苦を

初と。偏折。庵る。賊僧。弟邊。蛇岩。其。ホ。謀。れ。既。必。死。及
 ひ。を。各。名。氏。の。救。ま。る。緯。の。趣。を。物。これ。後。平。も。亦。秋。布。が。長。死。病。著。良
 医の奇方を。治る。且。輪。栗。波。女。々。秋。布。が。護。身。衣。を。偷。れ。る。事。の。初
 より。彼。ホ。親。子。が。悪。計。の。趣。を。生。る。有。敷。系。恥。く。身。夜。の。夢。物。々。の。説。も
 出。さ。む。且。衰。七。が。命。め。て。死。十。死。一。生。を。ゆる。再。會。を。壽。可。なく。今。告。られ。仇
 人の所在。末の龍華と。相距る。郡を。異。せ。り。さ。う。ん。古。主。の。舍。弟。浦
 二郎。ぬ。の。舍。兄。の。仇。人。を。敷。き。も。欲。せ。む。と。さ。ら。び。自。しく。あ。め。あ。め。あ。め。あ。め。死
 り。小。て。と。い。は。衰。七。眼。を。睜。す。否。浦。二。の。頼。む。足。ら。ぬ。某。去。々。歳。の。夏
 より。次。の。年。の。春。の。比。ま。鎌。倉。在。り。と。彼。人。の。舍。兄。の。喪。の。下。び。信。せ。む
 死。を。て。彼。を。復。讎。言。の。さ。ひ。ひ。ぬ。人。る。有。右。者。肥。前。は。趣。く
 と。浦。二。の。を。訪。ん。要。る。直。鼠。川。が。宿。所。へ。踏。入。り。討。果。さん。と。勿。論。え。さ。ら

出らばと敦圍く相譚し程は鯨音皆えくを多時より一六今より西の船
 場は到りて出船は乗らんと酒食の價を酒店の小厮に取らんと主後齊一矮樓を
 下立外面出る折秋布忽地うち敬馬死くまをいせん大切なる御教書を失ひぬ
 との事を訝る俊平世衰七まうその故を詰むば秋布答くゆもつとよ仇討免許の
 御教書を這回の日より項は掛しを嚮し輪栗と挑し時初のまきしを覚むる
 振落せり飲まらむの駕籠の裡面ゆり送りけん折命婦丸の短刀ととり
 揚り鞋は納めく身小著るから御教書のゆりも今までも心つる所を心の轉
 輾せり故に鈍まゆいふせんと声戦と悔歎く俊平の咎あは然らば某まの
 ゆりく索取く追著まらるるや船場へ赴たぬとひつ走り去らんとは
 某七急は披留めく今いそ時相りしを虚くと彼奴に至らば其客們は
 怪しめられく還りあると難くはべり村沢氏の三稔以来仇討の供は立わら

未一段中々後室さるの助大力をせむもるるは宜小本意をたるとる某聊は
 より獨彼奴へ直々く御教書を索ぬべり某らも毎て一句あり遅くとも
 二十四日ゆりの身の安危定りる縦解尸人は召るとも御教書目へ至心くとり
 復しとまわらせんとく船場へ赴たぬといふを俊平聴きあき言果るるもあは
 せり秋布をせむ推鎮めくつらつら物れづらとゆべられども大望あれは
 あつたは任せむ壁言はくも留るも忠義我は異るる工らるれば世衰七は俊平より齡も
 倍く五十二近より俗よの處分盛るれどもゆい譯く命は及ぶこのあらは
 とゆらつとらつ僻るあやといふは世衰七は後室さるの仰しを愚案は稱ひひ
 られまらふ別はならんと初まらるるを俊平の今重要時と披留で理り逼りつら
 今らら推辞べくもあらねど願ふ命恙るる遠のらざしと追著る旗津の港
 口へ俟んむといふを世衰七は捨く悍く勇め主後が生死不定の辞別了得ぬ

心よその月を再會せむら浦る鏡の宮影曇る空を恨そく目送りけり

第十八回 假を認る真と做も必因あり

却説秋布の俊平は枝掖をくその夜更團る比西の船場は赴なくその
暁は西國船の旗津へは届は便船しく大急浪速を離れ朝暮たる浪は
揺られ風は接もゆ程は折ら順帆稀きければ是首の港口彼首の入
江は五六日々船歌りしくとふも似る日と強よ主後徒然に堪されは衰
七がひをのこしと潜ひかふひゆぬ日ととも仇人あらん然びこの哀ふ
春の日の遠山の蒼蒼と波の花の眺めらる舟行るから夏は来て肆
月も中漕るける比一日又風りしく長門州大津郡阿川の港口は歌り
ぬ三四日を過さむこの風の吹らとと女高師木の罵るよ同船の行客の倦勞
まするのれヨヌくは皆涙に至りて道遙せざるも稀るければ俊平は秋布は徒

然を慰めりて薦めく陸は登ら先は立導は近死津を徘徊を折ら
人艱出埼のくま走りゆあり俊平これを訝と一人を掖留め縁由を詰
るふと人答そはまばとよあより遙は海邊る向とら出埼の端よ
けるを食食ちその全身の蒼蒼とと且大く腫張る福未病とふれも
勝ら渠のめらひの啞とと生れるるの啞子とて死めや且ても昔ての只
タフシツタ。オんキヨヒタタ。キヨラタタ。キヨカタタ。ラキヨタタ。
ラキヨタタソハカ。と唱るのこの餘へ一言のめらむるの渠が出
埼へ流を寓りへ去々歳の春あやあけん人食死せりととひりて
衝流せり三びるから外へ流は著ゆる不測さ引揚てよく檢る身
體は痠さあれども胸前る温之原来も死さけり試み茶を与ん粥を
ゆや食せん飲とと憐むのヨヌくければ左を右を甦生やく今で向の



石の録後集卷之四

十七 一頁半



石の録後集卷之四

一頁半

親んとく取合し女子の。あく家路を還りけり。浩処は澳のくより。快船一艘
 漕著く。いとをろく。死大漢海賊。あやらんむら。身は袖口廣は栲の夾
 衣の涅色。小漆成るを。一樣な衣。頭は麻織の強偷頭巾。戴は腰の胴
 金入る。長た刀を横跨。足は紺漆の野菟股引。そのを跨ぐ。同色は踏
 皮の武者草鞋を穿たり。有如之而件。暴雄は龍神の洞のほとりより。
 二人をの磯の登り。来く彼を者。左見右見。這奴が。大きく腫張る。試刃
 東西の穴。究竟る。らん。とく。来。このひく。項骨を。と推抗。引立んと
 まる程。乞者。の。大。驚。死。怖。舌。を。吐。合。遠。巡。阿。阿。と。なる。子
 忙騒ぐ。と。大。煙。脂。を。舐。癩。蝦。蟆。の。水。欲。一。氣。形。勢。あ。あ。
 情。と。あ。日。茶。雄。の。の。を。放。又。搔。引。立。宙。吊。と。舟。底。へ
 投る。が。如。く。推。輾。一。と。繩。を。解。船。を。推。切。何。処。と。も。失。は。け。姑。く

あく秋布の。一。袋。の。焼。餅。を。俊。平。に。賣。し。再。び。出。場。は。来。る。れ。彼。乞。者。の
 望。を。失。ふ。惆。然。と。一。く。立。在。む。折。ら。一。箇。の。浦。人。来。は。れ。秋。布。こ。れ。を。呼
 ぶ。と。あ。は。は。り。腫。張。の。乞。者。の。起。臥。を。菰。屋。の。外。中。の。や。は。り。と。問。ふ。
 その。人。頭。を。う。ち。掉。す。の。乞。者。と。然。る。と。あ。ら。ん。彼。乞。者。の。足。痺。た。ま。み。ぐ。ら
 十。歩。も。運。ぶ。と。ゆ。さ。む。去。々。歳。の。春。の。比。より。あ。を。離。る。り。形。を。り。目。今
 ぞ。ぬ。と。不。審。事。と。い。ひ。捨。て。走。去。り。秋。布。備。を。と。る。俊。平。彼。を。呼
 た。は。秋。常。火。十。歩。も。あ。ら。ん。行。歩。不。便。の。身。を。り。俺。們。が。五。六
 町。を。ぬ。く。ぬ。び。ま。つ。る。回。不。忽。然。と。一。く。失。は。る。三。稔。姿。と。あ。ら。ん。俺。們。を
 俟。よ。り。あ。り。けん。寛。鬼。と。い。ふ。の。中。を。あ。ら。ぬ。秋。り。果。し。と。あ。ら。ん。あ。ま。の
 亡。魂。の。あ。ら。ん。と。あ。ら。ん。と。く。久。く。頭。を。ひ。秋。見。ま。ど。も。知。ら。ぬ。面。色

せん。といひうけく。立んとまをを推林示め。否措ぬ吾体より。休むを勞れ
 けぬ。折々。折々。折々。持病の積の原はといひ。塔の浦二郎。とら。三稔以来
 信もあら。金往方も。志を忘れぬ。せぬ。去る。歳。の春。如月の。初旬。如此。の
 事。より。舎兄。瀬川。采女。ぬ。具。鎌倉。赴。又。程。も。還。り
 来。て。んと。辞。別。は。渡。せ。ら。ま。一。宿。も。留。め。あ。む。果。敢。る。は。別。れ。の。介。後。の
 音。耗。絶。一。を。あ。ひ。う。く。鎌倉。より。春。毎。に。旅。商。子。来。ぬ。人。々。の。あ。ら
 男子。を。知。ら。ぬ。や。と。雖。回。々。と。あ。る。より。ま。く。塔。と。の。兄。公。吉。次。ぬ。と。その。春
 月。ま。り。あ。ひ。と。風。の。便。で。あ。つ。の。と。それ。を。今。具。る。より。も。知。ぬ。と。刀。劍
 道。と。遠。死。故。り。と。そ。の。ま。れ。か。も。あ。れ。結。髪。せ。浦。二。と。と。龍。華。遣
 嫁。ら。ま。約。束。る。り。一。あ。ま。う。公。の。病。著。と。く。ま。休。回。の。塔。と。の。母。も。世。我
 逝。り。ぬ。ひ。と。を。泰山。山。似。く。や。塔。と。の。漢。籍。讀。の。癖。も。二。年。の。喪

と。の。折。は。做。す。寄。も。は。る。る。秋。曾。安。く。わ。賣。卜。者。流。小。回。へ。と
 せ。の。春。夏。の。再。會。せん。といひ。ま。の。空。の。あ。ゆ。け。あ。も。驗。る。け。れ。吾。体
 より。言。出。さ。の。と。待。こ。ひ。ん。甘。ま。足。ら。ぬ。齡。り。積。と。瘡。を。覚。る。持。病。も。折
 折。度。ら。ぬ。と。さ。れ。縁。は。盡。む。あ。ら。三。稔。及。ぶ。真。愛。の。を。昔。語。ま。る。日。の
 あ。ら。ん。環。り。あ。せ。を。樂。み。小。氣。惱。々。と。思。ひ。あ。ると。慰。め。ら。ま。と。糸。秋。の。報
 む。良。ま。さ。醫。を。團。扇。の。風。の。便。で。ま。あ。ら。ぬ。人。を。恨。不。樂。乾。さ。ぬ。袂。小
 尚。残。る。刺。附。草。引。く。搔。捻。り。叶。母。さ。の。常。あ。ら。ぬ。物。体。る。は。る。宣。小
 う。る。世。小。嫌。遠。死。男。女。の。あ。ら。中。あ。ら。ぬ。と。親。あ。物。を。あ。ら。ぬ。郎。の。往。方。の
 あ。ら。波。も。寄。る。と。日。を。樂。ま。ら。ぬ。何。と。も。あ。ら。ぬ。と。親。あ。物。を
 恙。も。あ。ら。ぬ。是。ま。ま。した。る。あ。ら。ぬ。と。あ。ら。ぬ。と。親。あ。物。を
 あ。ら。ぬ。と。宣。小。の。言。と。の。表。裏。あ。ら。ぬ。寤。寢。あ。ら。ぬ。曉。の。藍。あ。ら。ぬ

見えん郎の面影それと云はる孝行を郎の誠心の貞操ゆく世の人
 不め 答言られもせむらう。娛しやうんを家尊家母の昔比へ色情の科儀り
 つま 罪の報ひ来く任せぬの言ふは秋と云ふ思心知れども因縁なれば
 ぬらむらう。あらしのこのころら吾侪が故御の豊後る玖珠の豆町るけり
 ててあや 父々親の名の二三六氏の折竹と喚れる御小ゆりける柱屋に母さるる亡
 ろうあひて後の母小男見あり吾侪のあは異母る弟あはゆりぬれぬこれの
 とし 年あありけんうち續てる水損早損は年の貢の懈と云く領主の債の
 大々るらね後の母の相計ひく吾侪が十五なりける秋長門の赤間へ售遣
 られ其知より遠く京師る六條へ賣更られく河竹の瀬に沈きも親のあ
 とのひるから昔里のる灰は使えぬ折吾侪の身價を後の母の私しく
 密夫とまきりぬひく。かくても貢の未進の済む公のそれを氣に病て

つひ 竟見よ身まうりのあひく。家小侍へ田圃も貢の未進と彼此の債のあみ
 と 取らまう。送る兄弟のまうり。孤るれ里人の憐愍けく由縁を討め肥前
 州へ遣し。一郷士は奉公させしと信えし。信もま。叔亦後の母さるかの
 みまを 密夫と共侶は宰府のまは赴き。細煙をさる間もく次の年の春の比
 と死のけ 時疫よりくその身はら。彼密夫もあまうりぬれと人傳のまはえり。かく
 まく 幸る死吾侪るれ。苦思の年限。ともまうる。死里も。いそ生涯の
 身を任する信ある客もまると。折を折る。你の父々公の主君の非義を諫めて
 鎌倉を身退死京師に到りて文学武藝を人教ま。下京は不樂住
 まく。久後の女夫と契大なり。長年際を候ひて。夫の當時浪人の貯
 禄ともまうらね。ゆふ夜も稀まうり。比上野より年毎は京上るる絹

商人木瀬屋敷金吉と云客の吾侪もあつくあふあり。償身をせんとおれ
 一六旬月貴れ存世渡りく。疎すしる限りもるたを。月然らぬ面色してはくと
 尋思どつるふあふあう危く悪心萌して女子の智計も當坐の身脱れ償
 出されて上野へ伴ももく道中ゆく。一日忽地身を隠し野中のゆら埋井の
 二夜さ明して追ふの人を彼此へ遣過し遂に下京へ逃ぐる。余の父多々公の
 如此々々と告ぐこの身を憑し小父多々公の素より心正しく苟且も枉まは所
 行を好むるの及性されば最大う敬馬なごせん術もさるえさるら亦云葉々然りも
 あれば已てをぬぎ吾侪どねく舟行を西へまらる此の由縁を心當りこの里小苗
 子文武の技藝を彼此人誨く月日と過しあふあふまて行きてよれ弟
 子の附し六田圃を言々購求めく御士あるるゆひあ有如之而余の七才の比
 父多々公の風眼より隻目と失ひ風濕さよ病煩ふく隻足少許痺ぬひ

ぬこれより後の諸人小武其藝を教むるてもゆるる衣食も緯缺く身あはれ
 弟子達小辞し隠居して浮世をさく送りあごうこの風眼風濕は暑衣あは
 身が欺詐で償身の客の出るるとと潜すあひひと。嗟嘆あ折あ母あ
 べとのひ難し吾侪の昔を罪深うこれらよと思惟る親の因果の子は報ひ
 や文学武其藝才聞て家柄もよ塔がひも縁と結ども婚姻の敷正
 只一宵の添臥ゆせども二檢別れる余の藝を傷より共は氣病病む親心
 悔く返らぬとさうらう子に隠まよのまれば懺悔話説つる正る親と思はれ
 恥しとさうらう涙もみる長物とをさく悲し糸小萩が慰めらて共侶も夕
 露を置く袖笠の方より依りた忘る泣自のその隠せも堪ぬ涙よこれとて入
 相の鐘の声日没果々鎮守の本林へ帰る鳥も友音も鳴る枕天残うち
 瞻く要る言よ時を移して夜の乾んも忘れりとり納れぬと親子と戸張剥



石動録後集卷之四

廿四

千五百五

Shunji



伊万里の宿
母を
慕ふ
娘
郎

なまら

石動録後集卷之四

千五百五

しつ戸をのこせり。序は背門を鎖ま。とるえまをせと先ま立と奥庭望々
 ゆく母の後は後ふ系秋の盃引提ていどげは背門のふを赴たけこの日由既小暮
 初て人自りる王基時仇人の所在を索當て外面は秋布主後俊平の庭
 門を諸折戸を推せりして鼠川氏のみ秋の下の在宿も秋と呼門声はあ
 トの公羽へ人肌を炬燵は倚て臥る枕を僅は搦て根塚のふをのり何れあり
 末多ひるとい声はくまり入る主後障子を蹴ゆる鼠川加二郎とくはは汝が
 為よ敷される瀬川采女吉次が妻秋布若黨村澤俊平の親良人の仇主の
 雙言脱へせとと刀をもち振り齊一進めあ下の公羽の何れをと敷馬にわら
 枕をのり秋布が敷る刀尖を受留め炬燵櫓を看めると雲時二人を柱へ
 けり畢竟秋布主後とあ下の勝負のふをどる次の巻は解分るを聴ゆる
 松浦佐用媛石魂録後集卷之四終

石魂録後集七巻を覽る上下二帙とるを附言
 今茲夏月予大恙あり醫某幸ひ効を奏め八月七日病床を去る
 いま本復せざりかむ勉稿を起せりこの編七巻即は只直意のそ
 きが書画の面工速めその事を了るのが刷人のま刀を竟むとわく且四巻を
 覽る早春をを發販し遺る三巻もうち續きま程さくせべとの千公羽軒の性急
 なる時の便宜もあものるか遂めその意を任りあれども這後集第十八回の
 末伊萬里の段より五六七の三巻に至りて者官ややく佳境め入るべしとる七巻
 するも揃へ傳二度の親きる本意ありとも世の賣某ゆの半色小色さといふの
 むの大魚の解賣豆腐の半挺皆是便宜の所行る千公羽軒の量簡も大なる
 そのるるべしとる又その書の前集ゆ王嶋清繩が亡滅せり人寡る後集されが只
 秋布と俊平と主従二人の道のたを三巻をまらぬ綴做せり後の侍儲めるは
 るんかま五六七の三巻の壁言の傀儡棚る三四の切と決りまは下帙も程さ
 發兌のよを江湖の君子の報んとく戲房の意味を識せり

因めい... 冊子物語のありて二十年及ぶるその
刊板若干失せし全く故を以て久し刷出さるゆりて板をもをわらぐ求む
足らざるを補刻し予の校訂を請ひて恣に画を易文を行脱しと再刷せり
のりと復ぬ所云括頭巾縮緬紙又化競刃三鐘の餘る海わべしあれら下アガ
名辨めりとのふも補刻し予が校正を歴せり他人のふり成るのりるまが下アガ
全作とをへかき古板の戲著を物々しくいふ大人氣をふ似ことと名を售るが
腌曆さぬ此工とを述るゆかん

曲亭主人

○曲亭翁著篇松浦佐用媛石魂録後集画工筆工削刷目次

出像

溪齋英泉畫



浄書

卷ノ一 卷ノ四
卷ノ二 卷ノ三 并 序目

谷 金 川
筑 波 仙 橘

刷人

原 喜 智

松浦佐用媛石魂録後集

五の巻 六の巻 七の巻

右三巻近日引つぎ賣出せし後集はての天趣
向との巻は有るが家督出せし淨覽とて紙の

仙女香 一色四十八銅
美玄香 一色四十八銅
両天傘 青天雨天と名ぬき室のうら

近世説美少年録

曲亭翁著

松浦佐用媛石魂録前集 右同作 三巻

文政十一年戊子春正月吉日發行

- 大坂心齋橋筋博労町
- 河内屋茂兵衛
- 江戸小傳馬町三町目
- 丁子屋平兵衛
- 同 横山町二町目
- 大坂屋半藏梓

家傳神女湯 一色代百銅
精製奇應丸 大色代五茶 中色代五茶 小色代五茶
熊胆黒丸 一色代五茶
婦人丸 一色代五茶
弘製 神田明神下 同朋町東横町 本家滝沢氏
同取次所 横山町二町目 賣茶店 大坂屋半藏

初集五巻は己丑の正月家奉送
此度多くとり知し後集と同時ゆ愛ふ
やの前集とてゆふは後集よりなり

